

藏人何ニカセシト。既ニシテ清盛ノ兵至ル。部將伊藤景綱二子忠清、忠直ト先進ム。爲朝射テ忠直ノ胸ヲ洞ス。矢忠清ノ鎧袖ニ及ブ。一軍警悚シ、敢テ進ム者ナシ。清盛退ク。義朝ノ軍次ギ至ル。爲朝遙ニ義朝ヲ見テ、以爲ヘラク、之ヲ射落サシコト甚易シ。然レドモ父ト兄トノ間ニ如何ナル密約アルモ亦知ル可カラズト。乃コトサラニ義朝ノ整ヲ射斷ル。義朝馬ヲ進メテ曰ハク、汝本善ク射ル。今何ソ精ナラザル。爲朝曰ハク、家兄ヲ憚リ取テセザルノミ。若假借セハ請フ中ヲソテ命ゼヨト。矢ヲ注ギテ將ニ放タントス。事已ニ急ナリ。深草清國進ミテ義朝ノ馬前ヲ遮ル。弦ニ射テ之ヲ斃ス。兩軍格闘シテ互ニ勝敗アリ。義朝果シテ風ニ乗シテ火ヲ放ツ。煙焰宮ヲ掩ヒ上皇ノ軍拒グコト能ハズ。上皇倉皇トシテ馬ニ上リテ出テ給フ。騎馬ニ慣レ給ハザルヲ以テ、藏人平信實扶掖シ奉リヌ。源爲義平、家弘等從ヒテ如意山ニ赴ク。山路甚峻難ナリ。上皇馬ヨリ下リテ步行シ、絶神シテ復蘇リ、從者ニ宣ハシ、朕神耗キ力屈シ、復行クコトヲ得ズ。追兵此ニ及ブモ亦害ヲ加ヘザルベシ。汝ガ輩速ニ去レト。諸將固ク從ハシコトヲ請ヒシカドモ許サレズ。乃止ム。コトヲ得ズ啼泣シテ去ル。唯平、光弘肯テ去ラズ。上皇ヲ蹊間ニ匿シ

上皇軍敗レサレ給フ

慶院

奉リ。日暮ヲ待チ負ヒテ行キ。途ニ與テ得テ之ヲ奉ズ。上皇遂ニ知恩院ニ入りテ薙髮シ給フ。覺性法親王狀ヲ以テ開ス。天皇乃式部丞源重成ヲ遣シテ之ヲ守ラシメ、勅シテ上皇ヲ讃岐ニ遷シ、初メ松山ニ置キ、後志度ニ徙シ給フ。上皇身血ヲ以テ五部ノ大乘經ヲ寫シ、三年ニシテ功ヲ畢ヘ之ヲ京師ニ送り、覺性法親王ニ依リテ安樂壽院ニ藏セント請ヒ給ヒキ。天皇許シ給ハズ、之ヲ卻還シ給ヘリ。上皇大ニ悲リ自舌ヲ齧ミテ血ヲ出ダシ、軸毎ニ書シ給ハク、願ハクハ大魔王トナリテ、天下ヲ惱亂セン。謹ミテ五部ノ大乘經ヲ以テ惡道ニ廻向セント。是ヨリ復髮ヲ剃ラズ、爪ヲ剪ラズ、衣ヲ更メズ、憔悴骨立、悉々トシテ死ヲ俟チ、長寛二年紀元千八百廿四年八月ニ至リテ崩シ給フ。御歳四十六ナリ。世ニ之ヲ讃岐院ト稱ス。崩後逆亂變災相繼ク。世以テ怨魂ノ祟ル所トシ、勅シテ廟ヲ立テ、奉祀セラレキ是ナリ。

○二源平骨肉相食ム

爲義上皇ヲ辭シテ諸士ト匿ル。追兵至ル。從兵戰死シテ零盡ク。因リテ出家シテ出テ降り、義朝ニ由リ命ヲ請ハントス。爲朝脱クニ關東ニ赴キ、三浦島山、小山田等ノ兵ヲ藉リ、再舉ヲ計ルヲ以テス。從ハズ。諸子

清盛叔父ヲ
斬リ朝父ヲ
斬ル

爲朝伊豆ニ
流サレ

琉球ノ舜天
王

ノ輕擧ヲ戒メテ之ヲ散去セシメ、黒谷ニ低リテ薙髮シ、奴ヲ遣リテ旨ヲ義朝ニ
通ズ。義朝之ヲ家ニ迎ヘ、累奏シテ滅ヲ請フ。許サレズ。時ニ清盛ノ叔父忠正モ亦
清盛ニ就キ宥死ヲ乞フ。清盛源氏ヲ屈セント欲シ、以爲ヘラク、我若忠正ヲ斬ラ
ハ、義朝當ニ爲義ヲ斬ルベシ。若斬ラズバ固ク争ヒテ斬ラシムルニ便ナラント。
乃叔父ヲ斬ル。義朝亦父ヲ斬ル。爲朝逸去シテ筑紫ニ奔ラント欲ス。既ニシテ
疾ニ罹リ、浴中ニ擒ヘラル。廷議斬ニ決ス。然レドモ非常ノ勇士ナルヲ以テ、死一
等ヲ減シ、臂筋ヲ斷リテ伊豆ノ大島ニ流ス。居ルコト五旬ニシテ臂力奮ニ復ス。
因リテ大島、三宅、八丈ノ諸島ヲ領シ、其ノ租稅ヲ奪ヒ、勢日ニ加ハル。又伊豆ニ往
來シテ暴横ヲ極ム。朝廷伊豆介工藤茂光ニ命ヲテ之ヲ討タシム。爲朝射テ其艦
ヲ沈メ、刎腹シテ死ス。或ハ云フ。爲朝逃レテ琉球ニ至ル。其ノ子ハ即琉球ノ舜天
王ナリト云フ。保元ノ亂源平ノ武士兩軍ニ分レ、父子相闘ヒ兄弟相殺ス。骨肉
ノ相軋ルコト古ヨリ此ノ如ク慘ナルハアラズ。

○三節 後白河上皇 保元ノ亂定リシ後、右大臣藤原、宗輔、太政大臣トナリ、内
大臣藤原、伊通左大臣トナリ、權大納言藤原、基實、右大臣トナリ、權大納言藤原、公

二條天皇

後白河上皇
ノ院政

藤原通憲ノ
才學

教内大臣トナル。天皇記録所ヲ開キ政ヲ聽キ給フ。然レドモ大小ノ機務ハ専少
納言藤原、通憲ニ委任セラル。天皇美福門院ニ母トシ事ヘ給フ。門院皇子守仁親
王ヲ養ヒテ皇太子ト爲ス。幾バクモナクシテ天皇位ヲ皇太子ニ讓リ給ヒヌ。之
ヲ二條天皇トス。是ヨリ五朝ヲ經テ建久三年ニ至ルマテ三十五年ノ間、後白河
上皇院中ニ在リテ政治ニ干涉シ給ヘリ。其ノ擁立シ給ヒシ五帝皆幼冲ニ坐ス。
而シテ上皇機務ヲ專決シ給フ。白河鳥羽二帝ニ似テ而モ人ヲ知リ給フ明ナシ。
是ヨリ亂逆相踵キ、武臣其ノ間ニ乘ツテ權勢ヲ收メ、大權一タヒ去リテ、容易ニ
回復スベカラザルニ至レリ。

○四節 藤原、通憲(信西) 通憲ハ大學、頭藤原、季綱ノ孫ナリ。博學多識ニシテ
古典ヲ暗練シ、兼テ佛教天文ニ通ズ。鳥羽法皇常ニ政務ヲ諮詢シ、關白賴長モ
亦之ヲ師トセリ。通憲少納言ニ任ゼラレ、薙髮シテ信西ト號ス。法皇嘗テ熊野ニ
幸シ、宋僧淡海ヲ召見シ給フ。言晤通ゼズ。通憲譯語シ、應對流ル、ガ如シ。淡海曰
ハク、子宋ニ學ブカ。抑宋人カ通憲曰ハク、我嘗テ或ハ異邦ニ使スルコトアラン
ヲ謂フ。是ヲ以テ略、其ノ語ニ通ズルノミト。著ス所本朝世紀、法曹類林及日本紀

註二卷アリ又歌舞ヲ好ミ、曲中ノ佳ナル者ヲ撰ビ、妓女磯、禪師ニ教ヘテ之ヲ舞ハシム。白拍子此ニ始マル。保元兵亂ノ後益々重用セラレ其ノ子俊憲藏人、頭ニ任ゼラル。年來内裏圯壞シ、修繕ノ議起リシカドモ未行ハレサリキ。是ニ至リ通憲奏シテ五畿七道ニ課シ、布算シテ修繕セシメ、年ヲ除エテ成ル。嵯峨天皇以後死刑ヲ朝臣ニ加ヘザルコト久シ、保元ノ亂ニ源、爲義、平、忠正等十八人降テ請フニ及ビ、通憲竟ニ死ヲ以テ論ズ。通憲ノ妻ハ後白河天皇ノ乳母ナリ。故ニ天下ノ事大小トナク與リ聞カザルハナシ。二條天皇立テ給ヒ、政事後白河上皇ノ院中ヨリ出ヅルニ及ビテ、通憲威權益々熾ナリ。終ニ驕慢ニ流レ、言行ヲ慎マズ、多ク人ノ怨ヲ買ヒ、爲ニ平治ノ亂ヲ惹起セリ。

○節五平治ノ亂 後白河上皇院政ヲ聽カントシ給ヒ、二條天皇之ヲ欲シ給ハズ、因リテ不和ニ坐ス。上皇權中納言藤原、信賴ヲ親眷シ給フ。通憲之ト隙アリ。信賴近衛大將ヲラシメテ請フ。通憲之ヲ避ル。源、義朝其ノ女ヲ以テ通憲ノ子是憲ニ嫁セント請フ。通憲武人ヲ輕蔑シテ許サズ、然レドモ平、清盛ハ權勢日ニ熾ナリシヲ以テ、通憲男成憲ノ爲ニ其ノ女ヲ娶ル。義朝之ヲ憚バズ。信賴因

リテ深ク義朝ト結ビ、通憲ヲ殺サントテ謀ル。平治元年紀元千八百十九年清盛熊野ニ如ク。信賴、義朝間ニ乘テ兵ヲ擧グ。此ノ日白虹日ヲ貫ク。通憲宮中將ニ變テラントスルヲ察シ、直ニ三條殿ニ至レバ、上皇方ニ宴遊シ給ヘリ。通憲其ノ樂意ヲ破ラシメテ慮リ、密ニ宮女ニ告ゲテ出テ、馬ニ策チテ大和田原ニ奔ル。信賴義朝夜三條殿ヲ犯シ、火ヲ放チテ之ヲ燒ク。烟煙天ヲ蔽ヒ、衛士戰死シ、朝臣宮女火ニ赴キ、井ニ墜リ、一時慘狀ヲ極ム。上皇倉皇トシテ車ニ乘テ宮ヲ出テ給フ。信賴ノ兵之ヲ擁シテ内裏ニ入り、一本御書所ニ幽シ奉ル。信賴自大臣大將トナリ、通憲ヲ索メ其ノ宅ヲ燒キ、多ク婢妾ヲ殺ス。通憲途ニシテ變ヲ聞キ、惶窘シテ爲ス所ヲ知ラズ。地ニ穴ホリテ自埋モリ、竹筒ヲ以テ氣息ヲ通ズ。信賴其ノ奴ヲ捕ヘテ鞠問シ、通憲ヲ獲テ其ノ首ヲ斬リ、獄門ニ梟ス。平、清盛ノ子弟六波羅ニ在リ、使ヲ熊野ニ馳セテ變ヲ告グ。清盛行、兵ヲ集メテ京師ニ入り、名簿ヲ信賴ニ致シ、伴リテ他志ヲキテ示ス。信賴政ヲ爲スコト十日、其ノ黨分裂シ、檢非違使、別當藤原、惟方等謀テ清盛ニ通シ、夜火ヲ二條大宮ニ放ツ。内裏ノ守兵宮門ヲ塞テ、赴キ救フ。其ノ間ニ天皇婦人ノ車ニ乘リ、潛ニ内裏ヲ出テ、清盛ノ六波

信賴朝軍
敗ル

源賴朝伊豆
ニ流サル

武臣大政ニ
參與スル始

(五五二)

羅ノ第二ニ幸シ給フ。關白以下公卿百官相踵ギテ至ル。清盛騎兵三百ヲ以テ之ヲ迎ヘ奉ル。而シテ上皇ハ仁和寺ニ入り給ヘリ。翌日清盛子重盛ヲシテ兵ヲ率テ大内ヲ攻メシム。重盛伴リ敗レテ退ク。蓋内裏新ニ成リ、又兵火ニ罹ラシムトテ恐レテナリ。義朝之ヲ逐ヒテ六條河原ニ至リ、重盛ノ爲ニ敗ラル。信賴捕斬セラル。義朝ハ逃レテ尾張ニ至リ、家人長田忠致ニ依リシニ、遂ニ忠致ノ爲ニ殺サレタリ。義朝ノ子義平、朝長督捕斬セラル。獨賴朝清盛ノ繼母池禪尼ノ憐憫ニ因リ、死ヲ宥メテ伊豆ニ流サル。又幼子今若、乙若、牛若ハ、清盛其ノ母常盤ノ色ヲ愛シ之ヲ妾トシタルニ因リテ死ヲ免レ、寺ニ入りテ僧トナルヲ許サル。之ヲ平治ノ亂ト云フ。是ヨリ源氏ノ宗家中絶セリ。多田源氏ノ一族宿衛スレドモ復振ハズ。獨源賴政ノミ清盛ニ屬シタルヲ以テ、稍勢力ヲ保ツヲ得タリ。之ニ反シテ平氏ハ權勢日ニ加ハリ、清盛軍功ニ因リテ參議ニ任ゼラル。武臣ノ大政ニ參與スルヲ茲ニ始マル。天皇上皇ノ院政ヲ拒ミ、關白忠通ト萬機ヲ決行シ給ヘリ。而シテ上皇モ亦院ニ在リテ政ヲ行ヒ給ヒシヲ以テ、政令ニ途ニ出テ朝憲頗紊レヌ。

第五十四章 平清盛ノ權勢

○節一 文武ノ關係一轉ス 保元平治ノ亂ノ日本歷史上ニ一大關係アル所以ノモノハ他ナシ。此ノ時ヨリ文武其ノ地位ヲ一轉シタルニ因ルナリ。此ノ以前ニ於テハ政權ハ公卿大夫ノ專有ニ屬シ、其ノ家ニ生レサル者ハ、萬能アリトモ顯官ニ就クコトヲ得ズ、重要ノ地位ハ悉藤原氏及皇族ヨリ出テタル數氏ノ占ムル所ト爲リ、其ノ他ノ者ハ地方ニ於テイカニ富豪ナリシニモ關ラズ、朝廷ニ於テハ地下人トシテ輕蔑セラレタリ。三大臣ヲ三公ト云ヒ、三位以上及參議ヲ卿ト云ヒ、之ヲ合セテ公卿ト稱ス。又五位以上ヲ大夫ト云ヒ、共ニ昇殿シテ天皇ニ親近ス。因リテ殿上人ノ名アリ。六位以下ハ昇殿ヲ許サレズ。故ニ地下人ト云フ。殿上地下ノ間ニ交際上著大ノ懸隔アリ。而シテ大寶令ニ於ケル舊位ノ制ハ、流レテ世襲位官ノ例トナリ、五位以上ノ子ハ、才學功勞ニ依ラズシテ八位以上ニ叙セラル、制ナリシヲ以テ、易ク上位ニ登ルヲ得シカドモ、之ニ反シテ六位以下ノ子ハ、初位ニ叙セラル、スラ容易ノ事ニアラザリキ。サレバ三

公卿大夫ノ
殿上人地下

地下ノ諸大夫

清盛公卿ニ列シ文武ノ關係一轉ス

公ニ達スルコトヲ得シ者ハ藤原氏ノ外唯久我ノ一家アリシノミ。大夫モ亦藤原氏ノ族其ノ大半ニ居リ、其ノ他ハ在原、紀、大江、清原等數家アリシノミナリ。此ノ如ク位階ノ區別ハ門地ノ懸隔トナリ、其ノ家格ニ非ザル者ハ數十年ノ間ニ幾度ノ功課ヲ經テ、漸五位以上ニ達スルモ、猶其ノ素生ノ貴カラザルガ故ニ地下ノ諸大夫ト稱シ、殿上ノ大夫ニ比シテ遙ニ下位ニ立チタリキ。舊ハ王族名氏ヨリ出テタル者ニシテ猶且然リ。况ヤ武士ヲヤ、京都ニ在番シテ北面ニ選拔セラル、其ハ即非常ノ名譽ニシテ、衛門又ハ左右衛士ノ大尉ニ任ゼラル、其ハ則極點ノ榮進ナリシカドモ、是皆從六位相當ナリシナリ。平、忠盛、白河天皇以下五朝ニ歷事シ、鳥羽上皇ノ寵ニ依リテ但馬守トナリ、刑部卿ニ擢テラレ始メテ昇殿ヲ許サレシニ、群卿之ヲ輕蔑シ、節會ノ夜之ヲ刺サントセシトキ、忠盛木刀ヲ帶ビテ巧ニ免レタルハ、世ニ著キ說話ナリ、然ルニ政院中ヨリ出ゾルニ及ビ、藤原氏ノ三公其ノ實權ヲ失ヒ、法皇上皇、武士ヲ以テ爪牙トシ給ヒシヨリ、文武ノ懸隔漸破レ、平治ノ亂ニ信賴自大臣、大將トナリ、清盛之ヲ滅シ、功ニ因リテ參議ニ任ゼラレ、一躍シテ公卿ニ列セシヨリ、文武ノ關係茲ニ一轉セリ。

六條天皇

○二節 平、清盛太政大臣 清盛歷進シテ從二位權大納言ニ至ル。二條天皇崩御マシマシ、皇太子立チ給フ。之ヲ六條天皇トス。甫メテ二歳ニ坐ス。清盛ノ

高倉天皇

妻ノ姉、後白河上皇ノ宮ニ入リテ第五子ヲ生ム。清盛勸メテ之ヲ皇太子ニ立テ奉ル。皇太子ハ即天皇ノ叔父ニシテ、天皇ヨリ長ク給ヘルコト三歳ナリキ。

清盛太政大臣トナル

天皇在位四年ニシテ位ヲ皇太子ニ讓リ給フ。之ヲ高倉天皇トス。後白河上皇尙政ヲ院中ニ聽キ給フ。清盛外叔ノ姻ナルヲ以テ、勢ヲ恃ミテ驕傲ナリ。上皇之ヲ厭ヒ給ヒシカドモ、亦如何トモス可カラズ。積憤ノ餘、薙髮シテ法皇ト稱シ、專佛法ニ歸シ給ヘリ。而シテ清盛ハ心竊ニ之ヲ喜ベリト云フ。清盛六條天皇ノ仁安元年紀元千八百廿六年正二位内大臣トナリ、二年、從一位太政大臣ニ陞リ、隨身兵仗ヲ賜ハリ、輦車宮中ニ入ルヲ聽サル。左右大臣ヲ經ズシテ太政大臣ニ進ム者、前ニ藤原、信長一人アリシノミ。三年、清盛五十一歳ニシテ重病ニ罹リシカバ、存命ヲ祈ラシガ爲ニ、薙髮シテ清蓮ト號シ、後淨海ト改ム。世ニ之ヲ太政入道ト云フ。然レドモ出家ハ名ノミニシテ、天下ノ政治ハ依然其ノ手ニ出テ、放濫濫溢ナリ。常ニ六波羅ヲ居テ庶務ヲ理シ、別館ヲ西八條ニ構ヘ、又別莊ヲ攝津ノ福原ニ營

ミ亭樹風流、四時ノ觀ヲ極メタリ。

○節一門ノ繁榮 清盛既ニ權勢ヲ得テ尙飽カズ、自外戚タラシムコトヲ欲

清盛外戚ナル

シ、其ノ女徳子ヲ納レテ女御トス。徳子尋イテ中宮トナル。建禮門院是ナリ。清盛ノ弟經盛、教盛ハ參議トナリ、賴盛ハ權大納言トナル。又子重盛ハ内大臣トナリ、宗盛ハ近衛大將トナリ、知盛ハ參議トナリ、重衡ハ左近衛權中將トナル。平氏ノ一門ニシテ公卿タル者十六人、殿上人三十餘人アリキ。其ノ他京官ニ就キ、或ハ諸國ニ守タル者六十餘人ナリ。平氏ニ縁故アル者ニ非ザルトキハ官職ヲ望ム可カラズ。一門ノ所領三十餘國ニ及ビ、莊園五百箇所ヲ有シ、富皇室ニ比ヒタリ。源平盛衰記ニ曰ハク、抑日本秋津島ハ僅ニ六十六ヶ國、平家知行ノ國三十餘ヶ國、既ニ半國ニ及ベリ。其ノ上莊園五百箇處、田島ハイクラト云フ數ヲ知ラズ。綺羅充滿シテ堂上花ノ如ク、軒騎群集シテ門前市ヲ爲スト。又平家ノ一族が事ヲ構ヘテ多ク社寺ノ莊園ヲ侵奪セシコトハ、莊園考ニ其ノ證ヲ舉ゲタリ。

平氏ノ富貴

○節四鹿谷ノ密謀 時ニ法皇ノ執事ニ權大納言藤原成親アリ。重盛宗盛が己ニ越エテ近衛大將ヲ得タルヲ憤ル。法皇ノ近臣西光亦清盛ニ宿怨アリ。治承

藤原成親等平氏ヲ滅ル

元年百廿七年八法皇ノ密旨ヲ奉マテ與ニ平氏ヲ滅ボサント謀リ、源行綱、平康頼法勝寺、執行俊寛ト結托シ、鹿谷ノ山莊ニ會ス。法皇モ亦之ニ臨マントシ給ヒシニ諫ムル者アリテ止メ給ヒキ。而シテ未兵ヲ舉ゲザルニ、行綱約ニ背キテ之ヲ清盛ニ通マタリ。清盛大ニ驚キ戎裝シテ親族ヲ會シ、議シテ曰ハク、院宣一タヒ出テバ、則我賊名ヲ得、之ヲ悔エトモ及バザラン。因リテ我先事ヲ舉ゲ、法皇ヲ鳥羽宮ニ徙シ奉ルカ。又ハ我が第二幸セシメ奉ラント。國族之ニ從フ、獨重盛切諫シ、事遂ニ寢ム。既ニシテ西光ハ斬ラレ、或親ハ配所ニ殺サレ、子成繼及康頼俊寛ハ鬼界ガ島ニ流サレキ。其ノ翌年清盛ノ女徳子皇子ヲ生ミ奉ル。皇子ハ即安徳天皇是ナリ。清盛外戚タル志望達シ、心益驕リシカド、重盛常ニ善ク之ヲ諫メテ無道ニ陥ラシメザリキ。然ルニ三年ニ至リ重盛薨セシカバ、上下爲ニ絶望セリ。重盛仁義ヲ重シマ名分ニ明ナリシヲ以テ、大ニ世人ニ敬慕セラレタリ。徳川家康嘗テ曰ハク、古今ノ人物中武將ノ模範トスベキハ小松内大臣ナリト

清盛法皇ヲ幽セントス

平重盛ノ賢明

○節五關白ヲ流シ法皇ヲ幽ス 藤原氏ノ勢力ハ既ニ衰ヘタリト雖、攝關

清盛ノ專横

ノ職ハ尙其ノ家ニ在リシヲ以テ、清盛ノ權威増長スルニ從ヒテ衝突ヲ免レザ
リキ。法皇關白基房殿ト謀リ、故重盛ノ所領越前ヲ收メ、又清盛ノ女婿藤原基
通ヲ措キテ、基房ノ子師家ニ中納言ヲ授ケ給ヘリ。時ニ清盛福原ニ在リ、兵數千
騎ヲ率テ到リ、京師騷動ス。清盛子重衡ヲシテ奏セシメテ曰ハク、臣時勢ヲ觀
中心安キコト能ハズ。若一旦罪ヲ得バ悔エトモ及ビ難カラシム。願ハクハ骸骨ヲ
賜ハリ、東宮ヲ奉テ退養セシム。天皇大ニ驚キ、即日基房父子ノ官職ヲ停メ、基
通ヲ以テ關白トシ給フ。法皇亦清盛ニ謝シ、爾後一切政務ニ關涉セザランコト
ヲ誓ヒ給ヘリ。清盛、重盛ノ亡後未七七ヲ出テザルニ、其ノ所領ヲ收メシ非ヲ鳴
ラシ、法皇ニ親近スル公卿北面三十九人ノ官職ヲ奪ヒ、基房ヲ太宰權帥ト爲シ
宗盛ヲ遣ハシテ法住寺殿ヲ圍ミ、法皇ヲ鳥羽宮ニ幽シ奉リヌ。

安徳天皇

○六源、頼政兵ヲ擧グ。翌年、清盛天皇ニ請フ所アリ、天皇遂ニ位ヲ去リ、皇
太子立チ給フ。甫メテ三歳ナリ。之ヲ安徳天皇トス。人清盛ノ專恣ヲ惡ム。基實ノ
子基通攝政タリ。基通始メテ近衛ト稱ス。時ニ源氏ノ將士ハ、保元平治ノ亂後
跡ヲ朝廷ニ絶チ、獨頼政アリシノミ。頼政ハ頼光五世ノ孫ナリ。穎敏ニシテ武略

源三位頼政

アリ、尤射術ニ精シ、又和歌ヲ善クス。白河法皇選拔シテ藏人トシ、兵庫頭ニ進メ
給フ。保元ノ亂ニ頼政勤王ス。平治ノ亂ニ去就ヲ決セズ、六條河原ニ陣シテ形勢
ヲ觀望セシニ、義平ノ兵ノ爲ニ衝カレ、意ヲ決シテ六波羅ニ赴キ、清盛ニ屬ス。然
レドモ久シク昇殿ヲ許サレズ。和歌ヲ作りテ寓懷ス。天皇之ヲ憐ミ、仁安元年正
五位下ニ叙シ、昇殿ヲ許シ給ヘリ。高倉天皇ノ時、嬪夜宮屋ノ上ニ鳴ク。天皇之
ヲ不祥トシ給フ。頼政射テ之ヲ殺ス。治承二年、清盛頼政ノ齡七旬ヲ過キテ淹滯
セルヲ憐ミ、奏請シテ從三位ニ叙ス。因リテ源三位ノ稱アリ。頼政能ク世ト浮
沈スルヲ知ル。然レドモ清盛ノ兇暴日ニ甚シキヲ以テ、默視スルニ堪ヘズ。終
ニ平氏ヲ滅ボサソコトヲ圖リ、治承四年和元千八百四十年以仁王ヲ奉テ兵ヲ擧グ。以
仁王ハ高倉天皇ノ庶兄ナリ。令名アリシカドモ、母賤シキヲ以テ親王ニ列セラ
レズ。是ニ至リテ頼政ノ爲ニ推サレ、令旨ヲ諸國ニ頒チテ清盛ノ罪ヲ數ヘ、又別
ニ一通ヲ作りテ前右兵衛佐源頼朝ニ賜ヒヌ。頼政謀ノ既ニ洩レタルヲ察シ以
仁王ヲシテ園城寺ニ據ラシム。園城寺ノ僧兵延曆寺、興福寺ニ移牒シテ援ヲ請
フ。此ノ三寺ハ並ニ平氏ノ爲ニ領寺ヲ奪ハレ、平素清盛ヲ惡メルヲ以テ、互ニ相

以仁王金旨
ヲ諸國ニ發
セラル

賴政軍敗レ
テ自殺ス

清盛遷都ノ
所以ヲ決セシ
ル

幸御所

應授シタリ。清盛將士ト譏シ、米絹ヲ以テ延曆寺ニ贈ハセ、賴政ニ畔カシム。賴政謀成ラズ、王ヲ奉シテ奈良ニ赴ク。清盛、知盛、重衡等ヲシテ兵二萬ニ將トシテ之ヲ追撃セシム。賴政宇治橋ヲ撤シテ迎ヘ戰フ。僧兵勇戰スル者多シ。然レドモ乘寡敵セズ、軍遂ニ敗ル。賴政平等院ニ入り左右ヲ顧ミテ曰ハク、身六朝ニ事ヘ、齡八十二垂トシ、官祖先ニ踰ニ、武略亦等倫ニ耻ヂズ。今天下ノ爲ニ義ヲ唱ヘ、命ヲ隕シ名ヲ留ムル亦遺憾ナシト。埋木の花さくことも、なかりしに、みのなるはてぞ、おはれなりける。一首ヲ詠シテ自殺ス。以仁王ハ流矢ニ中リテ薨ズ。

○七節 福原ノ遷都

賴政ノ一舉ハ、清盛ヲシテ大ニ警戒セシメタリ。叡山及奈良ノ僧兵ハ常ニ清盛ノ疾ム所ナリシニ、賴政ノ事アリテヨリ益、其ノ輕シ難キヲ感マ以爲ヘラク、彼等ニシテ若相應援シテ來襲センカ。京師ハ一夜ニシテ灰燼トナリ、皇宮甚危カラント。是ニ於テ清盛遷都ノ意アリ。其ノ別業福原ハ南都北嶺ヲ去ルコト遠ク、又平氏ノ本據タル西國ニ通ズルニ便ナリ。因リテ六月帝都ヲ福原ニ遷ス。時ニ宮殿未成ラズ、車駕ヲ己ガ第二徙シ奉リ、法皇ヲ三間ノ板屋ニ入レ奉ル。之ヲ幸御所ト稱ス。人心恟々、物議紛々タリ。鴨、長明ノ方丈

遷都當時ノ
狀態

記ニ當時ノ形勢ヲ記シテ曰ク、

又同年の六月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思ひの外なりし事なり。大方この京の初を聞けば、嵯峨天皇の御時、都と定まりにけるより後、既に數百歳を経たり。異なる故なくて容易く改まるべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂ひあへるさま、理にも過ぎたり。されどもかくいふがひなくて、御門より始め奉りて、大臣公卿悉攝津國難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰か一人故郷に残り居らん。官位に思ひをかけ、主君の蔭を頼む程の人は一日なりとも疾く轉らんと勵みあへり。時を失ひ世にあまされて、期する所なき者は、愁ひながら留り居たり。軒を争ひし人の住居、日を経つゝ荒れ行く。家は毀れて淀川に浮び、地は目の前に島となる。人の心皆改まりて、唯馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

その時ちのづから事の便ありて、津の國今の京に到れり。所のありさまを見るに、その地ほどせば、く、條里をわるに足らず。北は山にそひて高く、南

福原ノ地勢

は海に近くて下れり。浪の音道にかまびすしくして、鹽風殊に厲しく、内裏は山の中なれば、かの木、丸殿もかくやど、なかなか様かはりて、優なるかたも侍りき。日々に毀ちて川もせきあへず運びくだす家は、いつくに作れるにかあらん。猶空しき地は多く、作れる屋は少し。故郷は既に荒れて新都はいまだ成らず。ありとしある人、皆浮雲のちもひをなせり。本より此處に居たるものは、地を失ひて愁ひ、今うつり住む人は、土木の煩ひあることを歎く。道の邊を見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を着たり。都のてぶり忽に改まりて、唯鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きあけるも、しるく、日を経つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の愁途に空しからざりければ、同年の冬、猶この京に歸り給ひき。されど毀ちわたせりし家どもはいかになりけるにか、悉本のやうにも作らず。

八源氏諸國ニ起ル

遷都以來天下ノ人心平氏ヲ去リ、源氏ヲシテ回復ノ機會ヲ得シメタリ。治承四年九月、伊豆ノ流人源賴朝高倉宮ヲ以テ仁王ノ令

源賴朝兵ヲ擧グ

源義仲等諸國ニ起ル

清盛法皇ノ御ヲ解キ、院中ニ復ス

旨ヲ奉シ、兵ヲ發シテ目代平兼隆ヲ殺シ、石橋山ニ據ル。大庭景親ハ關東ノ勇將ナリシヲ以テ、清盛命ヲテ賴朝ヲ討タシム。賴朝逃レテ杉山ニ匿レ、之ク所ヲ知ラズ。景親以爲ヘラク、賴朝既ニ死スト。清盛大ニ悅ビ、景親等ヲ賞ス。既ニシテ平氏ノ東國ニ在ル者、頻ニ告ケテ曰ハク、賴朝石橋山ニ死ストハ、虛妄ナリ。北條佐佐木三浦等皆之ニ屬シ、伊豆駿河甲斐、信濃ノ將士雲集シ、兵勢大ニ振ヘリト。關東ハ源氏ノ巢窟ナリ。而シテ賴朝ヲ此ニ置クハ、猶虎ヲ野ニ放ツガ如キナリ。清盛之ヲ侮ユ。乃上皇ニ請ヒテ、賴朝追討ノ宣旨ヲ發シ、官符ヲ東海、東山二道ニ下シ、孫維盛ヲ追討使ト爲ス。維盛富士川ニ至リ、源氏ノ兵ト對陣シ、夜中水鳥ノ羽音ニ驚キ、戦ハズシテ逃レ歸ル。時ニ源義仲、信濃ニ起リ、義經、義兼ハ近江ニ起リ、行家ハ尾張ニ起リ、義基ハ河内ニ起リ、共ニ賴朝ニ應ズ。而シテ園城寺、延曆寺、興福寺ノ僧徒モ、亦義經等ヲ援ケタリ。清盛知盛ヲ遣シテ、義經等ヲ討タシム。園城、興福、東大ノ三寺、兵火ニ罹ル。諸道平氏ニ叛ク者日ニ多ク、士卒多ク逃亡ス。清盛意沮喪シ、漸悔心ヲ生ズ。乃法皇ノ幽ヲ解キ、請ヒテ、院中ニ復シ、政治ヲ宗盛ニ委ス。十一月、福原ノ新宮成リ、天皇此ニ徙リ給フ。延曆寺廢、上書シ

都ヲ平安ニ復ス

テ舊京ニ復セシメテ請フ。清盛大ニ兩京ノ利害ヲ議セシム。既ニシテ新宮怪異アリ。因リテ急ニ天皇及法皇ヲ奉テ舊都ニ還ル。明年養和ト改元ス。諸方惟能、菊池隆直等西海ニ據リ、河野通信南海ニ據リ、皆源氏ノ聲援ヲ爲ス。而シテ諸將皆戰功ナシ。清盛忿恚シ、大熱ヲ發シ、宛轉煩躁七日ニシテ薨ズ。遺命シテ曰ハク、我が爲ニ堂塔ヲ造ルコト勿レ。佛ニ供養スルコト勿レ。唯頼朝ノ首ヲ斬リテ之ヲ墓前ニ懸ケヨト。時ニ年六十四ナリ。

清盛薨ス

○九嚴島

清盛ノ遺跡トシテ忘ル可カラザルモノハ嚴島明神ナリ。清盛安藝守タリシ時、詔ヲ奉テ高野山ノ大塔ヲ作ル。竣功ニ及ビ、夢ニ老僧アリ、謂ヒテ曰ハク、安藝ノ嚴島ハ金剛胎藏ノ地ナリ。而モ荒廢ニ屬ス。汝之ヲ修葺セバ子孫必福祿ヲ享ク。ト後權勢ヲ得ルニ及ビ、數朝廷ニ請ヒテ嚴島ヲ修シ、壯麗ヲ極ム。凡事アルトキハ必禱ル。法皇モ亦幸シ給フコト前後三回、以テ清盛ノ歡心ヲ買ヒ給ヘリ。清盛自紺紙金泥ノ經卷ヲ書シ、詩繪ノ函ニ容レテ奉納セルモノ、今尙同社ニ存ス。表紙ニ繪様アリ。以テ當時美術ノ一斑ヲ見ルニ足レリ。

清盛嚴島社ヲ修ス

第五十五章 平氏亡ビ源氏興ル

○一節源頼朝

源頼朝ハ左馬頭義朝ノ第三子ナリ。幼ニシテ器局アリ。義朝之ヲ愛スルコト他子ニ過ク。平治ノ亂ニ頼朝父兄ニ從ヒ、藤原頼信ニ與シ、從五位下ニ叙セラレ右兵衛權佐ニ任ゼラル。年甫メテ十三。平氏ノ軍ト戰ヒ、射テ二人ヲ殞ス。軍敗ル、ニ及ビ、父兄ト共ニ東ニ走ル。時ニ大ニ雪アリ、衆甲ヲ棄テ、徒歩ス。頼朝疲倦甚シク、終ニ父兄ト相失ヒ、平宗清ノ爲ニ虜ヘラレ、六波羅ニ護送セララル。清盛ノ繼母池、禪尼清盛ニ請ヒテ死ヲ宥ム。清盛頼朝ヲ伊豆ノ蛭島ニ流シ、伊東祐親、北條時政ヲシテ之ヲ監セシム。頼朝時政ノ女政子ニ通テ、以テ北條氏ト結ビ、他日事ヲ舉グル餘地ヲ爲ス。治承四年以仁王ノ令旨到ル。頼朝大喜ビ、密ニ之ヲ時政ニ示シ、共ニ兵ヲ舉グントス。既ニシテ以仁王敗死ス。三善康信京師ヨリ報ヲテ曰ハク、方今平氏源氏ノ餘黨ヲ除クニ急ナリ。先指ヲ公ニ屈ス。請フ速ニ謀ヲ爲セト。僧文覺モ亦頼朝ヲ慫慂ス。頼朝遂ニ兵ヲ舉グ。頼義、義家以來世々源氏ヲ戴クル者多ク來集ス。乃目代兼隆ヲ擧テ之ヲ殺シ、出テ、相

頼朝以仁王ノ令旨ヲ奉テ兵ヲ擧グ

關東大略
頼朝ニ歸ス

頼朝ニ赴キ石橋山ニ陣ス。大庭景親兵三千ニ將トシ、伊東祐親兵三百ヲ率テ前後
ヨリ來リ攻ム。頼朝ノ兵三百ニ過キズ敗レテ杉山ニ入ル。頼朝自射ルニ、人馬
ニ應シテ倒ル。矢已ニ盡キ、頼朝ミレバ從フ者僅ニ六人ノミ。土肥實平ノ謀ヲ用テ
テ悉散去セシメ、獨實平ト大樹ノ朽穴ニ匿レ、遂ニ脱スルヲ得タリ。頼朝躬ニ
乘テ安房ノ獵島ニ至リ、時政及三浦義澄等ニ會シ、聲勢稍張ル。檄ヲ移シテ小
山朝政、下河邊行平ヲ召シ、轉シテ上總ニ入り、平、廣常、千葉常胤ヲ招キ、又時政ヲ
甲斐ニ遣シテ諸源ヲ徵ス。頼朝下總ニ赴ク。常胤三百餘騎ヲ將テ之ヲ國府ニ
迎ヘ、廣常亦二萬餘騎ヲ以テ來リ、隅田川ニ會ス。頼朝ノ從弟義仲兵ヲ信濃ニ舉
ク。頼朝土屋宗遠ヲ甲斐ニ遣シ、諸源ニ謂ハシメテ曰ハク、房總ノ軍士悉麾下ニ
聚マレ、ルヲ以テ、更ニ武藏、上野、下野ノ兵ヲ收メテ、敵ヲ駿河ニ逐ヘント欲ス。諸
君宜シク時政ヲ以テ先導トシ、黃瀬川ニ會スベシト。自兵三萬ヲ率テ武藏ニ
入ル。島山重忠、川越重頼以下豪傑來附スル者日ニ多シ。乃重忠ヲ前鋒トシ、常胤
ヲ後拒トシ、進ミテ相摸ニ入ル。既ニシテ時政、武田信義等ト甲斐ヨリ出テ駿河
ノ目代橋、遠茂及長田入道ト戰ヒテ之ヲ敗ル。是ニ於テ關東大略、頼朝ニ歸セリ。

頼朝居テ鎌倉ニ奠ム

頼朝遂ニ居テ鎌倉ニ奠ム、鶴岡八幡宮ヲ小林、郷ニ遷ス。是ヨリ事アル毎ニ必勝
ル。平、維盛等兵五萬餘騎ヲ率テ來擊シ、富士川ニ陣ス。頼朝兵二十萬ヲ以テ之
ヲ逆ヘ、日ヲ刻シテ交戦セントス。武田信義等二萬餘人ヲ率テ來會ス。平氏ノ
軍驚擾シテ潰ニ走ル。頼朝相摸ノ國府ニ還リ、時政、信義等二十餘人ノ功ヲ賞
ス。又兵ヲ率テ常陸ニ如キ、佐竹義政ヲ誘殺シ、鎌倉ニ還ル。

○二節 源、義仲 義仲ハ左衛門、大尉爲義ノ孫ナリ。父義賢久壽二年姪義平ノ爲

ニ殺サル。義仲時二年二歳。齋藤實盛ノ家ニ匿ル。實盛之ヲ信濃ニ送り、其ノ乳母
ノ夫權守中原兼遠ニ託ス。兼遠之ヲ木曾山中ニ居ラシメ、心ヲ用テ鞠育ス。保
元平治ノ亂ヲ經テ源氏滅亡シ、平氏ノ權力獨盛ナリ。義仲幼ナレドモ、深ク家門
ノ衰弊ヲ歎キ、慨然トシテ復讐ノ志アリ。起居應對群兒ニ越ユ。長ズルニ及ヒテ
軀幹魁偉、膂力絶倫、騎射ヲ能クス。屢、京師ニ入り、平氏ヲ伺察ス。治承四年、以仁
王ノ令旨到ル。既ニシテ頼朝關東ニ起ルト聞キ、兵ヲ信濃ニ集ム。下野ノ足利、甲
斐ノ武田、上野ノ那和等皆來附シ、聲勢日ニ盛ナリ。義和元年紀元千八百一十一年六月
越後ノ守城、資永義仲ヲ攻ム。義仲逆ヘ擊テ之ヲ破ル。九月平、通盛、平、經正等來リ

頼朝以仁王
ノ令旨ヲ奉
シテ信濃ニ
起ル

北國ノ諸豪
義仲ニ歸ス

賴朝義仲ト
離アリ

義仲大平
山ニ破ル

(五六八)

攻メ、越前ニ戰ヒテ敗レ還ル。翌壽永元年九月、資永ノ弟長茂、兵四萬ヲ發シテ、義仲ヲ擊ツ。義仲二千餘騎ヲ以テ襲撃シ之ヲ破ル。是ニ於テ越前越中、加賀ノ諸豪傑悉來リ屬ス。武田信光女ヲ以テ義仲ノ子義高ニ嫁シ、其ノ歡心ヲ買ハント圖ル。義仲之ヲ退ク。是ニ於テ信光、賴朝、義仲ヲ離間シ、義仲平氏ト婚ヲ結ブト稱ス。賴朝ノ叔父行家、賴朝ト隙アリ、奔リテ義仲ニ屬ス。賴朝大ニ怒リ、兵ヲ率テ信濃ニ入ル。義仲平氏未亡ヒザルニ同族相戰フヲ非トシ、之ヲ越後ニ避ク。賴朝武藏ニ還リ、質ヲ義仲ニ求ム。義仲子義高ヲシテ鎌倉ニ質タラシム。

○三 平氏西奔

平宗盛、清盛ノ遺命ヲ以テ政務ヲ總理シ、内大臣ト爲リ、隨身兵仗ヲ賜ハル。而シテ無能ナリ、重衡、忠度等ヲシテ行家ヲ討タシメ、維盛、通盛等ヲシテ義仲ニ當ラシメ、城、長茂ヲ越後守トシ、平親房ヲ越前守トシ、藤原秀衡ヲ陸奥守トシ、以テ賴朝、義仲ヲ討タシム。重衡、行家ヲ洲股ニ擊テ利アリ、然レドモ通盛、長茂ハ敗ラレ、其ノ他ノ諸將モ亦功ナシ。壽永二年四月、宗盛、維盛ニ命テ、大舉シテ義仲ヲ討タシム。義仲五萬ヲ以テ平氏十萬ノ兵ニ當リ、大ニ礪波山ニ戰ヒ、炬ヲ牛角ニ縛シテ之ヲ敵軍ニ縱テ、遂ニ大勝ヲ得タリ。知度、爲盛、戰死

平宗盛天皇
國ニ奔ル

藤原兼實
逃テシム

シ、維盛、機ニ免ル。義仲追撃シテ西上シ、七月進ミテ叡山ニ據ル。時ニ源行家大和ニ入り、源行綱攝津河内ニ據リ、足利義清丹波ニ抵リ、皆將ニ京師ニ入ラントス。宗盛諸將ヲ召還シ、天皇及法皇ヲ挾ミテ西國ニ奔ラント議ス。知盛等諫ムレドモ聽カズ、而シテ法皇竊ニ叡山ニ幸シ給ヘリ。宗盛惶惑シテ爲ス所ヲ知ラズ。火ヲ第宅ニ縱テ、劔聖ヲ收メ、天皇及建禮門院ヲ奉マテ西ス。閭族皆從テ、福原ニ至リテ、清盛ノ墓ヲ拜シ、終夜奏樂誦經シ、故都ノ宮殿及公卿ノ第宅ヲ燒キ、海ニ泛ヒテ太宰府ニ奔ル。時ニ九州ハ大抵平氏ニ應マ、四國ニハ土佐ノ豪族志ヲ源氏ニ致スモノアリキ。

○四 後鳥羽天皇即位

宗盛西奔シ京師主無シ。法皇乃大權ヲ總攬シ、義仲ニ院ノ昇殿ヲ許シ、京師ヲ鎮守セシメ、平氏二百餘人ノ官爵ヲ削リ、其ノ所領ヲ沒入シテ、百四十所ヲ義仲行家ニ賜ヒヌ。右大臣藤原兼實、法皇ニ勸メテ、天皇ヲ立テシム。議シテ曰ハク、祖宗ノ制、劔聖ナキトキハ位ニ即キ給フコトヲ得ズ。然レドモ繼體天皇即位ノ前、踐祚シテ天皇ト稱シ給ヒ、劔聖ヲ得ルニ及ビテ、乃天位ニ即キ給ヘリ。今宜シク此ノ例ニ準據スベシト。法皇之ニ從ヒ給フ。義仲

後鳥羽天皇
東西兩帝ア

故以仁王三條ノ功ヲ稱シ、其ノ子北陸宮ヲ立テント請フ。而シテ法皇ノ御意ハ高倉天皇ノ皇子尊成親王ニ在リ。因リテトスルニ尊成親王吉ナリ。乃親王ヲ立テ、皇太子トシ、即日踐祚セシメ給ヘリ。之ヲ後鳥羽天皇トス。是ニ於テ東西兩帝アリ。義仲足利義清ヲ遣シ、平氏ヲ備中ノ水島ニ要撃シ、安徳天皇及神器ヲ奪ハシム。重衡擊テテ之ヲ斬ル。平氏遂ニ讃岐ニ至リ、屋島ヲ以テ行在トス。

○五 義仲ノ滅亡

義仲法皇ノ北陸宮ヲ立テ給ハザリシヲ憤リ、漸驕恣ナリ。法皇中原、康定ヲ遣シテ頼朝ヲ召シ給フ。義仲益々忿ル。部下ノ兵士京師ヲ横行シ、院ノ御領及公卿ノ莊園ヲ侵害シ、貴賤ノ資財ヲ掠奪シ、京師騷然タリ。壽永二年十一月、法皇延曆寺、園城寺ノ僧兵ヲ徵シテ義仲ニ備ヘ給フ。義仲之ヲ聞キテ大ニ怒リ、兵ヲ舉ゲテ反シ、法皇ノ法住寺殿ヲ犯シ、基通ノ攝政ヲ罷メ、師家ヲ以テ攝政トシ、法皇ノ近臣數十人ノ官職ヲ奪フ。法皇義仲ヲシテ平氏ノ故地ヲ總領セシメ、以テ其ノ心ヲ悅ベシ、又其ノ請フ所ニ從ヒテ頼朝追討ノ院宣ヲ下シ給フ。三年正月、義仲ヲ征夷大將軍ニ拜ス。蓋法皇義仲ノ暴横ヲ厭ヒ、陽ニ之ヲ優賞シ、實ハ頼朝ヲシテ之ヲ除カシメントシ給ヒシナリ。頼朝二弟範賴、義經ニ

義仲反ス

頼朝義仲ヲ討ツ

神器ナクシテ即位シ給フ

義仲敗死ス

平氏ノ威權

兵六萬ヲ授ク、兩道ヨリ進ミテ義仲ヲ討タシム。義仲平氏ト和シ、共ニ頼朝ヲ擊タント欲シ、奮テ宗盛ニ遣リ、且其ノ宗女ヲ得テ妻トセント請フ。宗盛聽カズ。既ニシテ範賴、義經ノ兵到リ、平氏亦福原ニ還リ、大舉シテ京師ニ入ラントスト聞キ、義仲大ニ惶懼シ措テ失ス。乃今井兼平ヲシテ五百騎ヲ以テ勢多ニ向ハシメ、根井幸親ヲシテ三百餘騎ヲ以テ宇治ニ向ハシメ、自法皇ヲ擁シテ京師ニ居ル既ニシテ東兵京師ニ入ル、義仲支フルコト能ハズ、勢多ニ赴カント欲シ、粟津ニ至リシニ、兵盡キテ戰死ス。法皇基通ノ攝政ヲ復シ給フ。是ノ歲四月、京師ニハ元曆ト改元セラル。而シテ西國ハ尙壽永ノ號ヲ用カタリ。七月、後鳥羽天皇即位ノ禮ヲ行ヒ給フ。攝政以下神器ナクシテ即位シ給フ不可ヲ論ゼシカドモ、法皇聽キ給ハザリキ。

○六 平氏ノ末路

平氏ノ西海ニ在ルニ當リテ、九州一圓悉之ニ屬シ、四國モ亦大半之ニ應ズ。蓋平氏ノ祖先ハ讚岐、淡路、肥後、安藝、播磨等ニ守タリシヲ以テ、累代恩顧ヲ蒙リシ多キヲ以テナリ。原田種直、菊池隆直、松浦黨等行在ヲ護衛シ、平氏ノ勢稍張ル。重衡通盛、教經等義仲ノ將士ヲ水島ニ敗リ、又行家ヲ室

源賴朝義經
平氏ヲ討ツ

安徳天皇海
ニ入り給フ

山ニ破ルニ及ビテ、威勢山陽南海十四國ニ振フ。三年正月、平氏城ヲ播津ノ一
谷ニ築ク。其ノ地福原ノ故都ヲ包ミ、北ハ山ニ據リ、南ハ海ニ臨ム。兵士十萬人、戰
艦千餘艘アリ。安徳天皇此ニ遷幸シ給フ。二月、範賴、義經兵ヲ進メテ左右一、谷
ヲ挾撃ス。義經、越ヨリ後背ヲ襲ヒ、火ヲ放チテ急ニ攻ム。平氏防戦スルコト能
ハズ、通盛、忠度、敦盛等戰死シ、重衡ハ虜ニセラル。宗盛、安徳天皇及神器ヲ奉リ、船
ニ乘リテ屋島ニ遷ル。四年^{文治}二月、範賴大兵ヲ領シテ豊後ニ在リ、原田種直
ヲ撃チテ大ニ之ヲ破ル。義經精兵ヲ帥キテ屋島ヲ襲フ。平氏支アルコト能ハズ
船ヲ回シテ壇浦ニ避ク。三月、義經舟師七百餘艘ヲ帥キテ來リ攻ム。平氏戰艦五
百ヲ以テ防戦ス。義經奮撃シテ大ニ之ヲ破ル。清盛ノ未亡人二位、尼安徳天皇ヲ
抱キ、劔璽ヲ挾ミテ海ニ入り、一族悉戰死ス。獨建禮門院及宗盛、時忠等捕ヘラル。
神鏡ハ船ニ在リ、神璽ハ後ニ浮ミ出ゾ。唯神劔ノミ遂ニ得可カラズ。文治六年、^建
御坐ノ御劔ヲ以テ之ニ代ヘ、後太神宮ノ神告ニ依リ、伊勢神庫ノ寶劔ヲ以テ之
ニ充テラル。平氏政權ヲ握ルコト二十餘年、而シテ國族終ニ西海ノ蕩屑トナ
ル。世人以テ榮枯盛衰無常ノ例トナス。

(五七二)

第二 鎌倉時代

第五十六章 源賴朝ノ幕府

○一節 鎌倉ヲ開ク 治承四年、賴朝鎌倉ノ地ヲトシテ館ヲ大倉郷ニ立ツ。
初メ鎌倉ハ僻陋ノ地ニシテ漁戶農家アルノミナリキ。賴朝嘗テ安房ニ在リシ
トキ、鎌倉ノ地形ヲ稱シテ徙ルヲ居ラフコトヲ勸ムル者アリ。且相摸ハ賴朝祖先
ノ舊國ナルヲ以テ、居テ此ノ所ニ定メタリ。是ニ於テ將士競ヒテ第宅ヲ作り、市
廊周匝シ、人煙日ニ殷ナリ。遂ニ東國ノ首府トナル。是ヨリ元弘三年、北條氏ノ
滅亡ニ至ルマデ凡百五十年ノ間ハ、天下ノ實權鎌倉ニ集マリテ、武人社會ノ中
心ト爲リ、朝廷ノ文化ト自異ナル一種ノ文化ヲ生ズルニ至レリ。賴朝平氏ノ
運命ニ鑑ミ、其ノ社寺ノ莊園ヲ奪ヒ、以テ自尊大ヲ致シタルハ、即神佛ノ冥罰ヲ
免レズシテ、一朝滅亡ニ歸シタル所以ナルヲ思ヒ、敬神崇佛ヲ以テ上下ヲ率ル
鶴岡入幡宮ヲ小林郷ニ徙シテ源氏ノ氏神トシ、勝長壽院ヲ建テ、法會ヲ執行
シタリ。

賴朝居テ鎌
倉ニ定ム

賴朝ノ敬神
崇佛

○節三事ヲ奏ス

壽永二年七月、平氏西奔シ八月、後鳥羽天皇踐祚シ給

(五七四)

フ。是ヨリ先法皇中原、康定ヲ遣シテ賴朝ヲ召シ給フ。賴朝義仲ヲ憚リテ入朝セ
 ス。康定ニ因リテ三事ヲ奏ス。一ニ曰ハク、平氏ノ亡ナルハ臣等ノ力ニ非ズ。是平
 氏領國ノ神田寺戸ヲ横奪セシニ因リ、神佛威罰ヲ下シ給ヒシニ因ル。故ニ今朝
 廷宜シク社寺ノ田戸ヲ復舊シ以テ其ノ功德ニ報シ給フベシ。二ニ曰ハク、王公
 卿大夫以下ノ莊園ニシテ、平氏ノ爲ニ掠取セラレシ者ハ本主ニ還付シ、安堵故
 ノ如クシ給ヘ。今臣等若此等ノ莊園ヲ賜ハラハ、是平氏ト同轍ノミ、禍ヲ轉マテ
 福ト爲スハ、人ノ愁怨ヲ弭ムルニ如カズ。願ハクハ廟議其ノ宜シキヲ擇ビ給ヘ
 三ニ曰ハク、平氏ノ黨類ニシテ逆ヲ棄テ順ニ歸スル者アラハ、縱令罪死ニ當ル
 トモ、宜シク寛大ニ處置シタマフベシ。臣等ノ如キ羸ニ刑網ニ罹リシカドモ、幸
 ニシテ宥赦セラレタルヲ以テ、朝敵ヲ討チテ以テ今日ノ効ヲ成スコトヲ得タ
 リ。然ラバ則今日ノ逆臣ト雖、亦他日其ノ力ニ頼ルコトナキヲ保セズ。輕重ノ權
 宜シク朝廷ノ處分ニ在ルベシト。法皇此ノ議ヲ可トシ、赦シテ東海、東山二道ノ
 莊園平氏ニ屬シタルモノハ、悉之ヲ其ノ舊主ニ復シ、賴朝ヲシテ校勘セシメ給

ヘリ。是ヨリ東國ノ人心益、賴朝ニ歸シタリ。

○節三侍所、公文所、問注所

是ヨリ先、賴朝侍所ヲ鎌倉ニ置キ、和田義盛

ヲ侍所別當トシ、部下ノ將士ヲ管理セシム。元暦元年、紀元千八百四十四年、公文所ヲ置キ、
 大江廣元ヲ別當トシ、中原親能等ヲ寄人トシ、政務ヲ議セシム。又問注所ヲ置キ、
 三善康信ヲ執事トシ、訟獄ヲ決斷セシム。是ニ於テ鎌倉幕府ノ組織整頓セリ。後
 建久二年、公文所ヲ政所ト改ム。賴朝武ヲ以テ起リシカドモ、政務ハ武士ノ長
 所ニ非ザルヲ知ル。中宮、屬三善康信ハ明法家ニシテ、且賴朝ニ縁故アルヲ以テ、
 之ヲ鎌倉ニ迎ヘ、又康信ヲシテ廣元及其ノ實弟親能ヲ引カシメタリ。廣元ハ安
 藝介ニシテ政務ニ通シ、經營ノ才ニ富ム。賴朝其ノ議ヲ容レテ設計スル所多カ
 リキ。廣元ノ子孫ハ長井氏、毛利氏トナリテ公文所別當ヲ襲ギ、康信ノ子孫ハ太
 田氏、町野氏トナリテ問注所ヲ其ノ邸内ニ設ク、親能ノ子孫ハ攝津氏、大友氏ト
 ナリ、大友氏ハ後ニ鎮西奉行トナリヌ。

○節四賴朝義經隙アリ

平氏及義仲ノ亂後、京師動搖猶止マズ。法皇義經ノ功ヲ賞シ、留メテ京師ノ鎮護トシ、檢非違使、判官ニ叙シ給フ。賴朝梶原景時ヲ

源義經ノ事

遣シテ近畿ノ總追捕使トシ、義經ヲ監督セシム。義仲ノ黨志太義廣、及伊勢平氏ノ流關信兼等伊賀伊勢ニ起ル。義經、大内惟義ト擊テテ之ヲ平ク。是ヨリ義經自體ノ心ヲ生シ、部下ノ將士京畿ノ莊園ヲ侵略シ、訴訟類ニ起ル。義經平氏ヲ八島ニ擊タントスルニ當リ、法皇京師ノ空虚ヲ不可トシ、之ヲ留メ給ヒシカドモ從ハズ、其ノ神器ヲ奉テ京師ニ入ルニ及ビ、騎肆益甚シク、命ヲ頼朝ニ請ハズシテ自用ウ。頼朝範頼ヲシテ九州ヲ管セシメ、義經ヲシテ四國ヲ管セシム。而シテ義經九州ノ事務ヲ專斷セリ。是ニ於テ頼朝義經ヲ惡ミ、嫌隙日ニ甚シ。文治元年紀元千八百四十五年五月、義經、平宗盛及子清宗ヲ以テ鎌倉ニ來ル。頼朝義經ヲ御クテ鎌倉ニ入ラシメズ。時政ヲ酒匂驛ニ遣シテ囚テ受ケ、復義經ニ付シテ京師ニ送り、之ヲ逸ニ斬ラシム。義經京ニ還リ叔父行家ト結托ス。頼朝益々之ヲ忌ミ、土佐坊昌俊ヲシテ其ノ第ヲ襲ハシム。義經乃法皇ニ迫リテ頼朝追討ノ院宣ヲ請フ。朝臣皆變テ怖レ、其ノ請ニ從ハントス。獨右大臣兼實諫止スレドモ聽カレズ。宣旨遂ニ下ル。而シテ頼朝屢、宛テ朝廷ニ辭フ。朝廷窮迫シ、院宣ヲ諸國ニ下シテ義經行家ヲ追捕セシム。義經、行家出奔ス。

頼朝義經ヲ

頼朝總地頭トナリ諸國ヲ守護地頭トシテ

政務ノ權武家ニ移リシ

○節五 守護地頭ヲ置ク

頼朝北條時政ヲ遣シテ京師ヲ守護セシム。頼朝又大江廣元ノ議ヲ用井時政ヲシテ奏セシメテ曰ハク、義經、行家逃竄シ、容易ニ追捕スベカラズ、諸國之ニ黨スル者アラントキ、隨時兵ヲ發セバ、其ノ費貨ヲレズ、郡國虛耗セン因リテ請フ。臣ノ配下ヲ諸國ニ置キテ守護トシ、以テ盜賊ヲ擒獲セシメ、又諸家ノ莊園ニハ地頭ヲ置キテ所務ヲ催促セシメバ、勞セズシテ天下自定マラン。其ノ兵糧ノ如キハ五畿、山陰、山陽、南海、西海ノ二十六國ヨリ、段別ニ米五升ヲ課シ、以テ之ニ充テント。法皇心之ヲ難ンヤ給ヒシカドモ、公卿皆頼朝ノ意ニ違フコトヲ憚ルヲ以テ、遂ニ之ヲ聽シ給ヘリ。頼朝自總地頭トナリ、諸國ニ守護地頭ヲ置キ、家臣ヲ以テ之ニ充テタリ。後請ヒテ六十六國總追捕使ト爲レリ。

カク頼朝ガ總地頭總追捕使ニ補セラレシハ、其ノ事小ナルニ似テ、實ハ我が政體上ノ一大變動タリ。シコトヲ理會セザル可カラズ。即獨兵事ノミナラズ、概シテ内地ニ對シテ政務ヲ行フ權力ノ武家ニ移リシハ、實ニ是ノ時ヨリ始マリシナリ。是ヨリ先平、清盛既ニ文政ニ參與スル權ヲ得タリ。然レドモ是大臣トシ

國司ノ權莊
國ニ及バズ

最初ノ守護
ノ職分

テ參與シタルモノニシテ、武將トシテ參與シタルニ非ズ。賴朝ノ如キ、身幕府ニ在リ、公卿ノ列ニ入ラズシテ、國政ノ要務ヲ總理スルニ至リタルハ、一ニ總地頭總追捕使ノ職ヲ得タルニ因ルナリ。前ニ述シガ如ク、當時大寶令ノ田制已ニ亂レテ、諸國到ル所私家ノ莊園トナリ、王公ヨリ以下諸士ニ至ルマデ、莊園ヲ以テ財源ト爲スニ至レリ。藤原氏平氏以後、天下土地ノ大半ハ既ニ莊園トナリヌ。時ニ諸國國司ナキニ非ズ。且地方ノ幾分ハ舊舊制ニ隨ヒテ國司ノ支配ヲ受ケタリ。之ヲ公田ト云フ。而シテ國司ノ權ハ理論上其ノ國內ニ在ル莊園ニモ及ブベキナレドモ、實際ハ然ラズ。武門ノ勢力増長シテ以來、武士ニシテ國守ニ補セラレシ者ノ外ハ權力振ハズ、大抵其ノ任國ニ赴カズシテ目代ヲ下行セシメ、身京都ニ在リテ、收稅ノ外ハ其ノ事務ヲ處理セズ、殊ニ諸家ノ莊園トナリタル土地ハ、自然其ノ所主ノ隨意支配ニ歸シ、之ガ爲ニ地方ノ統馭大ニ緩ミ、兇奸ノ徒其ノ間ニ出沒スルニ至レリ。是ヲ以テ賴朝諸國ニ守護ヲ置ク議ヲ建テ、國司ノ權力ノ及バザル諸家ノ所領ニ對シ、謀反人、殺害人及盜賊ヲ捕縛シ、及大番ト稱スル京都勤番ノ士ヲ催促スルコトヲ司ラシメタリ。蓋最初守護ノ職分ハ此

(五七八)

地頭ノ職分

幕府ノ威權
全國ニ及ブ

賴朝奏シテ
朝廷ノ改革
ヲ行フ

近衛家

九條家

ノ二事ニ限リ、他ノ事務ハ猶國司ノ職權ニ屬スルモノトシタリ。又地頭ト稱スル者ハ、初メ平氏ノ門族ガ其ノ私領ニ置キタリシ收稅役ノ名ナリ。然ルニ賴朝ノ議ニ因リ、之ヲ以テ公務ノ官職トシ、古ノ郡領ニ代ハリ、郡郷ノ莊園ニ對シテ收稅ノ事ヲ行ヒ、其ノ幾分ヲ食マシメタリ。此ノ如ク守護ハ一縣ノ地方ニ就キテ刑政ヲ行ヒ、地頭ハ郡郷莊保ヲ視察シ、並ニ賴朝ノ家臣ヲ以テ之ニ補セシヨリ、鎌倉幕府ノ威權漸全國ニ行ハル、ニ至リシナリ。

○六節 內覽議奏ヲ置ク 賴朝北條時政ヲシテ、朝廷ノ形勢ヲ察セシム。

文治元年十二月、奏シテ、藤原兼實ヲ內覽トシ、以テ攝政ノ權ヲ分チ、兼實、師家以下十人ノ議奏ヲ院中ニ置キ、神祇ヨリ諸道ノ政ニ至ルマデ協議奏決セシメ、ト請フ。朝廷之ヲ聽ス。是ヨリ朝政輔佐ノ權ハ議奏ニ移ル。此ノ時賴朝ノ奏ニ因リテ、貶黜セラレシ者多ク、義經、行家ト交渉シタリシ公卿悉皆退ケラレヌ。兼實ハ朝典ニ明ニ治體ニ達ス。因リテ賴朝法皇ニ奏シテ、之ヲ重要ニ置ク。兼實廣元ト東西相通シ、建設スル所多カリキ。兼實尋イテ藤原、基通ニ代リテ攝政トナル。其ノ後テ九條ト云ヒ、基通ノ後ヲ近衛ト云フ。近衛九條交互攝政トナルコ

京師昇平ニ復ス

ト此ニ始マル。朝廷ノ改革既ニ行ハレヌ。文治二年頼朝時政ヲ召還シ中原親能ヲ遣シテ京師ヲ守護セシム。翌年更ニ廣元ヲシテ西上セシメ内裏ヲ修造セシメタリ。時ニ京師盜賊多シ。頼朝乃千葉常胤下河邊行平ヲ遣シテ警戒セシム。廣元六波羅ニ在リ、親能ト互ニ交代シ、朝廷ト交渉シテ民政ヲ治ム。是ニ於テ京師昇平ニ復シタリ。

西國ヲ平定ス

○七節 西國及與羽ノ平定 五畿東海、東山、山陽、山陰ハ平寧ニ歸シタレドモ、西國ニハ猶平氏ノ餘黨多ク、原田、菊池、阿蘇、松浦ノ諸強族之ヲ庇護セリ。薩摩大隅、日向ニハ阿多、肝付、彌夜アリ。阿多ノ族川邊通綱、義經ニ與シテ鬼界、島ニ據ル。頼朝天野遠景ヲ鎮西奉行トシ、九州ニ於ケル部下將士ヲ總管シ、宇都、宮信房ト共ニ鬼界、島ヲ擊タシム。又武藤資頼ヲ太宰、少貳ニ任セ、原田氏ノ所領ヲ收メテ資頼ニ予ヘ、中原親能ヲ鎮西守護トシテ遠景ニ代ラシメ、豊後、諸方ノ族義經ニ與シタルヲ以テ、其ノ所領ヲ沒シテ親能ニ付ス。親能ノ養子能直鎮西奉行ト爲リ、大友氏ヲ稱シ、少貳ト共ニ太宰府ニ居ル。近衛家島津莊ヲ領ス、其ノ莊司惟宗、忠久、薩摩、大隅、日向ノ守護トナリ、島津氏ヲ稱ス、少貳、大友、島津ノ三氏

少貳、大友、島津氏

義經殺サル

與羽平ケ

行家捕斬ス

法皇頼朝ヲ優待シ給フ

此ニ起ル。與羽ニハ藤原、清衡ノ裔、亘理秀衡アリ、強大ニシテ權勢國司ニ過ク。頼朝關東、與羽ヲ管領スレドモ、猶其ノ命ヲ奉ゼズ。頼朝ノ西上セザル、一ハ其ノ虛ニ乘ゼンコトヲ恐ルレバナリ。義經幼時秀衡ニ依ル。因リテ往キテ投ズ。文治五年、頼朝自北征セント欲シ、院宣ヲ請フ。既ニシテ秀衡死シ、子泰衡、義經ヲ殺シ、首ヲ鎌倉ニ傳ヘテ降ヲ乞フ。聽サズ。八月、頼朝兵ヲ將弁ヲ泰衡ヲ擊チ之ヲ滅ボシ、葛西清重ヲ以テ奥州奉行ト爲ス。尋イテ伊澤家景ヲ陸奥ノ留守職トシ、葛西氏ト共ニ世、北地ヲ鎮セシム。或ハ謂フ、義經實ハ死セズシテ蝦夷ノ地ニ逃ルト。是ヨリ先行家ハ和泉ニ於テ捕ヘラレ、尋イテ殺サレタリ。

○八節 源頼朝朝覲 建久元年紀元千八百五十年東西平定ス。十月、朝頼京師ニ朝ス。騎從甚熾ナリ。尾張ヲ過キ、義朝ノ墓ニ禮ス。十一月、京師ニ入り、六波羅ノ第二居リ。先法皇ニ謁シ、後天皇ニ朝ス。敕シテ權大納言ヲ授ク。右近衛、大將ヲ兼テシメ給フ。法皇、頼朝ヲ待シ給フコト甚優渥ナリ。引見シ給フ毎ニ、談數刻ニ及ビ、或ハ終日侍側セシメ給ヘリ。翌月、頼朝二職ヲ辭シ、唯天下總追捕使ノ一職ヲ望ム。乃之ヲ許シ、大功田一百町ヲ賜ヒヌ。法皇又頼朝麾下ノ將士殊功アル者十人

頼朝征夷大將軍ニ任セラル

ニ衛府ノ官ヲ授ケ給フ。頼朝鎌倉ニ遷リ、外甥藤原高能ヲ六波羅ノ留守トス。建久三年、法皇崩シ給フ。十月、天皇勅使ヲ鎌倉ニ下シ、頼朝ニ征夷大將軍ノ官ヲ授ケ給ヘリ。爾來復鎮守府將軍ヲ置カズ。是ヨリ大將軍ノ職ハ、親王ノ外唯源氏ノ宗長之ニ任ズル例トナリヌ。頼朝關東十國ヲ管領シ、諸國ノ守護地頭ヲ總督シ、天下追捕ノ權ヲ掌ル。世稱シテ鎌倉右大將ト曰ヒ、又鎌倉殿ト云フ。

頼朝恩義ヲ忘レズ

○九頼朝ノ爲人 頼朝人ト爲リ、面大ニシテ身短ク、風度温雅、音吐亮朗、沈毅ニシテ度量アリ。胸中定算アルニ非ズバ、未曾テ事ヲ舉グズ。將士畏服ス。常ニ節儉ヲ以テ下ヲ率井、又恩義ヲ忘レズ。石橋山ノ役ニ頼朝死セリト傳フ。三浦義明、歳八十九、諸子ヲ遺リテ頼朝ヲ尋テシメ、自城ヲ守リテ戰死ス。頼朝其ノ忠ニ感テ、子和田義盛ヲ舉ゲテ侍所ノ別當トス。初メ清盛頼朝ヲ斬ラントス。池、禰尼ノ救護ニ因リテ免ル、コトヲ得タリ。而シテ其ノ恩ニ報ズル機ナシ。因リテ特ニ奏シテ殿盛ヲ宥シ、其ノ爵祿ヲ復シ、以テ池、禰尼ニ報ズ。然レドモ頼朝性猜忌深ク、骨肉功臣多ク殺害ニ遭フ。義經ノ終ヲ完クセザル亦之ニ因ルト云フ。頼朝性温和ニシテ功ニ誇ラズ、然ルニ猶一失言ノ爲ニ誅セラル。建久四年、頼朝

頼朝猜忌深シ

頼朝ヲ殺ス

富士野ニ獵ス。曾我祐成及弟時致、工藤祐經ヲ殺シ、以テ父ノ讎ヲ報シ、突キテ頼朝ノ寢所ニ入ル。時ニ鎌倉頼朝殺サレタリト流傳ス。政子驚キ悲シム。範頼慰メテ曰ハク、範頼此ニ在リ。請フ意ヲ休メヨト。頼朝之ヲ聞キ、範頼ニ異心アリトシ、伊豆ノ修禪寺ニ幽シ、尋イテ之ヲ殺ス。正治元年和元千八百五十九年正月、頼朝病ヲ以テ薨ズ。年五十三。

第五十七章 二代頼家及三代實朝

出御門天皇

頼朝將軍トナル

二位尼

北條氏顯權盛ナリ

北條時政將軍ノ職權ヲ二分セントス

○節一 二位尼及時政 建久九年、後鳥羽天皇位ヲ皇太子ニ讓リ給フ。之ヲ土御門天皇トス。上皇院中ニ政ヲ聽キ給フ。頼朝薨マテ後、長子頼家將軍トナル。時二年十八ナリ。母政子薨髮シテ尼ト爲リ、頼家ノ少壯ニシテ事ニ堪ヘザルヲ察シ、自政ヲ行フ。世ニ之ヲ二位尼ト云フ。時政ハ頼朝ノ外舅ニシテ、又創業ノ元勳ナリ。頼朝在世ノ時ヨリ、人皆之ヲ尊重ス。此ニ至リテ政子ト共ニ幕政ヲ專行ス。時政及子義時、大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、足立遠元、梶原景時、藤原行政ノ十三人庶務ヲ參決ス。然レドモ事皆政子時政ニ決シ、北條氏ノ威權獨盛ナリ。頼家ハ唯其ノ職ニ備ハルノミ。是ヨリ以後ハ北條氏、源氏ノ功臣ヲ除キ、其ノ宗族ヲ絶テ、以テ政權ヲ自家ニ占有セントスル奸計ノ記事ナリ。

○節二 頼家ノ非命 建仁三年、元千八百八月、頼家病篤シ。時政政子ト謀リ、頼朝ノ遺命ト稱シテ、頼家ノ職ヲ解キ、職權ヲ二分シテ、關西三十八國ノ地頭職

比企能員北條氏ヲ殺サントス

時政頼家ヲ試ス

實朝將軍トナル

時政島山重忠ヲ殺ス

ヲ頼朝ノ二子千幡後ニ實朝ニ讓リ、總守護職ト關東二十八國ノ地頭職ト頼家ノ子一幡ニ讓ラシメントス。比企能員ハ頼家ノ舅ナリ、職權二分ノ事ヲ聞キ、其ノ女一幡ヲ以テ頼家ニ告ゲシメテ曰ハク、此ノ處分、他日一門ノ爭亂ヲ招クコト必セリ。北條氏其ノ機ニ乗マテ家督ヲ奪ハントスルモノナリト。頼家大ニ驚キ、能員ヲ病床ニ召シテ、北條氏ヲ滅ボサント謀ラシム。政子之ヲ聞キ、時政ニ告グ。時政天野遠景等ヲシテ能員ヲ誘ヒ殺サシム。能員ノ一族一幡ヲ擁シテ小御所ニ據ル。時政ノ兵之ヲ圍ム。一族火ヲ放チテ自害シ、一幡モ亦死ス。頼家聞キテ大ニ怒リ、和田義盛、仁田忠常ニ命ワテ時政ヲ殺サントス。事洩ル。時政頼家ヲ修禪寺ニ幽シ、後人ヲ遣シテ之ヲ弑セシム。

○節三 時政ノ奸謀 實朝ハ頼朝ノ第二子ニシテ、時政ノ外孫ナリ。時政之ヲ立テ、將軍職ヲ襲ガシム。時二年甫メテ十二ナリ。時政專恣益甚シ。其ノ後妻牧氏ノ女平賀朝雅ニ嫁ス。朝雅島山重忠ノ子重保ト爭論ス。時政後妻ノ讒ヲ信マテ重忠ヲ殺シ、其ノ一族ヲ滅ス。重忠ハ頼朝ノ功臣ニシテ正義ノ士ナリ。世人之ヲ惜ム。時政又後妻ノ勸ニ因リ、實朝ヲ殺シテ朝雅ヲ將軍トセントス。時ニ實

時政平賀朝
雅ヲ將軍ト
セントス

北條義時執
權トナル
順徳天皇
泉親衛北條
氏ヲ滅ボサ
ントス

和田義盛兵
ヲ擧グ

文武ノ權北
條氏ニ歸ス

朝時政ノ家ニ養ハル。政子謀ヲ聞キテ大ニ驚キ、士ニ命マテ之ヲ義時ノ家ニ迎ヘシメ、時政ヲ伊豆ノ北條ニ幽ス。而シテ朝雅モ亦殺サル。

○四節 和田合戦

義時ハ時政ノ子ナリ。父ニ代ハリテ執權トナル。承元四年百七十年八月、土御門天皇位ヲ皇太弟ニ譲リ給フ。之ヲ順徳天皇トス。建保元年百七十八年五月、信濃ノ人泉親衛頼朝ノ子千壽丸ヲ擁シテ北條氏ヲ滅ボサント謀ル。和田義盛ノ二子義直、義重及姪胤長以下、信濃、下總ノ將士ニシテ頼朝ノ恩顧ヲ蒙リシ者百三十餘人之ニ黨ス。既ニシテ事露レ、親衛等捕ヘラル。義盛奮功ニ代ヘテ二子及姪ノ罪ヲ宥サレ、コトヲ請フ。因リテ二子ハ罪ヲ免ル。然レドモ姪胤長ハ免サレズ、陸奥ニ流サレ、所領ヲ沒收セラル。義盛之ヲ憤リ、兵ヲ擧ゲテ幕府ヲ圍ム。或ハ謂フ、實朝ノ密旨ヲ奉マテ、此ニ及ベルナリト。義時ノ子泰時、足利義氏等防戦シ、鎌倉府内ハ忽ニシテ修羅ノ衢ト爲レリ。世ニ之ヲ和田合戦ト云フ。既ニシテ義盛軍敗レ、一族悉自盡ス。後其ノ餘黨京師ニ起リ、千壽丸ヲ奉マテ北條氏ヲ滅ボサントス。事亦露レテ、千壽丸遂ニ殺サレタリ。義盛滅亡ノ後ハ、義時自侍所別當ヲ兼テ政事軍務兩ナガラ、一手ニ掌握シタリキ。

○五節 實朝ノ横死

實朝長マテ資性温雅、顔人望アリ。文學ニ志シ、和歌ヲ善クス。北條氏權カヲ私シテ、朝廷ヲ輕シ、幕府ヲ蔑ニスルヲ惡ム。然レドモ當時源氏ノ門族ハ大抵故頼朝ノ猜忌ノ爲ニ滅亡シ、功臣モ亦皆北條氏ノ爲ニ除カレテ特ムベキモノナク、孤立ノ勢亦如何トモスルヲ能ハザリキ。建保元年二月、實朝正二位ニ叙セラレ、六年權大納言ト爲リ、左近衛大將ヲ兼ヌ。朝官ヲ受クルハ頼朝ノ遺志ニ非ズ。義時因リテ大江廣元ヲシテ辭任ヲ勸メシム。實朝聽カズシテ曰ハク、方今源氏ノ統流絶ユルニ垂ントセリ。故ニ我官職ヲ得テ家名ヲ揚グント欲スト。蓋遠カラズシテ禍ノ其ノ身ニ及バンコトヲ知リシモノ、如シ。尋イテ右大臣ト爲ル。翌年承久ト改元ス。正月實朝拜賀ノ禮ヲ鶴岡八幡宮ニ行フ。禮ヲ了ヘテ壇ヲ下ルトキ、僧公曉刺シテ之ヲ弑ス。公曉ハ頼家ノ子ナリ。義時人ヲシテ之ヲ教唆セシメ、實朝ヲ以テ父ノ仇ナリト信ゼシメシヨリ、此ニ及ビシナリ。義時人ヲシテ公曉ヲ殺サシム。實朝子ナシ。源氏ノ正統遂ニ断絶ス。

○六節 將軍ヲ京ニ迎フ(頼經)

源氏統絶エタリト雖、北條氏ハ本是陪臣

源氏ノ正統

實朝弑試セラル

實朝官位ヲ進メラル

源氏ノ正統

帝國史略 第六期 第五十七章 二代頼家及三代實朝 (五八七)

藤原賴經將
軍トナル

ナルヲ以テ、自將軍ノ職ヲ襲フベキニ非ス。義時乃政子ト謀リ、皇子ヲ擇ヒテ將
軍ト爲サシコトヲ乞フ。後鳥羽上皇許シ給ハス。因リテ攝政藤原、道家ノ三子賴
經ヲ京師ヨリ迎ヘテ將軍ト爲ス。賴經時ニ年二歳ナリ。初メ賴朝ノ妹藤原、能保
ニ嫁シ、其ノ所生ノ女太政大臣藤原、公經ニ嫁シテ女ヲ生ム。道家之ヲ納レテ賴
經ヲ生メリ。道家ハ即賴朝ノ姻親ナリ。故ニ其ノ子ヲ迎立ス。然レドモ賴經ハ唯
其ノ職ニ備ハルノミ。北條氏代々執權ト爲リテ政務ヲ行ヒタリキ。

(五八八)

第五十八章 承久ノ亂

○節 承久兵亂ノ原因 承久兵亂ノ原因ハ實ニ朝廷ト幕府トノ間ニ於
テ、天下ノ莊園私領ヲ支配スル權ヲ爭ヒタルニ在リ。源、賴朝六十餘州ニ守護ヲ
置キ幕府ノ御家人ヲ以テ之ニ補シ、天下總追捕使トナリテ、其ノ職ヲ後ニ傳ヘ
シヨリ、莊園ノ處置ハ幕府ノ爲ニ牽制セラレテ、復朝廷ノ意ノ如クナラズ、公卿
ノ私領モ守護地頭ノ干涉ヲ被リテ、領家之ヲ支配スルコトヲ得ザリシガ故ニ、
如何ニモシテ武家ノ權力ヲ削ラント試ミタルハ、是此ノ兵亂ノ遠因ナリ。而シ
テ承久記ニ見エタル白拍子龜菊莊園ノ一事ハ、即其ノ近因ヲ爲シタリ。同書ニ
曰ハク、

〔攝津〕國長江、倉橋ノ兩庄は、院中に近く被召仕ける白拍子龜菊にたびたりけ
るを、其の領の地頭、領家を忽諾にしければ、龜菊憤り、可改易由被仰下ければ、
權大夫申しけるは、地頭職の事は、上古は無かりしを、故右大將平家を追討の
けんじやうに、日本國の總地頭に被補平家追討六ヶ年が間、國々の地頭人等

承久ノ亂ノ
遠因
同近因

或は子をうたせ、或は親を殺打、或は郎従を損ず、加様の勳功に随ひて分ちた
びたらん者を、させる罪だにたくしては、義時が計ひとして可改易様なしと
て、是も不奉用云云ト。

又太平記武家繁昌ノ條ニ曰ハク、

「朝陽不犯とも、殘星光を奪はるゝ習なれば、必しも武家より、公家を意にし奉
るとしもは無けれども、所には地頭強くして領家は弱く、國には守護重くし
て國司輕し。此の故に、朝廷は年々に衰へ、武家に日々に盛也」ト。

○二上皇兵ヲ擧ゲ給フ

サレバ後鳥羽上皇政權ノ武門ニ歸シタルヲ
憤リ、多ク武士ヲ院中ニ置キテ武事ヲ習ハシメ、以テ回復ノ時機ヲ待テ給ヒキ。
時ニ頼朝ノ子孫已ニ亡ビタレドモ、北條義時益權威ヲ得テ上皇ノ命ニ逆ヒク
レバ、愈其ノ意ヲ決シ、徐ニ順德天皇ト謀リ給ハンガ爲ニ、承久三年和元千八百
八十年申シ、土御門上皇ヲ中院ト申シ、順德上皇ヲ新院ト申シキ。
此年上皇詔シテ北條義時ガ官爵ヲ削リ、兵ヲ五畿七道ニ徵シ給フ事、鎌倉ニ聞

仲恭天皇
一時ニ三上
皇坐セリ

義時ノ官爵
ヲ削リ、兵ヲ
徵シ、王
給フ

政子ノ縁邊

ニ。政子諸將ヲ召シテ曰ハク、故右大將平氏ヲ滅ボシ給ヒシヨリ、關東ノ將士其
ノ恩澤ヲ蒙ラザル者無シ。往昔諸國ノ武士京都勤番ヲ畢ヘテ歸國スルトキハ、
皆其ノ用度ヲ費シ盡シテ、爲ニ窮乏ニ陥リタリ。故右大將之ヲ憐ミ、三年ノ期限
ヲ縮メテ六個月トシ給ヒキ。是ヨリ諸國ノ武士再生ノ恩ニ感ゼザルハナシ。凡
此等ノ恩澤ハ、今日ノ如キ危急ノ日アルヲ慮ヅテ施サレシ所ナリ。然レドモ院
宣ヲ承リテ京方ニ參ラント欲スル輩ハ、宜シク其ノ意ヲ任スベシト。諸將皆死
ヲ以テ恩ニ報イノコトヲ誓ヒタリ。蓋政子ノ諭達ハ、一ハ頼朝ノ舊恩ヲ述ベテ、
之ヲ諸將ノ情義ニ愬ヘ、一ハ利害ヲ説キテ鎌倉幕府ノ竟ニ武士ニ利ナルコト
ヲ示シ、以テ其ノ心ヲ牽キシモノナリ。

○三官軍利アラズ

鎌倉ニ於テハ軍議未決セズ、或ハ逆ニ京都ヲ擊ク
トト曰ヒ、或ハ足柄箱根ノ險ニ據リテ京軍ヲ待タント曰フ。義時遂ニ大江廣元、
三善康信ノ議ニ從ヒ、長子武藏守泰時ヲシテ十八騎ヲ以テ急ニ鎌倉ヲ發セシ
メタリ。諸將士繼ギテ至ル。其ノ兵合セテ十九萬人。義時ノ弟時房、等副タリ。東海
東山、北陸ノ三道ヨリ進ム。官軍美濃、尾張、越中ニ出テ、三道ノ軍ヲ拒ク。曾利ア

北條泰時兵
ヲ率ヒテ四
上ス

官軍ト東軍
トノ比較

(五九二)

ラズ、退キテ宇治勢多ヲ守ル。官軍ハ西國ノ兵及僧兵ヲ以テ成リ、其ノ數僅ニ一萬七千餘人。而シテ之ガ將タル者、公卿ニ武士ヲ交ヘ、進退一致セザリシカドモ、東軍ハ所謂關東武士ニシテ、譜代恩顧ノ主従タリシヲ以テ、勝敗ノ數ハ初メヨリ已ニ明ナリキ。泰時長驅シテ京ニ入り、六波羅ヲ鎮シテ餘黨ヲ追捕シ、公卿ノ此ノ謀ニ與リシ者ヲ捕ヘテ、或ハ斬リ或ハ流シ、悉其ノ所領ヲ收メキ。天皇ハ幼ク坐シマシテ、何事ヲモ知リ給ハザリシカドモ、順德天皇ノ皇子ニ坐シ、ヲ以テ、位ヲ後堀河天皇ニ禪ラシメ、九條殿ニ幽シ奉レリ。因リテ九條廢帝ト申ス。後鳥羽上皇ハ隱岐ニ、順德上皇ハ佐渡ニ遷サレ給ヒキ。土御門上皇ハ嘗テ征東ノ讒ヲ諫止シ給ヒシヲ以テ、遷幸ノ讒ナカリシカドモ、皇父ト皇弟ト遠島ニ移リ給フニ、朕獨京ニ留マルニ忍ビズトノ旨ヲ義時ニ諭シ給ヒケレバ、義時乃之ヲ土佐ニ遷シ、尋イテ阿波ニ移シ奉リキ。三上皇皆簡所ニテ崩御アリ。殊ニ後鳥羽上皇ノ如キハ、茅屋ノ中ニ坐シテ、繞ニ風雨ヲ凌ギ給ヒ、賤夫モ之ヲ悲ミ奉リキト云フ。

○四節 泰時ノ辯解

此ノ處置ニ付キテ北條泰時ノ辯解ハ、當時ノ名僧ニシ

後堀河天皇
三上皇ヲ遷
シ奉ル

僧明惠泰時
ヲ請ル

テ泰時ノ請依シタリシ明惠上人傳ニ之ヲ載セタリ。曰ハク

「泰時朝臣此ノ山中ニ入來ス。法談ノ次ニ上人問ヒ奉リテ云フ、古賢ノ云フ、人多時則勝天。天定破人云云。而ルニ只武威ヲ以テ國ヲ傾ク給フト雖、其ノ徳ナクシテハ果シテ禍來ランコト久シカラマ。賢聖ノ詞不可疑。古ヨリ和漢兩國ニカテ以テ天下ヲ治メシ類、更ニ長ク持テル者ナシ。悉クモ我が朝ハ、神代ヨリ今ニ至ルマテ九十年代ニ及ビテ、世々受ク繼ギテ皇祚他ヲ雜ヘズ。百王守護ノ三十番神、未代ト雖アラタナル聞エアリ。一朝ノ萬物ハ悉國王ノ物ニ非ズト云フ事ナシ。然レバ國王トシテ是ヲ取ラレシテ、是非ニ付キテ拘ヘ惜マンズル理ナシ。タトヒ無理ニ命ヲ奪フト云フトモ、天下ニ孕マル、類義ヲ存セシ者、豈イナム事アラシヤ。若是ヲ背クベクンバ、此ノ朝外ニ出デ、天竺震旦ニモ渡ル可ク、伯夷叔齊ハ天下ノ粟ヲ食ハワトテ、朕ヲ折リテ命ヲ繼ギシテ、王命ニ背ケル者、豈王土ノ朕ヲ食センヤト詰メラレテ、其ノ理必然タリシカバ、朕ヲモ食セズシテ餓死シタリ。理ヲ知り心ヲ立テタル類、皆是ノ如シ。ザレバ公家ヨリ朝恩ヲ召シ放タレ、又命ヲ奪ヒ給フト云フ共力無シ。國ニ居ナガラ

借ミ背キ奉リ給フベキニ非ズ。然ルテ剩私ニ武威ヲ振ヒテ官軍ヲ亡シ王城ヲ破リ、剩太上天皇ヲ取リ奉リテ遠島ニ遷シ奉リ、王子后宮ヲ國々ニ流シ、月御雲客ヲ所々ニ迷ハシ、或ハ忽ニ親類ニ別レテ殿閣ニ喚ビ、或ハ立所ニ財寶ヲ奪ハレテ、路巷ニ哭スル跡ヲ聞クニ、マゾ打チ見ル所其ノ理ニ背ケリ。若理ニ背カバ、冥ヲ照覽スル天ノトガメ無カラシヤ。大ニ愼ミ給フ可シ。オボロケノ徳ヲ以テ、此ノ災ヲ償フ事有ルベカラズ。此ヲ償フ事ナクシバ、禍ノ來ラシコト腫ヲ回ラス可カラズ。ナミナミノ益ヲ以テ、此ノ罪ヲ消ス事有ル可カラズ。是ヲ消ス事ナクシバ、豈地獄ニ入ラシメテ、如クナラザラシヤ。御様ヲ見奉ルニ、是程ノ理ニ背クベキ事シ給フベキ事ニアラヌニ、何ト在リケル事ニヤト、拜謁ノ度ニハ、且ハ不思議ニ、且ハ痛ハシク存ズト云云。泰時朝臣コボレ落ツル涙ヲ、サラヌ跡ニ押シ拭ヒテ、疊紙ヲ取り出シ、鼻カミナンドシテ、押シ静メテ答ヘ申シテ云フ。此ノ事所存ノ趣、日來モ委シク語リ申シ度存ハ候ヒツルヲ、指シテ事ノ次第モ無ク候ヒテ、自然ニ罷リ過キ候ヒキ。故將軍平大相國禪門ノ一類ヲ亡シ、龍顏ヲ休メ奉リ、萬民ノ愁ヲ助ケ、君ノ爲ニ忠ヲ盡シ、忠

泰時ノ答辭

ノ爲ニ私ヲ忘レ、滋味ヲ嘗メテハマゾ君ニ備ヘン事ヲ營ミ、珍財ヲ儲テハ則公ニ献ゼン事ヲ專ニス。或時ハ諫メ申シ、或時ハ隨ヒ奉リシカバ、大將ノ門ニアリトシ在ル者、上一人ヲ重クシ奉ラズト云フ事ナシ。此ノ如ク功ヲ感マ思食シケルニヤ。官位俸祿日々ニ重ナリ、大納言ノ大將ニ成サル、ノミニ非ズ日本國ノ總追捕使ヲ賜ハラレキ。カ、ル時ハ、毎度固ク辭シ申サレテ云フ。願朝凶徒ヲ鎮メテ、敵慮ヲ休メ、貧民ヲ撫テ、勅裁ヲ亂ラザラシ事ヲ存ズ。是若キヨリ性ニ稟ケテ願ヒ來リシ所ナリ。而ルニ今飽ク迄官位ヲ極メ、恣ニ俸祿ニ飽キ、且ハ此ノ志ヲ汚スニ似タリトテ、堅ク子細ヲ申サレドモ、勅定再三ニ及ビケレバ、力無ク、勅命背キ難キニ依リテ、泣ク々々領掌申サレケリ。之ニ依リテ親類眷屬恩賞ニ浴スル中ニ、祖父時政、父義時、殊ニ鴻恩ニ誇ル。是皆法皇ノ御惠ノ下ヲ以テ榮運ヲ開ケリ。去レバ彼ノ御子孫ニ於テハ彌、無二ノ忠ヲ致シ、益純一ノ功ヲ勵マスベキ旨、深く心中ニ挿ミ候ヒキ。而ルニ法皇崩御ナリ、幕下逝去ノ後、公家ノ御政モ廢レ果テ、忠アルモ忠ヲ失ヒ、罪ナキモ罪ヲ被ムル輩勝ゲテ計ル可カラズ。諸國大ニ煩ヒ、萬民甚愁フ。指セル誤リナ

キ族、重代相傳ノ庄園ヲ召シ放タレ、朝ニ給フ者ハ夕ニ召サレ、昨日下午サル、所ハ今日改メラル。一郡一庄ニ三人四人主有リテ、國々ニ合戰絶ユル事ナシ。處々ニ浪牢ノ人多クシテ、山賊海賊充満セリ。諸人安堵ノ思ヒナク、旅客ノ通ズル事稀ナリ、サルニ付キテハ飢寒ニ賣メラル、者多ク、妖亡ニ遇フモノ數ヲ知ラズ。此ノ事此ノ兩三年殊ニ放廣ノ間、關東深ク歎マテ存ズル刻ミ、結句誤リナキ關東亡サルベキ由、内々洩レ聞エ候ヒシカド、指シタル支證ナク候ヒシ程ニ、愁ヘ申スニ及バズ、謹ミテ恐怖セシ處ニ、已ニ伊賀、判官光末ニ課シテ數萬騎ノ官軍關東ヘ發向ノ由聞ユ候ヒシ間、父義時密ニ予ヲ招キ語リテ曰ハク、既ニ天下此ノ儀ニ及ブ。何如カ計ル可キ哉。内儀ヲ能ク談マテ後、竹ノ御所ニ參リテ二位家ニ申シ合スベキ由申シ候フ間、奏時答ヘ申シテ云フ、平大相國禪門、君ヲ惱シ奉リ、國ヲ煩ハシ候ヒシニ依リテ、故大將殿御氣色ヲ承リテ討チ平ケ、上ヲ休メ下ヲ治メテヨリ以來、關東忠アリテ誤リナキ處ニ、遇無クシテ罪ヲ蒙ラン事、是偏ニ公家ノ御誤リニ非ズヤ。然レドモ一天、悉是王土ニ非ズト云フコトナシ。一朝ニ孕マル、物宜シク、君ノ御心ニ任セラルベシ。

義時犯關ノ理由

サレバ戰ヒ申サン事理ニ背ケリ。シカヲ頭ヲ低クシ手ヲ束テ各、降人ニ參リテ歎キ申スベシ。此ノ上ニ猶頭ヲ刻チラレバ、命ハ義ニ依リテ輕シ。何ノイナム所カアラソ、力無キ事ナリ。若又御優免ヲ蒙ラバ然ルベキ事ナリ。如何ナル山林ニモ住ミ、殘年ヲ送り給フベキヤト申シタリシ程ニ、義時朝臣誓案ヲテ、尤此ノ義サル事ニテアレドモ、其ハ君王ノ御政正シク、國家治マル時ノ事ナリ。今此ノ君ノ御代ト成リテ、國々亂レ、所々安カラズ、上下萬人愁ヲ抱カズト云フ事ナシ。然シテ關東進退ノ分國バカリ、聊此ハ王難ニ及バズシテ、萬民安穩ノ思ヒヲ成セリ。若御一統アラバ、禍四海ニ充テ煩一天ニ普クシテ安キ事ナク、人民大ニ愁フベシ。是私ヲ存シテ隨ヒ申サマルニ非ズ、天下ノ人ノ歎キニ代リテ、縱身ノ冥加盡キ命ヲ捨ツト云フ共痛ムベキニ非ズ。是先蹤ナキニ非ズ。周武王、漢高祖已ニ此ノ義ニ及ブ歟。其ハ猶自天下ヲ取リテ王位ニ居セリ。是ハ關東若運ヲ開クト云フ共、此ノ御位ヲ改メテ、別ノ君ヲ以テ御位ニツク申スベシ。天照太神正八幡宮モ何ノ御トガメカ有ルベキ。君ヲ誤リ奉ルベキニ非ズ。申シ進ムル近臣共ノ惡行ヲ罰スルマテ、コソアレ、急ギ罷リ立ツ

泰時四上ノ理由

ベシ此ノ旨ヲ二位家ニ申スベシトテ坐ヲ立チシカバ力及バズ是又一義無キニ非ザル上ハ父ノ命背キ難キニ依リテ隨ヒキ仍リテ打チ立チテ上洛仕リ候ヒシニ先八幡大菩薩ノ御前ニアル橋ノ本ニシテ馬ヨリ下リ頭ヲ低レテ信心ヲ致シテ祈リ申シテ云フ此ノ度ノ上洛理ニ背カバ忽ニ泰時ガ命ヲ召サレテ後生ヲ助ク給フベシ若天下ノ助ケト成リテ人民ヲ安メテ佛神ヲ興シ奉ルベキナラバ哀憐ヲ垂レ給ヘ冥慮定メテ照覽有ラソカ聊私ヲ存ゼズト云云又二所三島明神ノ御前ニシテ誓ヲ立ツル事同シ其ノ後ハ偏ニ命ヲ天ニ任セラ只運ノ極マラン事ヲ待チケリ而ルニ聊ノ難ナクシテ今ニ存セリ是ノ如キハ始ノ願ノ果ス所カ而ルニ若予緩怠ニシテ佛神ヲ興サズ國家ノ政ヲ大ニ資クズンバ罪一身ニ歸スベシ仍リテ一度食スルニ士來レベ終ヘズシテ急ギ是ヲ聞キ一度髮梳ルニ士來レベ終ザルニ先是ニ逢フ一休一緩尙安カラズ士愁ヲ懷キテ待タンコトヲ畏ル進ンデハ深ク萬民ヲ撫アソ事ヲ計リ退キテハ必一身ニ失アラソコトヲ思フト云ヘドモ天性驕味ニシテ及バザル所アラソカ誠ニ其ノ罪脱レ難シ今慈悲ノ仰ヲ承リテ感涙禁マ

(五九八)

難シト云云

○節五 承久兵亂ノ結果

官軍一敗地ニ塗レ北條氏關東將軍ノ執權ヲ以テ勢力ヲ闕下ニ振ヒ至尊ヲ遷シ奉リ公卿ヲ處分シタルハ即是武力ノ文政ニ對シテ全勝ヲ占メシ時ニシテ政權ノ將門ニ移リシコト此ニ至リテ徹底ス地理上ヨリ之ヲ論ズレバ天下ニ號令スル權ハ此ノ時ヨリ武士ノ本據タル關東ニ移リ京都ハ尙天皇ノ所在タリシカドモ政府ノ所在ニ非ザルニ至レリ又承久兵亂ノ結果トシテ社會上ニ生マタルモノハ以後ノ歴史ニ大關係アリ即所謂新補地頭是ナリ後世ノ大小名ノ起原ナリ

小大名ノ起原

○節六 新補地頭

初メ源頼朝自總地頭ト爲リ麾下ノ家人ヲ以テ諸國ノ地頭ニ補セシトキ其ノ地頭ハ自土地ヲ領セズ唯他人ノ領地ニ於テ所務即諸ヲ催促スルコトヲノミ司リキ然ルニ承久ノ亂後多ク關東ニ敵セシ公卿ノ土地ヲ沒收シタリシヨリ茲ニ一種ノ地頭ヲ出ダスニ至レリ即チ他ニ土地ノ所領權ヲ有スル者ナキ所ニ補セラレシ地頭是ナリ之ヲ新補ト云ヒ承久以前ノ地頭ヲ本補ト云フ從來ハ庄園ノ本主其土地ヲ領有シ唯租稅ニ就キテ地

新補ト本補トノ別

領有權ト支
配トナシテ
生ズル地頭

頭ノ支配ヲ受クルノミナリキ。此ノ本主ヲ當時ノ隔ニテ領家、又ハ本所ト云フ。多クハ京都ノ公家ニシテ、其ノ領地ニハ代官庄司ヲ置キタリ、又社寺ニ於テ領シタル所アリキ。之ヲ社領寺領ト云ヘリ。然ルニ承平ノ亂ニ功有リテ地頭ニ補セラレシ者ニハ、別ニ其ノ地ノ本主タル者有ラザリキ。是緊要ナル區別ナリ。此ノ新種ノ土地ハ將軍ノ權勢ト共ニ増加シ、又幕府ニ於テモ其ノ益増加セシコトヲ計リシヲ以テ、終ニ天下ハ領有權ト支配權トヲ兼有セル地頭即大名ノ手ニ歸シタルコト、是此ノ以後ノ社會ニ生々タル一大現象ナリ。

(700)

第五十九章 北條氏ノ執權

○一 京都ノ兩六波羅

爾後常ニ幕府ノ親信セル者ヲ遣シテ交代守護セシメキ。承久ノ亂定マルニ及ビテ泰時、時房ト共ニ入りテ六波羅ノ南北ニ居リ、政務ヲ處理ス。之ヲ兩六波羅ト云フ。仲恭天皇ヲ廢シテ後堀河天皇ヲ立テ、三上皇ヲ外ニ遷シ奉リシガ如キ、皆義時ノ意ヲ承クテ、兩六波羅府ノ執行セシ所ナリ。泰時六波羅ニ居ルコト四年。元仁元年紀元千八百八十四年、義時卒去ノ時ヲ以テ、鎌倉ニ歸リテ執權ト爲リ、式目ヲ定メテ時房ニ送ル。尋イテ時房モ亦鎌倉ニ歸リ、泰時ノ子、時氏、時房ノ子、時盛ヲシテ代リテ京都ヲ護ラシム。是ヨリ六波羅ハ京師警衛ノ府トナリ、畿内及西海ノ軍事ヲ總ベタリ、而シテ北條氏常ニ子弟ノ俊秀ナル者ヲ擇ビテ其ノ職ニ居ラシムルコト例ト成リヌ。

○二 關東評定衆

北條氏ノ政權ヲ得タルハ、唯人民ノ塗炭ヲ救ハシガ爲ノミ、其ノ他ニ毫末モ正當ノ理由アルニ非ザリシコト、泰時ノ辯解ヲ以テ之

北條氏兩六波羅府ヲ京都ニ置ク

泰時執權トナル

六波羅府ノ職掌

北條氏ノ歴
史上ニ跡ヲ
存スル所以

評定衆ヲ置
キテ事務ヲ
合議ス

政所ノ職掌
變更ス

泰時食民ヲ
救濟シ流民
ヲ賑給ス

ヲ知ルベシ。而シテ若カク收メタル權力ヲ不正ニ使用シタランニハ、北條氏モ亦戰國ノ一強族タルニ過ギザルベケレドモ、泰時以下數代ノ間之ヲ善用シタルハ、北條氏ノ日本歴史ニ跡ヲ存スル所以ナリ。

北條政子ノ世ニアルニ當リテハ、政務悉其ノ裁可ニ出テシカドモ、其ノ薨後泰時等敢テ事ヲ專斷セズ、評定衆ヲ置キテ政務ヲ合議セシメタリ。是實ニ計畫ノ宜シキヲ得タルモノニシテ又人心ノ歸セシ所以ナリ。泰時以後代々ノ執權及連署執權トハ副並ニ評定衆ノ姓名ハ、關東評定傳ト云ヘル書ニ之ヲ載セタリ。此ノ時侍所及問注所ハ尙存シ、獨政所ノミ稍變更アリテ、政務ヲ議スル職ハ評定衆ニ移リ、政所執事ハ將軍ノ財用ヲ掌ル職トナレリ。

○三 泰時ノ善政 保元平治ノ亂ヨリ以降朝廷ノ法度悉廢レ、莊園ノ代官等唯人民ノ膏血ヲ絞ルヲ以テ職トセリ。然ルニ泰時力メテ其ノ弊ヲ正シ、大ニ民心ヲ得タリ。寛喜中諸國大ニ饑エヌ。泰時米九千石ヲ發シテ貧民ヲ救濟シ又美濃大久禮等千餘町ノ田租ヲ停メテ流民ヲ賑給シ、其ノ親故ニ依ラント欲スル者ハ、行程ヲ量リテ資糧ヲ與ヘ、住ヲ願フ者ハ、所在ノ莊園ニ命マテ收視セ

領主逃散人
民ノ妻子資
財ヲ抑留ス
ルヲ禁ズ

券ヲ火キテ
民ヲ安ンズ
節儉ヲ行フ

シメキ。又式目ヲ選ビテ裁判ヲ嚴ニセリ。其ノ中ニ一條ヲ設ケテ曰ハク、諸國ノ住民逃脫ノ時、其ノ領主等逃散ト稱シ、妻子ヲ抑留シ、資財ヲ奪取スル所行ノ企、甚仁政ニ背ケリ。若召シ決セラル、處年貢所當ノ未濟アラバ、其償ヲ致スベシ。然ラズバ早ク損物ヲ糺シ返サルベシ。但シ去留ニ於テハ宜シク民ノ意ニ任スベキナリト。是即百姓課役ニ堪ヘズシテ逃散スルハ、領主其ノ妻子資財ヲ抑留スルヲ禁ゼシナリ。嘗テ北條地名ノ住民飢ウ。泰時米ヲ出シテ之ニ貸與シ、秋ニ至リテ償却スベキヲ約ス。然ルニ風ニ遇ヒテ辨ズルコト能ハズ、相率非テ流亡セントス。泰時自北條ニ至リ、悉負債者ヲ會シテ酒食セシメ、券ヲ火中ニ投ヤ。且米一斗ヲ與ヘタリ。其ノ他之ニ類スル談話多ク東鑑ニ見ユ。泰時素ヨリ節儉ヲ行ヒ、第宅ノ如キモ牆版疏薄ニシテ、外ヨリ室家ヲ窺ヒ視ルコトヲ得タリ。或人之ニ謂ヒテ曰ハク、土牆ヲ築キ塹ヲ設ケ、以テ不慮ニ備ヘナバ如何ト。泰時曰ハク、牆塹ノ設、小舉ト雖民ノ力ヲ勞セン。且我君ニ事ヘテ失無クバ、身家全キヲ得ベク、若天命ヲ失ハバ、鐵牆トイフトモ何ノ補カ之アラマヤト。

○四 貞永式目 泰時ノ偉功ハ貞永式目ノ編纂ナリ。其ノ法理及條文ハ當

貞永式目ノ
保歴史上ノ関

式目施行ノ
範圍

新編追加

經時ノ執權
時頼ノ執權
三浦氏ノ滅
ボス

(六〇四)

時ノ形勢ヲ觀ルニ甚便ナレドモ、之ヲ別ニ著ス所ノ古代法釋義ニ譲リ、茲ニハ
唯其ノ歴史上ノ關係ヲ叙スベシ。此ノ式目五十一條ハ頼朝及二位、尼ノ判決
例ヲ根基トシ、又條理ヲ參酌シテ武家裁判ノ標準ヲ定メシ者ナリ。其ノ中神社
佛寺ノ修理、守護地頭ノ懲戒、所領ノ安堵及兇奸ノ處罰ニ係ル條項最多シトス。
時ニ朝廷ノ刑律トシテハ、尙大寶律ヲ施行シタリシカドモ、其ノ規程ハ多ク武
家ニ適セズ、且漢文ニシテ武士ノ能ク解スル所ニ非ザリシヲ以テ、當時常用ノ
文牒ヲ用ヰテ式目ヲ叙シタリ、而シテ初メハ之ヲ將軍家人ノ上ニノミ行フ目
的ナリシカド、武家ノ權力増長スルニ從ヒ、施行ノ範圍モ漸廣マリテ、遂ニ滿天
下ノ法律ト成ルニ至リシナリ。後世、執權ノ時勢ニ隨ヒテ改修増補シタルモ
ノヲ集メテ、之ヲ新編追加ト云フ。

○五節 時頼ノ節儉

四條天皇ノ仁治三年元千九百二年、泰時卒シ、翌年後繼、寛元
元經時執權ト爲ル。四年經時卒シ、弟時頼執權ト爲ル。時頼ハ泰時ノ孫、時氏ノ子
ナリ。在職ノ間三浦氏將軍頼經ノ陰謀ニ與スルヲ以テ、其ノ族ヲ滅ボス。三浦氏
ハ頼朝以來ノ名家ニシテ、殊ニ北條氏トハ親密ノ間ナリキ。後深草天皇ノ康元

最明寺殿

時頼ノ母
儉ヲ數フ

元年元千九百十六年、時頼病ニ因リテ薨髮シ、最明寺ニ遷隴ス。因リテ最明寺殿ト稱ス。
子時宗幼ナルヲ以テ、職ヲ族長時ニ委ヌ。然レドモ獨軍政ニ參與シ、又獄ノ決シ
難キモノアル毎ニ、自評定ニ加ハル。時頼一ニ貞永式目ヲ守リ、頼朝以後三代將
軍ノ舊制ヲ改メズ。士庶翕然トシテ靡服ス。又泰時ノ遺訓ヲ守リテ、常ニ儉約ヲ
行ヘリ。徒然草ニ時頼ノ母之ニ儉約ヲ誦シ教フル一段アリ。曰ハク、

「相摸守時頼ノ母は松下の禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝこと有りけ
るに相摸守チ禪尼ノ母すゝけたるあかり障子の破ればかりを禪尼手づか
ら小刀にて切りまはしつゝ張られければ、せうどの城介義景禪尼ノ其の日
のけいめい経營して候ひけるが、給はりて障子チ此方なにかし男に張らせ
候はん。左様の事に心得たる者なりと申されければ、其の男尼が細工によも
勝りはべらじとて、尙一間づゝ張られけるを、義景智を張り替へ候はんは、遙
に容易く候ふべし。まだらに候ふも見苦しくやと重ねて申されければ、尼も
後にはさはゝと張りかへんと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべ
きなり。物は破れたる所ばかりを修理して用うる事ぞと、若き人に見習はせ

て心付けん爲なりと申されける。いと有りがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を子に持たれける。賊に凡人には非ざりけるとぞ。

又同書に最明寺入道鶴が岡の社參の次に、足利左馬の入道氏の許へ、まづ使を遣して立ち入られたりけるに、あるじ設けられたりける様様應應一献にうちあはび斗二献に海老、三献にかいもち今云云にて止みぬ。亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の人にて坐せられけり云云トアリ。質素ノ風以テ見ルベシ

時頼諸國ヲ巡行シ風俗ヲ察シテ宛テ申シテ仲ア

○六 最明寺ノ巡國

泰時以來綱紀稍弛ミ、訟獄茲ニ起ル。時頼諸國ノ吏

或ハ私ヲ挾ミ民ヲ害スル者アルヲ恐レ、威服シテ遊僧ト爲リ、四方ニ間行シテ、潜ニ風俗ヲ察シ、若奸吏ノ爲ニ苦メラル、者アルトキハ、書ヲ鎌倉ニ傳ヘテ正當ニ裁判ヲ受クルコトヲ得シメタリ。嘗テ攝津ニ抵レルトキ、日暮レテ宿ニ投ズ。其ノ家屋壁傾頽シ、老尼獨居リ、自爨炊シテ飯ヲ進ム。時頼尼ノ賤役ニ慣レザルヲ見、怪ミテ其ノ來歴ヲ問フ。尼涙ヲ垂レテ曰ハク、我が家世、此ノ邑ヲ食ス。不幸ニシテ夫ニ離レ子ヲ失ヒ、門戸殄瘁シ、遂ニ人ノ爲ニ奪ハレ、告訴スル所ナシ。

孤棲廿餘年。殘財軀ヲ保ツニ足ルノミト。時頼之ヲ憫ミ、鎌倉ニ歸ルニ及ビテ命ヲテ其ノ舊邑ヲ復セシム。其ノ餘歴ル所ノ地、察問辨覈シ、善惡ニ隨ヒテ賞罰ヲ行フ。是ヨリ郡國ノ吏、漸自戒修スル所アリ。風化厚キニ歸シ、戶口豐安ナリ。最明寺微行ノ事、詳ニ太平記、増鏡等ノ書ニ見エタリ。

○七 青砥藤綱

時頼嘗テ鶴岡ニ詣テ齋宿ス。夢ニ神告アリ。曰ハク、汝治ヲ

致サント欲セバ、須ラク青砥某ヲ用ウベシト。明日書ヲ下レテ藤綱ヲ徵シ、食邑數所ヲ給ス。藤綱怪ミテ其ノ故ヲ問フ。時頼告グルニ、實ヲ以テス。藤綱辭シテ曰ハク、佛經ニ實相ナキヲ譬ヘテ、夢幻泡影ノ如シト曰ヘリ。今夢ヲ以テ僕ヲ用ハバ、他日又夢ヲ以テ僕ヲ斬ルカ。功無クシテ賞ヲ受クル之ヲ國賊ト云フ。僕未微功アラズ。敢テ當ラズト。時頼其ノ言ヲ賢トシテ、益之ヲ敬異シ、奏シテ左衛門尉ヲ授ケ、引付衆ト爲ス。即今ノ判事ナリ。嘗テ北條氏ノ德宗ト田領ヲ争フ者アリ。德宗トハ北條氏ノ家督ニ屬スル知行所ヲ云フ。衆皆時頼ヲ憚リ、理ヲ德宗ニ歸ス。藤綱其ノ事ヲ覆議シ、田領ヲ以テ本主ニ歸ス。本主大ニ喜ビ、錢三百貫ヲ裏ミテ、密ニ藤綱ノ庭内ニ置ク。藤綱忿リテ之ヲ還ス。又誤リテ十錢ヲ滑川水中ニ墜

時頼嘗テ藤綱ヲ用ス

藤綱ノ性行

(KOK)

シ、炬ヲ買ヒテ之ヲ撈ラシムルニ五十錢ヲ費シ、ハ世ニ知ラレタル一話ナリ
藤綱家富ムト雖、極メテ清約ナリ。性施與ヲ好ミ、受クル所ノ俸悉貧困ニ給ス。又
廉潔剛直ニシテ、權貴ヲ憚ラズ。是ニ於テ姦吏跡ヲ斂メ、人々自正シ。一時ノ風俗
翕然トシテ頓ニ改マリヌ。時頼、時宗ノ治、藤綱ノ補益スル所最多カリキト云フ。

○八代々將軍ノ處置 此ノ如ク鎌倉幕府ノ君臣ハ、務メテ仁政ヲ行ヒ

北條氏將軍
ニ對スル處
置ノ專横

シテ以テ治民ノ術ニ至リテハ、間然スル所ナカリシカドモ、唯京都ヨリ迎ヘ立
テシ代々ノ將軍ニ對スル處置ニ至リテハ、專横ニ涉レルモノ無キニ非ズ。經時
執權タリシ時、將軍頼經ヲ廢シテ子頼嗣ヲ立ツ。時頼執權トナルニ及ビテ、又頼
嗣ヲ廢シテ宗尊親王ヲ立ツ。親王ハ即時ノ天皇ノ御兄ナリ。既ニシテ宗尊親王
モ亦執權時宗ノ爲ニ廢セラレタリ。凡此等ノ廢黜ハ、皆其ノ罪ヲ竊ニ北條氏ヲ
斃サント企テシニ歸セリト雖、果シテ眞ニ此ノ如キ隱謀アリシヤ否ヤ、當時ノ
記録東鑑ノ如キハ、北條氏ノ爲ニ庇ヒタル所アルヲ以テ、悉信ズ可カラズ。思フ
ニ幼者ヲ迎ヘテ將軍ト爲シ、其ノ年長ヲ智慮生マ、北條氏ニ利アラザルニ至
レルトキハ、事ニ托シテ之ヲ廢セシニハ非ザルカ。又皇族ヲ迎ヘテ將軍ト爲

幼者ヲ將軍
トセル所以

皇族ヲ迎立
セシ所以

スガ如キモ、北條氏先代ヨリノ計畫ニシテ、實朝薨去ノ時既ニ之ヲ奏請シタレ
ドモ許サレズ。時頼ニ至リテ始メテ其ノ素志ヲ遂グルコトヲ得タリシナリ。而
シテ一説ニ、是朝廷モシ再北條氏ヲ伐タントシ給フコトアルトキハ、關東ニ於
テモ別ニ天子ヲ擁立セシガ爲ナリト云ヘリ。

○九時宗及元寇 北條時宗ハ時頼ノ子ナリ。甫メテ七歳、宗尊親王ノ府ニ

時宗執權ト
ナル

元國通使ヲ
求ム

冠シ、名ヲ時宗ト賜フ。初メ時頼薙髮セシ時、時宗尙幼ナリ。長時、政村相續キテ執
權ノ事ヲ攝ス。龜山天皇ノ文永五年紀元千九百二十年ニ至リ、時宗十八歳ニシテ執權
ト爲ル。宗尊親王ノ子惟康將軍タリ。是ノ歲、元國高麗ニ依リテ書ヲ獻サ、通使ヲ
求ム。時宗之ヲ朝廷ニ奏ス。廷議前、權中納言藤原長成ニ命ヲテ答書ヲ草セシメ
之ヲ時宗ニ下テ議セシム。時宗元ノ書辭ヲ無禮ナリトシ、答書ヲ與ヘズシテ其
ノ使ヲ卻ケタリ。八年、元使復來ル。廷議前ニ草シタル答書ヲ修飾シテ之ニ與ヘ
ントス。時宗又之ヲ不可トシ、遂ニ報ゼズ。十一年、元兵對馬ニ來寇ス。鎮西ノ將士
拒戰シテ之ヲ卻ク。翌建治元年、元使再長門ノ室津ニ至ル。時宗命ヲテ之ヲ鎌倉
ニ因致シ、悉之ヲ斬ル。乃筑紫ニ探題ヲ置キ、軍務ヲ節制シ、鎮西ノ將士ヲ簡ミ

元使ヲ斬ル

元大舉シテ
東寇ス

大ニ元兵ヲ
殺ル

貞時執權ト
ナル

(六一〇)

テ邊海ヲ成ラシメ、京師ノ大番ヲ停メ、國用ヲ省減シ、民庶ヲ休息シ、豫之ガ備ヲ爲ス。明年春、特ニ兵ヲ發シテ高麗ヲ征セントシ、西海、山陰、山陽、南海ノ諸道ニ令シテ戰艦ヲ修メシム。既ニシテ元使復來ル、乃之ヲ博多ニ斬ル。安弘四年元紀元四年元大舉シテ來リ、太宰府ニ寇ス。其ノ兵凡十萬人、關東九州二道ノ兵皆太宰府ニ集マリテ防戰ス。龜山天皇宸筆ノ願文ヲ伊勢太神宮ニ奉リ、身ヲ以テ國難ニ代ラント願ヒ給ヘリ。然ルニ敵ノ軍艦ハ之ヲ我が船ニ比スレバ頗強大ナリシガ上ニ、銃砲ヲ用キタルヲ以テ、我が軍對等ノ水戰ヲ爲スコトヲ得ズ。唯勇悍ノ將士敵隊ニ躍リ入り、所謂拔ク駆ケノ高名ヲ爲スノミナリキ。時ニ暴風俄ニ起リ、元艦爲ニ破壊ス。我が軍之ニ乘サテ奮撃シ、大ニ之ヲ破ル。元兵殆盡キ生キテ還ル者僅ニ三人ナリキト云フ。當時元主ハ有名ナル忽必烈ナリ。若北條氏ナカリセバ、京都政府ノ文弱ナル、到底元軍ヲ制スベキニ非ズ。時宗ノ如キハ能ク其ノ職ヲ盡シタルモノト謂フベシ。

時宗卒シテ子貞時執權ト爲リ、將軍惟康ヲ廢シテ後深草天皇ノ皇子久明親王ヲ迎ヘ立ツ。幾バクモ無クシテ又之ヲ廢シ、親王ノ子守邦ヲ立ツ。元寇ヨリ以後

北條氏ノ業
稍衰フ

三十年間天下無事ナリシカドモ、貞時政務ニ怠リシヲ以テ、北條氏ノ業稍衰ヘ、最後ノ執權高時ノ時ニ至レリ。

第六十章 鎌倉時代ノ文藝及宗教

京都ノ文藝
鎌倉ノ文藝

書風二派ト
ナル

○節一 文藝二流ニ分ル 鎌倉時代ヨリ日本國民ノ文藝二流ニ分レタリ。即一ハ京都ノ文藝ニシテ、一ハ鎌倉ノ文藝ナリ。前者ハ朝廷ヲ中心トシ、後者ハ幕府ヲ中心トス。京都ノ文藝ハ源ヲ隋唐ニ發シ、變遷シテ國民ノ固有ト爲リ、專公卿ノ間ニ流行ス。鎌倉ノ文藝ハ源ヲ宋元ニ發シ、特ニ文人ノ一派ニ染入セリ。其ノ狀態ヨリ見レバ京都ノ文藝ハ社會現在ノ形物ヲ修飾スルニ傾キ、鎌倉ノ文藝ハ人世ヲ離レテ深山幽谷ノ間ニ見ルベキ天然ノ風致ヲ慕フ趣アリ、即一ハ樂天的ニシテ、一ハ厭世的ナリシナリ。後ニ至リテハ此ノ二流ノ文藝混合シテ、以テ今日國民ノ文藝ト爲レリト雖、元二流ニシテ別異ナルコトハ、書畫、建築、園藝等ノ上ニ顯レタリ。從來京都ノ書態ハ大師、道風ノ後ヲ受ク、貫之ニ至リテ漸優和ニ流レ、所謂御家ノ風ヲ爲シタルニ、鎌倉ノ禪林ニハ普寧、祖元、溪月、一寧以下ノ諸師皆墨蹟ニ名アリテ、純粹ノ漢樣ヲ書キタリキ。其ノ師傳系統ノ如キハ、藤野宗郁ノ墨蹟祖師傳ニ詳ナリ。又之ヲ丹青ニ見ルニ京都ニ於

書風二派ト
ナル

テハ金岡、慶恩ノ後ヲ受ク、巨勢、春日、住吉、土佐ノ流ト爲リ、一種和臭ヲ帶ビタル書風行ハレタルニ、鎌倉幕府ニ及ビテハ、南宗ノ馬遠、夏珪、牧溪ノ風類ニ行ハレ、後ニ雪舟、可翁、如雪、周文ノ輩ヲ經テ狩野家ニ至リ、全ク漢畫ノ風ヲ爲セリ。書畫ノ二道既ニ一變ス、而シテ造園、築庭ノ技術モ亦共ニ一變シ、多ク山水ノ風景ヲ模スルニ至レリ。又彫刻師ニハ陳和惠、雲慶ノ徒アリ。皆宋國ノ人ニシテ、當時ノ風ヲ本朝ニ傳ヘタリキ。

○節二 京都ノ文藝 大權關東ニ移リテヨリ、後醍醐天皇復古ヲ計畫シ給フニ至ルマデ、凡百三十年ヲ經タリ。其ノ間ノ朝廷ノ形勢ヲ察スルニ、増鏡ノ錄スル所ヲ以テ之ヲ觀ルモ、宮中年中ノ行事ハ古今變スルコトナク、特ニ歌道ハ隆盛ナリシナリ。

後鳥羽上皇ノ文事ハ、此ノ時代ニ於ケル京都文學ノ中心ヲ爲セリ。上皇才藝人ニ越エ、殊ニ和歌ヲ善クシ給ヘリ。臣下ニ御子左俊成アリ。平居和歌ヲ詠シ、古今ノ大家ト稱セラル。嘗テ後白河法皇ノ詔ヲ奉シテ千載和歌集ヲ撰ス。上皇之ヲ優遇シ、建仁三年俊成年九十二及ベルヲ以テ、賀ヲ和歌所ニ賜ヒ、御製ノ和歌

後鳥羽上皇
ノ文藝

藤原俊成

藤原定家

(六一四)

百人一首

定家ノ明月記

及鳩杖ヲ賜ヒマ。其ノ子定家亦異名アリキ。承久以後ハ朝廷益無事ナリシヲ以テ、續後撰集、續古今集、新後撰集、玉葉集等ノ歌書陸續選定セラレタリ。新古今集ノ時ヨリ歌道ニ風ニ分ル。定家歌道ノ眞實ヲ離レテ華艶ニ流ル、ヲ難ク、小倉ノ山莊ニ退隱シ、實ヲ先ニシ華ヲ後ニセル古人ノ名歌百首ヲ選ビテ、規模ヲ後世ニ遺シタルモノ、即今ノ百人一首ナリ。文章ヲ以テ歌態ノ得失ヲ論ズルコト、亦此ノ時ヨリ始マル。鴨、長明ノ無名抄ノ如キ即是ナリ。定家ノ明月記ハ自家ノ日記ニシテ、大半ハ今尙世ニ存シ、當時公卿日々ノ生活ヲ見ルニ便ナリ。其ノ文牀ハ國語ヲ漢文ノ躰ニ綴リタル者ニシテ、此ノ時代ノ文書ヲ知ラザル者ハ、甚通讀ニ苦ム所ナリ。定家ノ子ヲ爲家ト云フ。爲家ノ没後其ノ妻剃髮シテ阿佛尼ト稱ス。歌道ヲ子爲相ニ傳フ。爲家嘗テ源實朝ヨリ播磨國細川ノ莊ヲ授ケラレ、之ヲ爲相ニ讓ル。然ルニ爲相幼少ナリシカバ、異母兄爲氏之ヲ奉領シ、阿佛尼母子爲ニ困窮ニ陥リタリ。阿佛尼乃五子ヲ京都ニ置キ、鎌倉ニ下リテ之ヲ訴フ。其ノ道中記ヲ十六夜日記ト云フ。今ニ傳ヘテ國文ノ撰範トス。日本文學史ニ之ヲ載セマリ。其ノ古本ノ奥ニ後人ノ書入アリ。曰ハク、此阿佛ト申ス人ハ、定家ノ息

十六夜日記

爲家ノ室ナリキ。シテ五人マシマシ候フ。播磨ノ國細川ノ庄ヲ爲家ヨリ讓リオカレ候フテ、爲氏他腹ニヨリテ押領候フ。訴訟ノ爲ニ、鎌倉ヘ下ラレ候フ時ノ道ノ日記ニテ候フ。爲氏モ陳狀ノ爲ニ鎌倉ヘ下向、兩人トモニ鎌倉ニテ死去セラレ、訴訟ハ爲氏ノ方ヘハツケラレズ候ヒシト云云ト。

○三 節 鎌倉ノ文藝

關東ニ於テハ北條泰時、時頼、時宗深ク佛法ヲ信シ、諸方ニ寺院ヲ建テ、宋元ヨリ渡來セシ禪僧ヲ以テ此ニ居ラシメシニ因リ、自然一種ノ文藝ヲ生ズルニ至レリ。本邦美術ノ今日ニ傳ハレルモノニシテ、其ノ始メテ鎌倉ノ禪院ニ開キシモノ亦少カラズ。武門ノ世固ヨリ文事ノ社會一般ニ行ハルベキニ非ズ。一般文事ノ淺深ハ、式目及東鑑ヲ以テ測リ知ルコトヲ得ベシ。

而シテ此ニ謂フ關東一派ノ新文事ハ多ク僧徒ノ玩ビシ所ニシテ、鎌倉五山、關東十刹ナド稱スル寺院ヲ其ノ中心トセシモノナリ。蓋北條氏ノ善政ハ高時ノ爲ニ汚黷セラレテ、功過相償ハズト雖、彼ノ式目ト寺院トニ至リテハ、巍然トシテ形跡ヲ後世ニ存シ、今ニ至リ杖ヲ鎌倉ニ曳ク者ヲシテ、其ノ舊跡ヲ訪ヒテ轉懷古ノ情ニ堪ヘザラシムルモノアリ。

北條氏之遺物

帝國史略

第六期

第六十章

鎌倉時代ノ文藝及宗教

(六一五)

鎌倉五山
建長寺
時宗
僧
來

(六一六)

建長寺ハ鎌倉五山ノ第一ニシテ時頼ノ精誠ヲ凝ラシテ建立セシ所ナリ。建長三年百十一年九月八日工ヲ起シ、五年十一月二十五日竣功ス。宋ノ大覺禪師道隆之ガ開山タリ。道隆ハ蘭溪ト號ス。西蜀ノ人ナリ。無準、癡絕、北磻、無明ノ諸師ニ參シ、明州ノ天童山ニ寄寓ス。日本教法蕃榮スト雖禪宗ハ尙草昧ニ屬スト聞キ、常ニ遊化ヲ志ス。淳祐六年往キテ日本ノ商舶ヲ見、途上偉人ニ逢フ。師ニ言ツテ曰ハク、東方ノ綠化時已ニ至レリト。盲訖ヘテ隱ル。乃義翁、龍江等ノ輩ヲ從ヘテ太宰府ニ來ル。實ニ我が寛元四年ナリ。先筑紫ノ圓覺寺ニ寓居シ、彼泉涌寺ニ移リ、鎌倉ニ到ル。時頼之ヲ常樂寺ニ居ラシメ、餘暇ニ就キテ法ヲ問フ。遂ニ建長寺ヲ營ミ、之ヲ開山祖師ト爲シタリ。京都南禪寺ノ一寧國師モ亦宋ノ台州ノ人ナリ。後元ニ屬ス。北條貞時ノ時來朝シテ建長寺ニ住シ、寧一山ト稱シ、文事ニ高名ナリ。建長寺ノ庭園ハ今尙存在シ、寧一山ノ意匠ニ出ゾト云フ。是即本邦ノ庭園ニ幽遠ナル山水ヲ擬セシ始メナリ。此ノ以前ハ野庭ト稱シテ、唯野外ノ光景ヲ摸スルニ止マリキ。子墨禪師モ亦宋國ノ台州ノ人ナリ。西磻ト號ス。寧一山下船ヲ同シクシテ來リ、貞時ノ師ト爲ル。初メ圓覺寺ニ居リ、後建長寺ニ移ル。

鎌倉五山
建長寺
時宗
僧
來

圓覺寺

時宗名僧
宋ニ聘ス

其ノ他圓覺禪師、道隱禪師、潭園禪師等宋國ヨリ渡來シテ建長寺ニ住スル者前後絶エサリキ。

建長寺
淨智寺
淨明寺

鎌倉五山ノ第二ヲ圓覺寺トナス。弘安五年時宗ノ建立ニ係ル。開山ハ宋ノ佛光禪師ナリ。時宗疏幣ヲ具ヘ、海ニ航シテ名宿ヲ聘ス云云ノ事、元亨釋書ニ見エタリ。而シテ時宗入宋ノ僧詮藏主及英典主ニ托シ、彼ノ國ニ至リテ名僧ヲ迎ヘシムル自筆ノ狀、今尙圓覺寺ニ藏セリ。其ノ文ニ曰ハク、時宗意ヲ宗乘ニ留ムルコト、積ミテ年序アリ。梵苑ヲ建營シ、鐘流ヲ安止ス。但シ時宗毎ニ懷フ。水ハ其ノ源アリ。樹ハ其ノ根アリ。是ヲ以テ宋朝ノ名勝ヲ請ク。其ノ道ヲ助行セシト欲ス。詮英二兄ヲ煩ハス。鯨波險阻ヲ避クルコトナク、俊傑ヲ誘引シテ本國ニ歸來セシメ、コトヲ望ト爲スノミ。不宣。弘安元年戊寅十二月廿三日、詮藏主禪師、英典主禪師、時宗和南ト、五山ノ第三ハ壽福寺ナリ。二位、尼ノ時ノ建立ナルヲ以テ、五山中ノ最古キモノトナス。開山ハ千光國師榮西ナリ。淨智寺ヲ五山ノ第四トシ、淨妙寺ヲ第五トス。但シ五座ノ順ハ、後ニ足利義滿ノ定メシ所ナリト云フ。時頼、時宗、貞時等ノ願ニ宋ノ高僧ヲ聘シテ、爲ニ寺院ヲ造營セシハ、何ノ目的ニ

北條時頼等ノ高僧ヲ聘シテ寺院ヲ造ラシメシ目的等

出アシヲ知ラズ。唯其ノ教義法話ヲ喜ビタルニ因ルカ。又他ニ求ムル所アリシカ。今之ヲ推測スルニ由ナシ。蓋北條氏亂世ノ後ヲ受ク、僅ニ訴訟檢斷ノ公平ト、自家ヲ守ル節儉ト、窮民ニ對スル仁恤トヲ以テ、假ニ人心ヲ收ムルコトヲ得タリト雖形而上ノ制作ニ至リテハ、本來一物アルニ非ズ。過去ヲ問ヘバ則伊豆ノ一豪族タルニ過ギザレドモ、其ノ現在ヲ見レバ、則表面將軍ヲ京都ヨリ迎ヘテ其ノ廢立ヲ恣ニシ、裏面ニ實權ヲ握リテ天下ニ號令セルモノナリ。而シテ京都ノ政府ハ武事ニユン迂ケレ。文事ハ甚隆盛ニシテ。詩歌管絃アリ、文章アリ、繪畫アリ、宮殿アリ、社寺アリテ、凡精神上ノ制作ハ平安城裏ニ聚マレリ。サルニ關東ニハ一切此等ノモノ無ク、且却リテ京都文弱ノ風ニ染マザルヲ主義トシタリ。然レドモ凡治平ノ世ニ於テ、精神上ノ制作ハ一日モ無キコト能ハザル所ナルヲ以テ、禪林隱逸清雅ノ風ノ善ク其ノ質素ノ主義ニ適シ、加之京都ニ依ラズシテ直ニ之ヲ支那ヨリ容ル、ヲ得ベキヲ見、宋元ノ高僧ヲ聘シテ一種ノ文藝ヲ興シ、却リテ京都ヲシテ、之ヲ崇敬セシメントスル策ニ出テタルモノ歟。

○四節 隱逸ノ風起ル(長明西行兼好)

カク東西ニ二流ノ文藝起リテ相

東西文藝ノ衝突ニ際シテタル二箇ノ現象

隱逸ノ風ヲ生シタル所ヲ以テ長明

衝突スルニ際シ、社會ニ二箇ノ現象ヲ生マタルニ注目スベシ。即隱逸ノ風起リシト、新宗ヲ開ク者出テシトノ二事是ナリ。建久以降天下ノ形勢ヲ察スルニ、京都ニハ月脚雲客充滿シタレドモ、雖自歌ノ勅撰歌集ニ加ラレシトモトテ、競ヘルノミニシテ、國家至難ノ時ニ際シ、進ミテ經營ノ策ヲ獻セントスル者無ク、又關東ニハ北條高時漸奢侈ニ流レ、非曲多カリシヲ以テ、人々其ノ適歸スル所ヲ失ヒタリ。是ニ於テ朝廷ニ事ヘズ、又武家ニ緣故ナキ者ハ、勢人世ヲ厭ヒテ、隱逸ノ氣風ヲ生ズルニ至レリ。鎌倉時代ノ逸士ハ、鴨、長明、西行法師、吉田兼好ヲ以テ、最後世ニ名アルモノトス。鴨、長明ハ方丈記ヲ以テ著ル。十訓抄ニ云ハク、近頃賀茂社、氏人ニテ菊太夫長明ト云フ者アリタリ。管絃ノ道人ニ知ラレタリケリ。社司ヲ望ミケルガ叶ハザリケレバ、世ヲ恨ミテ出家シテ後、同シク先ダチテ世ニ背ケル人ノ許ヘ言ヒ遣リケル、何處より、人は入りけん。眞萬原、秋風吹きし、道よりぞこし。木平、山ノ出、深キ怨ノ心ノ暗ハ、シバシバ迷ナリケレド、此ノ思ヲ知ルベニテ、誠ノ道ニ入りニケルコソ、生死涅槃ト同ク、煩惱菩提ヒトツナリケル理違ハザリケレ。此ノ人大原ニ住ミタリ。方丈記トテ假

名ニ書キ置ケルモノヲ見レバ、始ノ辭ニ、行く水の流は絶えずして、去かもも
どの水に非ず、トアルコソ、世關人而爲世、人暮々行暮、川關水而爲川、水滔々日
渡ト云フ文集ノ文ヲ書キケルヨト覺エテ哀ナレシカモ、彼ノ庵ニテ、折琴、繼
琵琶ナドモ并ベリ、念佛ノ隙々ニ絲竹ノスサヒテ思ヒステザリケルコソ、ス
キノホドイト優シクシ云云ト。

長明定マレル居ナク、草庵ヲ結フベキ材料及家具ヲ車ニ載セテ、心ノ向フ所ニ
移ル。草庵ノ廣サ方丈、高サ七尺、因リテ其ノ嘗テ外ニ在ルトキ作レル書ヲ方丈
肥ト稱ス。後鳥羽院命ヲ下シテ和歌所ノ寄人ト爲サントシ給フ。長明辭シテ受
ケズ。和歌ヲ獻マテ曰ハク、沈みにき、今さら和歌の浦波に寄らばや寄せん。海士
の釣舟ト。

方丈記ハ長明一生ノ經歷ヲ述ベシモノニシテ、平清盛都ヲ福原ニ遷シシ時、新
都ノ狀況ヲ述ベタルハ、前ニ抄出シタルガ如シ。又安元三年京都大火ノ事、治
承四年ノ旋風ノ事ナド記シタリ。四季物語モ亦長明ノ作ニシテ、四季月々ノ
景色及人情ノ移リ行ク様ヲ優美ニ書キ爲シタルモノナリ。文學全集 第四編 書 此ノ書文

方丈記

四季物語

四行

吉田兼好

和歌ノ四天

徒然草

辭ヲ巧ニシテ風物ヲ形容シタルコト、古今殆絶無ナリ。然レドモ稍彫刻ノ跡ヲ
存シ、方丈記ノ意味深長ナルニ如カズ。其ノ外發心集、無名抄等ノ著述アリ。
左兵衛尉佐藤義清亦和歌ヲ善クス。時勢ニ感ズル所アリ、妻子ヲ捨テ、出家シ、
西行ト號ス。四方ニ周遊シテ和歌ヲ詠マ、鴨、長明ト并ベ稱セラル。其ノ家集ヲ山
家集ト云フ。又撰集抄ニ其ノ歌ヲ載セタリ。一讀スルトキハ當時西行ノ外隱道
者尙諸方ニ多カリシヲ知ルベシ。

吉田兼好ハ徒然草ヲ以テ名アリ。吉田ノ社司ト部兼顯ノ四子ナリ。初メ後宇多
院ノ北面ノ士ト爲リ、左兵衛尉兼好ト稱ス。伏見、後伏見、後二條、花園天皇ヲ經テ
後醍醐天皇ノ御宇マテ存生シタリ。後宇多院ノ崩御ニ因リテ發心シ、爾來花ニ
詠マ雪ニ吟マ、咽阿、淨辨、慶運ト共ニ和歌ノ四天王ト稱セラル。家集ニハ兼好家
集アリ。兼好東漂西泊シテ十五年ヲ歴タリ。中ゴロ伊賀、權守橋、成忠ノ許ニ在リ
又遊歴シテ伊賀ニ歸リ、草庵ヲ田井ノ庄ニ結ビ、往生ノ素懷ヲ遂ゲヌ。庵中殘ル
所ノ物ハ唯古筆ノ法華經、自筆ノ老子道德經、源氏物語須磨明石ノ卷、及平日ノ
衣食具ノミナリキ。其ノ著徒然草ハカリソメノ隨筆ナレドモ、人ヲ評シ、世ヲ諷

シ今ヨリ之ヲ見レバ、實ニ一個ノ厭世哲學ニシテ、佛家淨土念佛ノ主義ニ加フ
ルニ老莊ノ道ヲ以テセシモノナリ。書中忽ニシテ山野ノ風景ヲ述ベ、忽ニシ
テ好色ノ理ヲ説キ、又轉テ故人ノ行ヲ評シ、例ヘバ前ニ載セタル最明寺ノ儉
約ノ一段ノ如シ、又轉テ哲理ヲ論ズ。其ノ變化窮リ無ク、得テ謂フ可カラザル
妙趣アリ。一説ニ曰ハク、兼好常ニ北條氏ノ專横ヲ憤ル。其ノ伊賀權守ノ許ニ
至レルハ、即朝廷ノ密旨ヲ傳ヘンガ爲ナリ。又其ノ師直ノ爲ニ詔書ヲ草セシモ、
足利家ヲ亂サンノ謀計ナリ。南北朝ト爲リテ後ハ、常ニ志ヲ南朝ニ通マタリキ
ト。

○五 節 新宗ノ開祖(親鸞、一遍、日蓮)

然ルニ當時又一部ノ人物ハ、唯隱遁
シテ一身ノ安心ヲ得ルニ満足セズ、亂離ノ世ニ居テ其ノ身心ヲ措ク處無キ者
世間甚多カルベキヲ思ヒ、新ニ教門ヲ開キテ、普ク衆庶ニ安心ノ地位ヲ與ヘン
コトヲ務メタリ。宗教ハ人心睽離ノ世ニ於テ其ノ必要ヲ生シ、隨ヒテ戰國ノ
時代ニ最著スルモノナルコト、支那及西洋ノ歴史ニ於テ觀察ス可キ事實ナ
リ。而シテ本邦古來外國ノ教派ヲ傳ヘシノミニシテ、自國特發ノ教法ナカリシ

新宗ノ起
ル所以

親鸞上人

一遍上人

新宗ノ所説

ニ、北條氏ノ末ニ至リテ、新宗ヲ開クモノ頻々輩出シタリ。是固ニ偶然ニアラザ
ルナリ。親鸞ノ淨土眞宗ニ於ケル、一遍ノ念佛賦算ニ於ケル、日蓮ノ七字妙號
ニ於ケル、法然ノ淨土念佛ニ於ケル、皆此ノ時代ノ創立ナリ。
親鸞上人ハ元藤原氏ニシテ、初ノ名ヲ範實ト云ヒキ。高倉天皇ノ時僧源空淨土
專修念佛宗ヲ唱フ。親鸞ハ其ノ弟子ナリ。師説ヲ奉テ別ニ一派ヲ起ス。之ヲ淨
土眞宗ト云フ。苦妻肉食ヲ禁ゼザルヲ以テ、最愚俗ニ入り易シ。世人翕然トシテ
之ニ趨ク。其傳記ハ數種アリ。以テ當時ノ情勢ヲ察スルニ足レリ。
一遍上人ハ伊豫ノ人河野通廣ノ子ナリ。世ニ遊行上人ト稱ス。蓋天下ニ周遊シ
テ念佛賦算ノ法ヲ説キシヲ以テナリ。相摸藤澤ノ遊行寺ハ即一遍ノ道場ナリ。
一遍ノ事跡ヲ録スルモノ遊行上人傳、藤澤道場記等アリ。蓋源空、親鸞、一遍ノ
説ク所異同無キニ非ザレドモ、要スルニ極樂淨土ニ達スルハ苦學ヲ要セズ、戒
律ニ依ラズ、坐禪ヲ用非ズ、且暮佛名ヲ念誦シ、唯佛アルヲ思ヒテ、敢テ他念ヲ起
サザル一路アリト云フニ歸着ス。一方ヨリ之ヲ觀察スルトキハ、是舊來ノ宗教
ニ對スル反動ナリ。

此ノ反動ハ日蓮上人ニ至リテ最現然タリ日蓮ハ安房ノ屠者ノ子ナリ幼ニシテ明敏初メ真言ヲ學ヒ諸寺ヲ經歷シテ博ク諸宗ヲ兼テ又神道ヲ學ブ鎌倉ニ徙ルニ及ビテ始メテ一宗ヲ起ス之ヲ法華宗ト云フ南無妙法蓮華經ノ七字ヲ誦スル利益ヲ説キ他ノ諸宗ヲ誹リ就中當時鎌倉ニ流行シタリシ禪宗ヲ以テ外國ニ内應シ日本ヲ滅ボサント謀ル者ナリト公言セリ北條時宗捕ヘテ佐渡ニ流ス後免サレテ歸リ處々ニ布教シ弘安中武藏ノ龜上ニ死ス其ノ事跡ハ日蓮傳記日蓮書等ニ詳トス

第六十一章 兩統及五攝家

○節 持明院統及大覺寺統

承久ノ亂ハ北條氏ヲシテ常ニ京都朝廷

ニ對シテ警戒スル所アラシメ其ノ權カヲ殺クニ意ヲ用ウルニ至ラシメタリ初メ後堀川天皇位ヲ皇太子ニ傳ヘ給フ之ヲ四條天皇トス天皇幼ニシテ崩サ給ヒ嗣子坐サズ修明門院順德及攝政藤原道家順德天皇ノ皇子忠成王ヲ立テントス時ニ北條泰時鎌倉ノ執權タリ順德天皇ハ承久ノ亂ニ關係シ給ヒシヲ以テ此ノ職ヲ却ク土御門上皇ノ皇子ヲ立テ奉ル之ヲ後嵯峨天皇トス是ヨリ朝廷ノ事皆鎌倉ノ干涉ヲ被ル天皇在位四年ニシテ院中ニ退キ二皇子ヲシテ位ヲ相承クシメ給フ後深草天皇及龜山天皇是ナリ後嵯峨上皇政ヲ院中ニ聽キ給フコト二十六年殊ニ龜山天皇ヲ鍾愛シ給ヒ遺詔シテ世大統ヲ其ノ子孫ニ傳ヘシメ後深草天皇ニハ長講堂領ト稱スル院領ノ莊園百八十所ヲ授クテ子孫ノ封邑ニ充テ永ク皇位ニ臨マザランコトヲ約セシメ給ヘリ後嵯峨法皇ノ崩後龜山天皇萬機ヲ專決シ給ヒ後深草上皇預リ給フコトヲ得ズ因リテ

四條天皇

後嵯峨天皇

後深草天皇

龜山天皇

後嵯峨天皇ノ遺詔

後宇多天皇

不平ヲ懷キ給ヘリ。龜山天皇ノ長子後宇多天皇位ニ即キ給フニ及ビ、後深草上皇益、不平ナリ。竊ニ之ヲ時ノ執權北條時宗ニ謀リ給フ。時宗議シテ曰ハク、後

伏見天皇

深草上皇身正嫡ニマシマシ、且失徳オハシマシマサズ。宜シク其ノ後ヲモ皇位ニ即ク奉ルベシト。乃皇子深仁親王ヲ立テ、後宇多天皇ノ儲貳トス。伏見天皇

賊禁中ニ入ル

是ナリ。伏見天皇立チ給フニ及ビ、龜山上皇亦不平ニオハス。正應三年百五十九年三月、賊禁中ニ入りテ大逆ヲ行ハント謀リ、事成ラズシテ自殺ス。權大納言藤原、

伏見天皇ノ密詔

公衡等事ヲ龜山上皇ニ歸シ、後深草上皇ニ奏シテ六波羅ニ遷シ奉ラントトテ請フ。龜山上皇誓書ヲ裁シテ執權北條時宗ニ下シ辯疏シ給ヒシヲ以テ、事漸釋

後伏見天皇

クタリ。初メ天皇密ニ貞時ニ諭シテ、龜山上皇ハ後鳥羽院ノ遺志ヲ繼ギ常ニ承久ノ怨ヲ報イソノ御意アリト告グシメ給フ。貞時之ヲ信テ、龜山上皇ノ統ヲ立

貞時兩統立立ノ圖ヲ立

ツルヲ欲セズ。是ニ於イテ伏見天皇ノ皇子位ヲ承ク給ヘリ。之ヲ後伏見天皇トス。カク後深草上皇ノ統ハ二代相續キ給ヒシヲ以テ、後宇多上皇亦不平ニ

貞時兩統立立ノ圖ヲ立

坐シ、左中辨藤原、定房ヲ鎌倉ニ遣シテ、後嵯峨法皇ノ遺詔ニ違フコトヲ責メシメ給フ。是ニ於テ貞時遂ニ兩統立立ノ議ヲ立テ、陽ニ遺詔ヲ重メズルヲ示シ、實

後二條天皇

ハ皇室ノ權ヲ分カチ、以テ關東ノ權ヲ固クセシメコトヲ謀レリ。乃一世ヲ十年トシ、先後宇多上皇ノ長子後二條天皇ヲ立テ奉ル。後七年ニシテ伏見上皇ノ長子

花園天皇

花園天皇立チ給ヒ、十二年ニシテ後宇多上皇ノ第二子後醍醐天皇立チ給ヘリ。龜山上皇ノ統ヲ大覺寺ト稱シ、後深草天皇ノ統ヲ持明院ト稱ス。

後醍醐天皇

持明院ノ統位ニ即キ給フトキハ、長講堂領百八十箇所ヲモ併領シテ甚豊富ニ坐シ、カド、大覺寺ノ統ノ天皇ハ一箇所ノ莊園ヲモ有シ給ハザリキ。是實ニ爭

爭亂ノ因

亂ノ因トナレリ。

○節五攝家

源、賴朝藤原、兼實ヲ内覽トシテ攝政基通ノ職ヲ分チ、兩家

近衛、九條

ヲシテ更、攝關トナラシメ、基通ノ後ヲ近衛ト云ヒ、兼實ノ後ヲ九條ト云フコト

二條、一條

前ニ述ベタルカ如シ。兼實ノ孫道家三子アリ。長子教實九條家ヲ繼ギ、二子良

鷹司

實二條ト稱シ、三子實經一條ト稱ス。近衛家モ亦後ニ至リテ、二家ニ分カル。基通ノ子家實二子アリ。長子兼經近衛ヲ繼ギ、二子兼平鷹司ト稱ス。是ヨリ近衛、九條、二條、一條、鷹司ノ五家相次キテ攝關トナル。之ヲ五攝家ト云フ。是即北條氏二統立立ノ議定マルニ乘ツテ別ニ此ノ策ヲ立テ、以テ攝家ノ權ヲ分チシナリ。

第六十二章 北條氏亡フ(元弘ノ亂)

北條高時執權トナル

北條氏人心ヲ失フ

後醍醐天皇北條氏ヲ滅サント企テ給フ

○一 高時ノ暴逆 花園天皇ノ四年ニ貞時卒シ、高時執權トナル。高時長クテ暴戻ナリ。宴飲ニ耽リ、心ヲ政事ニ用カズ。内管領長崎高資、高時ノ暗昏ニ乘リテ私利ヲ恣ニセシテ以テ、海内怨憤セリ。初メ北條氏大柄ヲ握リ、天下敢テ之ニ服セザル者無カリシハ、唯其ノ公平無私ナリシニ因ル。而シテ此ノ政ハ高時ニ至リテ終ニ止ミヌ。宜ナル哉。人心ノ頓ニ北條氏ヲ離レシメト。元亨二年千九百八十二年、奥州ノ安藤五郎及又太郎邑ヲ争ヒテ、訟へ各賄賂ヲ行フ。長崎高資兩ナガラ之ヲ收メ、其ノ訟ヲ決セザリシヲ以テ、遂ニ謀反ス。承久ヨリ以來北條氏ノ命ニ背ク者實ニ安藤ヲ始トス。尋イテ攝津ノ渡邊紀伊ノ安田、大和ノ越智亦反ス。是ヨリ諸國ノ領主鎌倉ノ命ヲ奉ゼズ、或ハ私戰ヲ爲シ、或ハ北條氏ノ兵ニ抗ヒリ。後醍醐天皇天資英邁、深ク皇威ノ衰ヘタルヲ慨シ、此ノ機ニ乘リテ鎌倉ヲ滅ボサント企テ給ヒ、後三條天皇ノ朝ニ遣カレシ記録所ヲ再興シ、躬政ヲ講キテ人心ヲ收メ給ヒキ。又日野中納言藤原資朝、同右小辨藤原俊基ニ命ヲ密

藤原邦光父ノ讒ヲ報ズ

高時國ヲ奪ヒメズ

大塔宮

勅ヲ奉マテ潛ニ諸國ヲ巡行シ、地理人情ヲ探リ、地方ノ武士ヲ説カシメ給ヘリ。既ニシテ謀漏ル。六波羅ノ兵二人ヲ捕ヘテ之ヲ鎌倉ニ送り、又在京武士ノ其ノ謀ニ與リシ者ヲ攻殺シタリ。高時大ニ怒リテ廢立ヲ議ス。天皇誓書ヲ賜ヒテ事漸解クタリ。高時資朝ヲ佐渡ニ流シ、佐渡ノ守護本間入道ニ命マテ之ヲ殺サシム。資朝ノ子邦光、時ニ年十三、父ヲ見ント欲シ、竊ニ京ヲ出テ本間ノ邸ニ至ル。本間其ノ對面ヲ許サズ。邦光乃本間ヲ殺サント欲シ、タレドモ果サズ。資朝ヲ斬リシ本間三郎ヲ殺シテ遁ル。俊基モ亦後ニ殺サレタリ。太平記ヲ讀ミテ此ノ所ニ至レバ、實ニ憤慨ニ堪ヘザルモノアリ。

○二 天皇笠置ニ幸ス 嘉暦元年千九百八十六年、高時劇變シテ崇徳ト號ス。北條守時繼キテ執權ト爲リ、高時ノ旨ヲ受クテ政ヲ行フ。同年皇太子邦其親

王薨ズ。天皇諸皇子中ヨリ皇太子ヲ撰定セント思ハシ、後嵯峨法皇ノ遺詔ヲ幕府ニ諭シ給ヘリ。然ルニ幕府ハ固ク兩統迭立ノ議ヲ執リ、後伏見院ノ皇子量仁親王ヲ皇太子ニ立テ奉レリ。同二年天皇三子尊雲法親王ヲ以テ天台座主トシ給フ。法親王武勇人ニ勝レ、鎌倉ヲ伐タンノ志アリ。大塔宮ト稱ス。元徳二年千九百九十九年

十年天皇東大寺、興福寺、延曆寺等ニ幸シ、僧徒等ヲ誘ヒテ武家ヲ伐タント謀リ給フ。高時承久ノ故例ヲ引キテ、天皇及大塔宮ヲ遠國ニ遷シ奉ラントシ、元弘元年元弘元年九月八月、二階堂貞藤等ヲシテ兵ヲ率井テ京ニ入ラシム。天皇大塔宮ノ謀ヲ用井、陽ニ延曆寺ニ幸スト唱ヘ、花山院大納言藤原師賢ニ天皇ノ御衣ヲ着セテ、敵山ニ赴カシメ、躬笠置山ニ幸シ給フ。萬里、小路中納言藤原、藤房及其ノ弟季房等從ヒ奉ル。六波羅兵ヲ遣シ、敵山ヲ攻ム。此ノ間ニ天皇ハ笠置ニ入り給ヒヌ。後師賢モ亦笠置ニ至ル。天皇河内國ノ武士楠木正成ヲ召シテ討賊ノ事ヲ任シ給フ。正成河内ニ歸リテ義兵ヲ舉ゲ、赤坂山ニ據ル。九月、關東ノ將大佛貞直等ノ大軍笠置ヲ陷ル。天皇潛ニ逃レ出テ給ヒシカド、路ニシテ捕ヘラレ、六波羅ニ入り給ヘリ。賊又兵ヲ發シテ赤坂城ヲ攻ム。正成暫拒戰シ、密ニ城ヲ出テ金剛山ニ入ル。時ニ尊雲親王ハ十津川ノ邊ニ隠レ、還俗シテ名ヲ護良ト改メ給ヘリ。一宮尊良以下ノ皇子及近臣藤原、季房等皆捕ヘラレヌ。

允殿院

○三節 天皇ヲ隱岐ニ遷シ奉ル 元弘元年九月高時西園寺大納言公宗ト謀リ、皇太子量仁親王ヲ奉マテ帝ト稱ス。之ヲ光嚴院ト號ス。後二條院ノ孫、皇

笠置ニ幸ス

楠木正成ヲ召シ給フ

笠置陷ル

天皇隱岐ニ遷シ給フ

親王公卿配流セラル

楠木

太子邦良ノ子康仁親王ヲ太子トス。大佛貞直神器ヲ新主ニ傳ヘ給ハソコトヲ請フ。天皇許シ給ハズ。復之ヲ請フ。天皇乃授クルニ新器ヲ以テシ給ヘリ。時ニ六波羅北ノ方ニ北條越後守仲時守護シ、南ノ方ニ北條左近將監時益守護ス。二年三月高時ノ使長井高冬上洛シ、兩六波羅ト議シテ天皇ヲ隱岐國ニ遷シ奉ラントス。七日千葉ノ介貞胤、佐々木佐渡、判官道譽等五百餘騎ヲ率キテ御輿ヲ警固シ、之ヲ隱岐ニ遷シ奉ル。一條頭太夫行房、六條少將忠顯及三位、局供奉ス。下部ニ金若トテオアル使丁ヲ伴フ。又成田小三郎關東ノ住人ニテ頃日流寓セリ。從ヒ奉ル。同十三日出雲國見尾港ニ着御シ、四月廿一日渡海シ給フ。隱岐、前司佐々木清高之ヲ國分寺ニ入レ奉リ、伯隱雲州ノ諸士堅ク警衛ス。一宮尊良親王ハ土佐ニ流サレ、妙法院尊澄法親王ハ讃岐ニ流サル。今年四月廿八日、京都年號ヲ正慶ト改ム。時ニ天皇ノ近臣或ハ殺サレ或ハ流サレ師賢モ亦下總ノ千葉ニ配流セラレヌ。

○四節 楠木正成、赤松則村、兒島高德ノ勤王 初メ楠木正成笠置ヨリ辭シ歸リテ赤坂城ニ據リ、獨天下ノ大軍ヲ受ケ、奇計ヲ回ラシテ防戰ス。兵士僅

櫻山茲俊
兒島高德
正成赤坂ヲ
復シ千早城
ニ據ル
護良親王吉
野ニ據リ給
赤松則村
吉野陷ル

五百人ニ過ギズ。固守廿日ニ及ベドモ諸國勤王ノ兵起ラズ糧食將ニ盡キ
トス。正成以爲ヘラシク戰死スルハ至リテ易シ。然レドモ我死セバ天下誰カ又勤
王ノ先驅ヲ爲サント。乃計ヲ設ケテ城ヲ逃レ出ヅ。是ノ時ニ當リテ勤王ノ軍
ハ唯備後ノ櫻山茲俊アルノミ。而シテ正成戰死スト聞キ、望ヲ失ヒテ自殺セリ。
備前ノ兒島高德モ亦義旗ヲ舉ゲント欲ス。會、正成死スト聞キテ躊躇ス。高德
天皇ノ遷幸シ給フヲ聞キ、其ノ一族郎徒ト、風聲ヲ道ニ傳ハント謀リテ果サズ。
乃夜竊ニ行在所ニ入り、天莫空勾踐ノ句ヲ櫻樹ニ書シテ去ル。勤王ノ軍一時
靜マリ、高時天下ノ太平ヲ稱シ、酒宴田樂、大合セ等ノ遊興ヲ事トス。時ニ楠木
正成ハ金剛山ニ隱レ、護良親王ハ吉野十津川邊ニ隱ル。正成親王ト謀ヲ通シ、天
皇遷幸ノ翌月、兵五百ヲ以テ、赤坂城ヲ恢復シ、敵ノ降人ヲ併セテ、和泉河内ヲ徇
ヘ、威勢日ニ加ハル。既ニシテ金剛山ニ築ク所ノ千早城成ル。正成之ニ移リ、人ヲ
シテ赤坂ヲ守ラシム。護良親王モ亦吉野ノ城ニ據ル。播磨ノ人赤松則村之ニ
應シ、山陰山陽ノ兩道ヲ塞ゲリ。元弘三年二月、賊大舉シテ來リ攻ム。閏月吉野
陷ル。親王村上義光父子ノ忠死ニ因リテ虎口ヲ逃レ、高野ニ入り給フ。尋イテ

新田義貞
兵ヲ起ス
土居、得能
賊兵ヲ起ス

赤坂復陷リ、賊兵悉千早ニ集マル。其ノ數八十萬ト號ス。正成益奇計ヲ出シテ之
ヲ拒ク、賊死傷頗多シ。上野ノ人新田義貞亦賊中ニ在リ。密ニ護良親王ノ令旨ヲ
得上野ニ歸リテ義兵ヲ舉ク。赤松則村モ亦攝津ノ摩耶ノ城ニ在リテ官軍ニ應
ズ。土居通治、得能通言等義兵ヲ伊豫ニ起シ、長門ノ探題北條時直ト戰ヒテ大ニ
之ヲ敗ル。是ニ於テ中國悉官軍ト爲レリ。

○節五 天皇隱岐ヲ出テントシ給フ 後醍醐天皇配所ニ坐シテ空シク

侍臣等天皇
ヲ出シ奉リ
テノコトヲ謀

年ヲ越エ給ヒ、昔時後鳥羽院ノ御事ヲ忍バセ給ヒテ悲涙頓ナリ。又都ノ沙汰及
皇子諸卿ノ行クヘナド知ロシメスニ由無ク、日夜慮慮ヲ惱マセ給ヘリ。元弘三
年閏二月、成田小三郎國分寺ノ僧ヲ語ラヒ、誓固ノ士伯耆、國名和、庄源小太郎長
高ガ弟恐四郎泰長ヲ招キテ京師ノ事ヲ問フ。泰長告グルニ楠木正成ガ金剛山
ノ守城、並ニ諸國官軍ノ蜂起等ヲ以テシ、且曰ハク、願ハクハ此ノ機ニ乘ワテ密
ニ天皇ヲ出シ奉リ、以テ義兵ヲ舉ゲント。小三郎大ニ悦ビテ曰ハク、汝宜シク之
ヲ謀レ。我今夜奏聞スベシト。乃之ヲ奏ス。天皇感激アリ、詔ヲ下シ給フ。泰長曰ハ
ク、伯耆、國船、上山ハ險固ノ地ナリ、兄長高武勇ニシテ且度量アリ、詔勅ヲ奉マテ

島密詔ヲ下シ給フ
國谷高貞詔ニ應ヒズ

計謀セバ事何ソ成ラザラン。又出雲國隱岐前司及同國ノ鹽冶三郎高貞ヲモ招致ス。ベシ幸ニ警固ノ士中ニ高貞ノ族富士名三郎義綱ト云フ者アリ。我先其ノ意中ヲ探ラント。密ニ義綱ヲ招キテ。雜話イ次ニ諸國官軍峰起ノ事ニ及ブ。義綱亦忠ヲ天皇ニ致サント誓フ。義綱ト共ニ密詔ヲ蒙ル。同月廿日。義綱出雲ニ渡リテ高貞ガ館ニ至リ。勅旨ヲ述ブ。高貞敢テ應ゼズ。刺義長ヲ追フ。義長乃伯耆ニ赴カント欲ス。時ニ六波羅ノ命ニヨリ出雲伯耆等ノ警備甚嚴ナリ。出雲大社。神主國造泰長ヲ怪ミテ之ヲ虜ニス。天皇又宮女ヲ以テ義綱ニ賜フ。義綱心解ク。忠ヲ勵マンント欲シ。出雲ニ渡リ高貞ガ館ニ至リテ密旨ヲ傳フ。高貞心未決セズ。先義綱ヲ捕ヘテ思慮ス。

○六節名和長年ノ勤王

天皇泰長。義綱ガ報ヲ待チ給ヒシカドモ。歸リ來ラズ。同月廿三日。一條行房奏シテ曰ハク。宜シク謀ノ未露レザルニ先チ配所ヲ通レ給フベシト。乃三位局分。婉ト僞リテ。酒ヲ警固ノ士ニ賜ヒ。其ノ沈醉セルヲ伺ヒ。産時近ゾキタルヲ以テ。民家ニ出ツト稱シ。與テ同シクシテ出テ給フ。行房忠願陪從シ。小三郎ト金若ト之ヲ昇キ。義綱ガ旅宿ノ民家ニ至ル。廿四日黎明。天

天皇配所ヲ通レ出テ給フ

山雲ノ大社
國造等御松ヲ追フ

皇親シク泥土ヲ踏ミ給フ。忠願。小三郎。金若供奉ス。行房三位局ニ副ヒテ。民家ニ留ル。天皇歩ミ給フコト能ハス。忠願之ヲ扶ク奉ル。時ニ賤夫駄馬ニ乘リテ來リ。天皇ヲ見テ。即馬ニ乗セ奉リ。忠願ヲ負ヒテ直ニ千波港ニ至リ。渡船ヲ求メテ之ヲ奉ズ。廿五日。出雲國島根郡野波ノ浦ニ至リテ。供御ヲ求メ。得ズシテ。酒ヲ献ズ。廿七日。御船杵築ノ浦ニ着ク。金若陸ニ上リテ。供御ヲ求メントス。大社國造ガ家。僕佐ミテ之ヲ虜ニス。天皇亦大社ノ方ニ赴カントシ給フ。忠願等乃馬ニ乗セ奉ル。馬進マス。忠願之ヲ異トシ。本船ニ遷シ奉ル。既ニシテ國造ガ家僕及其ノ他ノ兇徒等馳セ來ル。舟人驚キテ急ニ船ヲ發ス。洋中ニ至レル時。賊船飛フガ如クニ。船ヲ來リ。御船ニ入リテ搜索ス。舟人豫天皇ト忠願トヲ船底ニ入レ奉リ。藻草ヲ以テ之ヲ覆ヒ。水手等ヲシテ其ノ上ニ立タシム。賊遂ニ索メ得ズシテ去ル。廿八日。御船伯耆ノ片見ニ着ス。小三郎先陸ニ上リ。水ヲ求メテ之ヲ奉リ。名和長高ノ館ニ就キテ。詔勅ヲ傳フ。長高謹ミテ旨ヲ承リ。馳セ行キテ奉迎ス。長高ノ弟長重。天皇ヲ負ヒ奉リ。岩屋谷ニ至リ。興ヲ求メテ之ニ奉リ。船。上山ニ上リ。俄ニ城廓ヲ搦フ。長高ノ族。懸船。上山ニ集マリテ。賊ヲ拒ギ。進ミテ近隣ヲ討伐シ。勢大ニ振フ。

名和長高ノ弟迎

長年ニ名ヲ
賜フ

長年ニ家紋
ヲ定メ給フ

足利高氏ノ
賜

天皇長高ヲ左衛門尉ニ任マ、且宣ハク、長クシテ高キハ危シト、乃名ヲ長年ト改
メ給フ。嫡子太郎義高賊中ニ在リテ千早ヲ攻メシガ、父ノ飛信ヲ得テ船ヲ上山ニ
來リ、正成ノ軍術及諸國官軍蜂起ノ狀ヲ奏ス。天皇嘗テ長年ノ忠勤ヲ喜ビ、御
製ヲ賜ヒヌ。忘れゆや、寄るべき浪の、おら磯を、御船の上に、どめし心はト、又勅シ
テ長年ノ家紋ヲ帆掛ケ船ト定メ給ヘリ。近國ノ諸士來リ屬スル者甚多シ、時ニ
行房亦三位、局ヲ携ヘテ行在ニ到ル。

○七節 高時ノ滅亡 天皇六條忠顯ヲ將トシテ六波羅ヲ攻メシメ給フ。赤松

則村之ニ會ス。高時官軍ノ勢盛ナルヲ聞キ、足利高氏、名越高家ヲシテ大舉シテ
西上セシム。高氏ハ義家ノ末葉、源家ノ嫡流ナルヲ以テ、素ヨリ北條氏ニ從フ
ヲ快トセズ、是ニ至リテ密ニ使ヲ船ヲ上山ノ行在ニ遣シテ歸順セシムトヲ奏ス。
足利氏ハ當時武士中ノ最名望アル者ナリシカバ、天皇大ニ喜ビテ之ヲ許シ給
ヘリ。高家、高氏共ニ行在ヲ犯サントス。高家攝津路ヨリ進ミ、則村ノ兵ト戰ヒ
テ殺サル。高氏丹波路ニ向ヒ、俄ニ勤王ノ令ヲ發ス、是ニ於テ近國ノ將士爭ヒ附
ク者甚多シ、乃忠顯則村等ト期ヲ刻シテ京師ニ入ル。此ノ時北條氏ノ兵悉ク千早

高氏則村等
六波羅ヲ陷ル

新田義貞鎌
倉ニ入リ北
條氏ヲ滅ス

ニ集マル。高氏則村等其ノ慮ニ乗ヲテ之ヲ擊チ、遂ニ六波羅ヲ陷ル。時ニ元弘三
年五月七日ナリ。

新田義貞其ノ一族ノ上野越後ニ蔓延セルモノヲ率テ、連戰シテ賊ヲ破リ、稻村
崎ヲ回リテ、海面ヨリ鎌倉ニ入り、火ヲ民家ニ放チテ急ニ攻ム。北條氏ノ軍支フ
ルコト能ハズ、高時自殺シ、將士八百餘人殉死シ、北條氏亡フ。時ニ元弘三年五月
廿二日ナリ。

第三 南北朝時代

第六十三章 建武中興

天皇軍法ヲ
設シ給フ

○節一軍令條々 風箏ノ京師ニ向ハントスルニ先チ、天皇派忠順ニ軍法條々ヲ下シ、以テ大旨ヲ明ニシ給ヘリ。其ノ文左ノ如シ。

一勳功賞事
右武士以下、細索貴賤、其ノ人ヲ論ゼズ、合戦忠ヲ致ス輩ニ於キテハ、本所帶本所等安堵ノ外、各新ニ不次ノ恩賞アルベク、其ノ功子孫ニ及ビ永代相傳セシム可キ條勿論ナリ。又戰場墜命ノ者ハ、其ノ子孫妻妾并ニ親類郎從等中、何仁タリモ、其ノ器用ヲ撰ヒ、所領ヲ充テ賜ヒ、其ノ跡ヲ繼ガシム可シ矣。

一參仕并降人事
右卿相雲客并ニ武士已下、諸社諸寺執行別當神官社司等、凡一官一職ヲ帶フル輩ハ、各早速馳セ參ゼバ、本領知ノ外別ノ恩賞ニ行ハルベシ。又其ノ身參仕叶フ可カラズト雖、或ハ兵糧ヲ出ダシ軍要ヲ支ヘ、或ハ使者ヲ遣、忠言ヲ獻

事ニ觸レ官兵ノ爲ニ其ノ益アル者ハ、是又子細同前ナリ。次ニ合戦ノ時ノ降人ハ、先罪科ヲ宥メ、身命ヲ全ウシ、其ノ後忠節ノ淺深ニ隨ヒテ、次第ノ恩賞アル可シ矣。

一可先仁政事

石東夷等按ズルニ關東ニ關連命既ニ窮マリ、滅亡將ニ至ラントス。之ニ依リテ漫ニ無辜平民ノ首ヲ取ル。其ノ數ヲ知ラズ、尊卑男女ノ財ヲ盜奪シ、逐日佛閣ヲ暴シ、人屋ノ灰燼、在々所々ノ追捕窮惡ノ甚シキ、獸心人面ナル者ナリ。彼ノ逆黨ヲ誅罰セズバ、萬民何ニカ手足ヲ措カンヤ。義兵向フ所、專此ノ害ヲ除クガ爲ナリ。然レバ官軍士卒上下同心、只叛者ヲ伐チ、衆人ヲ煩ハサズ、偏ニ仁慈ヲ先エシ、更ニ凡人ヲ侵奪スルコト無カレ、生擒ノ類、凡下ニ於テハ、速ニ放棄スベク、有名ノ輩ニ於テハ、之ヲ召シ置キ、奏聞ヲ經ベシ。是非ニ付左右無ク斷罪ス可カラズ。將又敵方城郭ノ外ハ、放火ヲ禁令ス可シ。但シ戰場ニ於テハ時義ニ隨フ可キカ、神社佛寺等堅ク之ヲ賊ムベシ。次ニ官軍入洛ノ時、關字ノ寄宿其ノ家主ヲ扶持シ、涓塵ト雖之ヲ費ス可カラズ。隨分ノ恩惠ヲ加フベシ。

條令ノ批評

有遺ヲ以テ無道ヲ伐ツ、ソレ然ラザランヤ。天神地祇ノ擁護、宗廟社稷ノ靈驗、掌ヲ指シテ知ル可シ。各、義勇ヲ存シ、互ニ警誡ス可シ矣。
右ハ光明寺殘篇ニ載スル所ナリ。此ノ外同書ニ官軍可存知條々ト題スルモノ、數項入洛輩可有存知條々ト題スルモノ、數項アリ。首メ、二箇條ハ國法上ヨリ特ニ注目ヲ要スベキモノナリ。天皇ノ詔勅ヲ以テ此ノ如キ條件ヲ發セラレシハ、是建武中興ノ事、其ノ名ハ一統ノ王政ヲ布クニ在リテ、其ノ實ハ戰國ノ關係ヲ脱セザル所以ナリ。真正ノ中興ナラシムルニハ、軍功ヲ賞スルニ地方ノ支配ヲ以テスベカラズ、參仕ニ報ズルニ官職ノ約ヲ以テスベカラズ。苟モ地方ヲ支配スルガ如キ公權上ノ關係ニ就キテハ、天下一般ニ公平ノ處置ヲ爲シ、恭順ナラザル者ハ、法ニ照シテ之ヲ罰スル一途アルノミ。此ノ二條ノ趣旨ハ、戰國時代ノ一將、其ノ味方ヲ集ムルト何ゾ異ナラン。

天皇京師ニ遷幸シ給フ
諸皇子ヲ遣シテ東北ヲ

○二節 中興ノ計畫 元弘三年五月廿三日天皇船、上山ヲ發シ、六月二日兵庫ヲ經テ京師ニ向ヒ給フ。楠木正成之ヲ兵庫ニ奉迎ス。天皇正成ニ命シテ先驅セシメ給ヒヌ。六月四日車駕京師ニ入ル。二條道平ノ建言ニ依リ、重祚ノ式ヲ用

顯赫セシメ給フ

公武ノ國臣ヲ給フ

高氏尊氏ト改ム
記録所及雜
記決斷所ヲ
置カサル
所及武者

ヲ給ハズ。是即後世光嚴院ヲ繼續ニ加ヘ奉ラザル所以ナリ。讓良親王ヲ征夷大將軍ニ任シ、又皇子成良親王ヲ關東ノ管領トシ、高氏ノ弟直義ヲ副トシテ鎌倉ニ居ラシメ、皇子義良親王ニハ參議兼陸奥守北畠顯家ヲ副ヘテ、與羽ヲ鎮撫セシメ給フ。顯家ノ父親房之ヲ輔ク。顯家甚忠貞ナリ。親房ハ政事文學ニ通シ、且麾下ニ結城宗廣ノ如キ忠勇ノ士アリシヲ以テ、東國ノ將士多ク歸伏シタリ。又公武ノ國臣ヲ以テ國守ニ任シ、以テ舊守護職ノ權力ヲ殺ギ給ヘリ。翌年建武ト改元ス。朝廷一統ノ政ヲ行フ計畫盛ナリ。二條道平ハ左大臣ト爲リテ至高ノ輔弼ナリ。右大臣ハ久我長通、内大臣ハ洞院公賢ナリ。又道平ヲ以テ藤原氏ノ長者トシ給フ。而シテ關白太政大臣ヲ置キ給ハザリシハ、萬機親裁ノ故ナリ。又八省ヲ置キ、諸卿ノ任ヲ重クセラル。足利高氏參議ニ任セラレ、天皇御諱ノ一字ヲ賜ハリテ名ヲ尊氏ト改ム。時ニ兵亂ニ乘リテ土地ヲ侵略スル者ヲ禁シ、知行ノ紛雜ヲ處分セシムル爲ニ記録所及雜記、決斷所ヲ置キ、公家武家ヨリ遴選シテ評定員及寄人ニ命ズ。又武士ヲ監督スル爲ニ、前ノ六波羅奉行ヲ停メテ、更ニ寮所及武者所ヲ置ク。新田氏ノ族武者所ノ頭人ト爲リ、分番ニ宿衛シタリ、

天皇親日中行事ヲ作り、又年中行事ヲ編述セシメ、宮中ノ行事儀式ヲ定メ給フ之ヲ建武日中行事及建武年中行事ト云フ。今尙世ニ存ス。又文武衣冠ノ制ヲ定メ、楮幣ヲ製シテ用度ヲ贖シ、鑄錢司ヲ設ケテ新錢乾坤通寶ヲ鑄ル。又將ニ大内ヲ造營セントス。因リテ其ノ費ヲ諸國ニ課シ、諸國莊園郷保ノ地頭以下ヨリ其ノ收入廿分ノ一ヲ御倉ニ進メシム。

○三 法度ノ不備 文献ニ依リテ熟、當時ノ形勢ヲ察スルニ、天皇及左右卿相ノ意ハ固ヨリ延喜、天曆以前ノ一統ノ政ヲ行フニ在リ。然レドモカク容易ニ朝敵ヲ斃スコトヲ得シハ、一ニ武家ノ力ニ依レリ。而シテ武家ノ心ハ恩賞ヲ以テスルニ非ズバ、永ク之ヲ繫クベカラザルヲ以テ、勢上古群縣ノ制ヲ起スコト能ハズ。是ヲ以テ時勢ノ赴ク所ト朝廷ノ守ル所ト相齟齬シ、遂ニ首尾貫徹セル一定ノ制度ヲ立ツルニ及バズシテ、混雜ノ中ニ再大亂ヲ生ズルニ至リシモノナリ。當時整然タル官職法度ヲ立ツルニ至ラザリシハ、其ノ記録ニ今日ノ存セザルヲ以テ之ヲ知ルベシ。此ノ後兵亂相踵クト雖、若畫然タル制度アリシコト猶大化元年改新ノ大詔ノゴトクナラバ、何ゾ湮滅シテ傳ハラザルコトアラ

一定ノ制度
ヲ立ツルニ
及バズリシ
所以

建武記

シヤ。然レドモ上ニ舉ケタル軍令數則ノ外、當時別ニ改新ノ詔勅アリシヲ聞カズ。其ノ恩賞ヲ重クシ、安堵ヲ沙汰スルガ如キハ、唯舊弊ヲ反覆スルニ過ギザルナリ。建武年間ノ制度禁令ヲ錄スルモノ僅ニ建武記アルノミ。或ハ之ヲ建武年間記ト云フ。然レドモ一家太田相傳ノ私書ニシテ、其ノ舛謬ノ如キモ、事緒粉亂シ、時代前後シ、之ヲ完全ノ書ト爲スヲ得ザルナリ。其ノ二三ノ制度ハ、之ヲ古代法釋義中ニ載セタリ。就キテ見ルベシ。

○四 京師ノ混雜 時ニ朝廷ノ混雜ハ得テ言フ可カラズ。天下ノ政事盡京師ニ集マリ、諸國ノ僧俗貴賤輻輳シ、文書卷狀ヲ出ダシテ安堵ヲ請求シ、衛門ノ訴訟日ヲ逐ヒテ繁ク、詐偽姦曲雜出シタリ。朝使東西ニ馳セテ廉問召喚シタレドモ、只ニ宿弊ヲ釐シ得ザリシノミナラズ、本所領、或ハ功賞ニ混テ、朝臣因リテ祿ヲ失ヒ、諸將公士驕傲ニシテ朝廷ヲ脅ス。朝廷因リテ勢力アル者ヲ懷クントシ、無功ノ大名ニモ本領安堵ト稱シテ食邑ヲ増給スレバ、彼ガ輩又其ノ近境ト稱シ、或ハ闕所ト稱シ、甚シキハ他家世領ノ田ヲ競望スルニ至リ、貴賤俄ニ地位ヲ易ヘ、奔競尅上ノ風ヲ煽興セリ。國史此ノ頃二條河原ニ落書セルモノアリ

建武記ニ之ヲ載セタリ。當時ノ時勢ヲ觀察スル好材料ト爲スニ足ル。曰ハク、
 此ノ比都ニハヤル物 夜討、強盜、謀略、旨 召人、早馬、虛騷、動
 生頭、遠俗、自由出家 俄、大名、迷者 安堵、恩賞、虛軍
 本領ハナル、訴訟人 文書入レタル細葛 追從、隠人、禪律僧
 下克上スル成出者 器用ノ堪否沙汰モナク モル、人ナキ決斷所
 キツク又冠、上ノキヌ 持チモナラハヌ笏持チテ 内裏マヨハリ珍シヤ
 賢者ガホナル傳奏ハ 我モ、トミユレドモ 巧ナリケル詐ハ
 愚ナルニヤオトルラン 爲中美物ニアキミチテ マナ板鳥帽子ユガメツ、
 氣色メキタル京侍 タソガレ時ニ成リヌンバ ウカレテアリク色好
 イクソバクソヤ數不知 内裏ヲガミト名付タル 人ノ妻納ノウカレメハ
 ヨソノミルメモ心地アシ 尾羽ヲレユガムエセ小鷹 手ゴトニ離モスエタレド
 鳥トルコトハ更ニナシ 鉛作ノオホ刀 太刀ヨリ大ニコシラヘテ
 前サガリニソ指シホラス 八サラ扇ノ五骨 ヒロゴシ、ヤセ馬、薄小袖
 日錢ノ質ノ古具足 關東武士ノカゴ出仕 下衆上臈ノキハモナク

大口ニキル美精好 鍔直垂 僧不捨 弓モ引キエヌ犬追物
 落馬矢數ニマサリタリ 雖ヲ師匠トナクレドモ 遍クハヤル小笠懸
 事新シキ風情ナリ 京鎌倉ヲコキマゼテ 一座ソロハヌエセ連歌
 在々所々ノ歌連歌 點者ニナラヌ人ソナキ 譜第非成ノ差別ナク
 自由狼藉世界也 犬田樂ハ關東ノ ホロナル物ト云ヒナガラ
 田樂ハナホハヤルナリ 茶香十炷ノ容合モ 鎌倉釣ニ有鹿ト
 都ハイト、倍増ス 町ゴトニ立ッ舞屋ハ 荒涼五間板三枚
 幕引キマハス役所柄 其ノ數シラズ漏チニタリ 諸人ノ敷地不定
 半作ノ家は多シ 去年火災ノ空地共 クソ福ニコソナリニケレ
 適ノコル家々ハ 點定セラレテ置キ去リヌ 非職ノ兵仗ハヤリツ、
 路次ノ禮儀辻々バナシ 花山桃林サビシクテ 牛馬華浴ニ遍滿ス
 四夷ヲシヅメシ鎌倉ノ 右大將家ノ掟ヨリ 只品有リシ武士モミナ
 ナメソダウニソ今ハナル 朝ニ牛馬ヲ飼ヒナガラ 夕ニ質アル功臣ハ
 左右ニオヨバヌ事ツカシ サセル忠功ナクレドモ 過多ノ昇進スルモアリ

定メテ損ゾアルラント 仰ギテ信ヲトルベカリ 天下一統メゾラシヤ
御代ニ生レテサマノノ 事ヲミキクソ不思議トモ 京童ノ口ズサミ
十分一ヲモラスナリ

中興ノ業ノ
破レントス
ル始メ

○節五 藤房ノ遁世 天皇御心漸驕リテ政ニ怠リ、夫人藤原、廉子ヲ寵シテ、其ノ請託ヲノミ聞キ給ヘリ。又京師公家ノ人々ハ久シク疲弊ニ陥リ、始メテ世ニ出テタルヲ以テ、自然驕慢ノ心ヲ生シ、武士ヲ輕ンズル勢アリキ。護良親王、足利尊氏ト隙アリ、尊氏深ク廉子ト結ビ、親王ハ正嫡ナレトモ、廉子ノ出ニ非ザルヲ以テ、之ヲシテ天皇ト親王トヲ離間セシメント計リタリ。而シテ天皇尊氏ヲ寵異シ給フコトニ益、甚シク、其ノ族多ク昇殿ヲ許サル、是ニ於テ公家ハ武士ノ勢ヲ妬ミ、武士ハ公家ノ驕慢ヲ憤リ、互ニ相反目スルニ至レリ。萬里、小路、藤房時勢ノ日ニ非ナルヲ見テ慨歎シ、屢、諫言ヲ奉レドモ容レラレズ。遂ニ官ヲ棄テ、世ヲ遁ル。人其ノ終ハル所ヲ知ラズ。是中興ノ業ノ破レントスル始メナリ。

○節六 地方ノ亂離

朝廷又決斷條例ヲ追加シ、諸國ヲシテ田地ノ部類目錄ヲ作ラシメ、勅裁タリトモ決斷所ノ牒狀ナキハ、國司其ノ地ヲ引キ渡サヤルコ

人民ノ爭訟
心ヲ培養ス

諸國叛者起
ル

北條時行鎌
倉ヲ攻ム

ト、セリ。決斷所ハ理否ヲ裁判シテ爭ヲ決スル所ナリ。天下大政ノ府ニ非ズ當時ノ政重キヲ裁判ノ制ニ置ク。故ニ却リテ人民ノ爭訟心ヲ培養シタリ。中興ノ後三年ノ間一日モ靜謐ナルコトアラズ。元弘三年北條氏ノ遺族、流浪失意ノ徒ヲ嘯集シテ亂ヲ起ス。其ノ冬陸奥ノ磐城亂レ、翌建武元年津輕亂レヌ。又九州ニハ探題ノ一族諸處ニ蜂起セリ。同年河内ノ飯盛山ニ叛徒アリ。年ヲ陰ニテ平ガズ。二年北條時直ノ黨長門、伊豫ニ起ル。少貳頼尙、得能通綱之ヲ平ク西園寺公宗、日野資名、北條高時ノ弟時興等、持明院上皇ヲ奉サテ亂ヲ起サント謀ル。高時ノ子時行關東ニ起リ、其ノ族名越時景ハ北國ニ起ル。事覺レテ公宗ハ誅セラレ、資名等ハ配流セララル。時行再信州ニ起リテ餘黨ヲ招聚シ、諏訪、三浦、葦名、鹽谷、本間等ヲ從ヘテ七月鎌倉ヲ攻ム。

○節七 護良親王ノ遭難

此ノ如ク反者相踵キテ起ルヲ以テ、朝廷政綱ヲ收ムルニ違ナシ。六條忠顯、男山ニ屯シ、護良親王大衆ヲ奈良ニ擁シ、楠木正成、名和長年、前後入京シ、諸國ノ兵尊氏ノ徵ニ應ズルモノ亦京師ニ集マル。尊氏益、厚遇セラレ、天皇ニ勸メテ護良親王ノ將軍職ヲ廢シ、改メテ成良親王ヲ將軍ト

公家武家ノ
争表面ニ見

足利氏ノ興
リテ新田氏
ノ亡ナル所

足利直義
親王ヲ試

爲ス。親王ハ即廉子ノ出ナリ。此ニ至リテ公家武家ノ争權表面ニ見レタリ。楠木名和ノ輩ヲ除キ、其ノ他ノ武士ノ京師ニ集マレルモノハ皆勤王ヲ思フニ非ズ。唯恩賞ヲ得ンガ爲ナリ。尊氏巧ニ其ノ心ヲ收攬ス。而シテ新田義貞ハ廉潔ノ士ナルヲ以テ、之ヲ爲スコト能ハズ。是足利氏ノ興リテ新田氏ノ亡ナル所以ナリ。是ヨリ先、護良親王尊氏ノ奸佞ニシテ權柄ヲ弄スルヲ憎ミ、之ヲ除カントシ給フ。公卿中之ニ應ズル者アリ。尊氏乃天皇ニ迫リテ親王ヲ鎌倉ニ囚ヘシム。既ニシテ北條時行鎌倉ヲ攻ム。足利直義親クコト能ハズ。淵邊某ヲシテ先親王ヲ弒セシメ、鎌倉ヲ退ク。親王ヲ囚ヘシ土窟ハ今尙鎌倉ニ在リ。見ル者慘然タラザルハナシ。當時ノ形勢ヨリ之ヲ察スレバ、親王ノ不幸ハ畢竟公家武家争權ノ一端ニシテ、先ニ藤房ノ遁世アリ。後ニ正成ノ戰死アリ。皆同一活劇ノ異局ノミ。大江時古成良親王ヲ奉マテ歸洛ス。時行ノ兵之ヲ討テ直義返リ戰ヒ、駿河國手越川原ニ於テ大ニ敗ラル。淵邊某戰死ス。

第六十四章 南北朝

○一節 尊氏鎌倉ニ據ル 建武中興ノ業中道ニシテ衰フ。公卿ハ功ナクシテ自ラ尊大ニシ、武士ハ不平ヲ懷キテ朝命ヲ奉ゼズ。女謁盛ニ行ハレ、事偏頗多シ。内奏ノ便ヲ得ル者ハ頻ニ所領ヲ賜ハリ勳功ノ士ハ却リテ恩賞ニ預ラズ。或ハ一旦領邑ヲ賜ハルモ、更ニ之ヲ別人ニ付セラレ、一所ニ數人ノ領主アルニ至ル。是ヲ以テ衆情憤怨セリ。足利尊氏素ヨリ異志アリ。源氏ノ遺業ヲ起シ、頼朝ノ後ヲ襲クヲ以テ生涯ノ望トシ、武士ノ憤怨ニ乘リ、頻ニ衆心ヲ收メ、誓ヲ伺ヒテ宿謀ヲ濟サント欲ス。建武二年、北條時行ノ勢甚盛ニシテ、直義爲ニ敗ラル。ニ及ビ、尊氏請ヒテ自東征セントシ、發スルニ臨ミテ征夷大將軍ニ任セラレ

足利尊氏ノ
異志

尊氏府ヲ鎌
倉ニ開キ自
征夷大將軍
ト稱ス

東國ヲ管領センコトヲ請フ。朝廷聽サズ、更ニ征東將軍ニ任ズ。尊氏怒リ、辭セズシテ發ス。是ニ於テ武士ノ怨ヲ朝廷ニ懷ク者、一時ニ奮起シテ影從ス。時行敗走シ、尊氏鎌倉ニ入ル。天皇人ヲ遣シテ宣勞シ、遙ニ從二位ヲ授ク。剛ヲ班サントトテ促シ給フ。尊氏命ヲ奉ゼズ、頼朝ノ舊址ニ據リテ府ヲ開キ、自征夷大將軍ト稱

尊氏ノ威聞
東ニ振フ

尊氏新田義
貞ヲ誣奏ス

天下ノ武士
二黨ニ分ル

尊氏ノ官爵
ヲ奪ヒ之ヲ
討タシム

シ東國ヲ管領ス。又厚ク功アル者ヲ賞シ、降附スル者ヲ撫納セルヲ以テ、將士等
ヒテ其ノ麾下ニ屬シ、威勢關東ニ振ヘリ。

○二節 義貞尊氏ヲ討ツ 新田義貞モ亦源氏ノ宗胃ニシテ、族望尊氏ニ均

シク、共ニ中興ノ功臣タリ。尊氏以爲ヘラク。天下意ニ介スベキハ獨義貞ノミ。之

ヲ除クヲ得バ、則夙志ヲ成ス可シト。上書シテ其ノ罪ヲ數ヘ、新田氏領邑ノ關東

ニ在ルモノヲ奪ヒ、悉部下ニ分配ス。義貞モ亦上書シテ尊氏ノ叛狀ヲ奏ス。尊氏、

直義ヲシテ諸國ノ兵ヲ招集セシメ、義貞ト雌雄ヲ決セントス。是ニ於テ天下ノ

武士二黨ニ分カレ、東シテ尊氏ニ附ク者、西シテ義貞ニ從フ者、來往續紛、道路纒

ルガ如シ。既ニシテ護良親王ノ侍女關東ヨリ到リ、直義亂ニ乘ツテ親王ヲ弒

シ奉リシ狀ヲ以テ聞ス。又南海、西海ノ諸國ヨリ、尊氏ノ兵ヲ促ス。奮數通ヲ奉ル

天皇逆鱗シ給ヒ、乃尊氏ノ官爵ヲ奪ヒ、義貞ヲ遣シ、尊良親王ヲ奉マテ之ヲ討タ

シメ給フ。官軍東海、東山兩道ヨリ并ビ進ム。

○三節 尊氏京師ヲ犯ス 義貞兵六萬七千ニ將トシテ東海道ヨリ進ミ、尊

氏ノ兵ト矢矧ニ戰ヒテ之ヲ敗リ、進ミテ手越河原ニ至リ、直義ノ兵ト戰ヒテ亦

官軍利アラ
ズ天皇數山
ニ幸シ給フ

源顯家大兵
ヲ率井テ到

楠木正成謀
ヲ敗ケテ尊
氏ヲ破ル

之ヲ走ラシ、將ニ鎌倉ニ入ラントス。時ニ東山道ノ軍足利高經等ノ爲ニ竹下ニ
敗ラレ、大友貞載、鹽冶高貞、東軍ニ降ル。東海道ノ軍此ノ報ヲ聞キテ大ニ潰レ、復
支フ可カラズ。時ニ山陰、山陽、南海ノ兵尊氏ニ應ズル者多シ。天皇義貞ヲ召還シ、
給フ。尊氏子義詮ヲシテ鎌倉ヲ留守セシメ、直義ト官軍ニ尾シテ西上ス。天皇義
貞ヲシテ大渡ヲ守ラシメ、諸將ヲシテ分レテ山崎、宇治、勢多ヲ守ラシメ、給フ。官
軍利アラズ。義貞京都ニ退ク。天皇神器ヲ奉マテ叡山ニ幸シ給フ。尊氏遂ニ京師
ニ入ル。時ニ延元元年紀元千九百九十六年正月十日ナリ。

○四節 尊氏九州ニ走ル 鎮守府將軍源顯家大兵ヲ率テ陸奥ヨリ到リ

義貞ヲ助ケテ尊氏ヲ討ツ。義貞ノ將士圍城寺僧兵ノ裝ヲ爲シテ敵兵ニ混入シ、

兩軍東山ノ麓ニ戰フニ當リ、突然起リテ尊氏ノ麾下ヲ突キ之ヲ敗ル。尊氏桂川

ニ奔リ、將ニ自殺セントス。既ニシテ義貞細川定禪ノ爲ニ敗ラレテ軍ヲ卻ク。尊

氏復京師ニ入ル。居ルコト數日。顯家ノ兵ト四條河原ニ戰ヒテ敗ラレ、再桂川ニ

退ク。既ニシテ兵ヲ回シ、復京師ニ入ル。翌日楠木正成謀ヲ設ケ、僞リテ義貞等戰

死スト稱ス。尊氏之ヲ信シ、殘兵ノ奔逸ヲ遏メント欲シ、兵ヲ諸道ニ分遣ス。官軍

義貞ヲ追討セシム

尊氏持明院廢主ノ書ヲ立得テ錦旗ヲ

其ノ麾下ノ單弱ナルニ乗テ急ニ之ヲ攻ム。尊氏大ニ敗レテ九州ニ走ル。三月、朝廷義貞ヲシテ山陰、山陽十六州ヲ管領シ、尊氏ヲ追討セシム。義貞弟脇屋義助ト先播磨備前ノ賊ヲ討ズ。初メ尊氏ノ京師ニ入レルト、皇統ノ兩系ニ分レタルニ乗テ、其一ヲ擁立シテ、以テ朝敵ノ名ヲ避ケント欲シ、後伏見上皇ノ皇子ヲ奉ゼントナル意アリキ。然レドモ諸皇子皆車駕ニ從ヒテ、叡山ニ入り給ヒシヲ以テ果サズ、其ノ西走シテ兵庫ニ至レルトキ、熊野ノ別當道有テシテ、持明院上皇ノ院宣ヲ得ルコトヲ謀ラシム。道有上皇ノ臣僚ト相識レルヲ以テナリ、遂ニ九州ニ入りテ兵ヲ集メ、五月諸軍ヲ率テ太宰府ヲ發シ、嚴島ニ至ル。會、三寶院ノ僧賢俊持明院廢主ノ書ヲ齎シテ至ル。尊氏大ニ悅ビテ曰ハク、我が事濟レリト。即諸將ヲシテ錦旗ヲ立ラシム。遠近ノ兵來附スル者益多シ。兵糧凡七千餘艘、進ミテ鞆津ニ至リ、小貳頼尙ノ策ヲ用テ、直義ニ步騎二十萬ヲ授ケテ陸路ヨリセシメ、自舟師ヲ率テ東上ス。備前丹波美作等ノ官軍、風ヲ望ミテ解キ去ル。○五 正成ノ戰死 尊氏直義勝ニ乗テ進ム。旌旗日ニ輝キ、鼓聲天地ニ震フ。義貞兵庫ニ陣シ、急テ朝廷ニ報ズ。天皇震駭シ、正成ヲ召シテ謀ヲ諮ヒ給フ。

正成策ヲ獻シテ用井ヲレズ

正成櫻井ニ至リ後事ヲ子正行ニ托ス

正成曰ハク、暫ク車駕ヲ叡山ニ遷シテ敵ヲ京師ニ誘入シ、而ル後之ヲ挾撃セバ、一舉ニシテ破ルベシト。然レドモ正成必勝ノ策ハ公卿ノ間ニ容レラレズ。參議藤原清忠、速ニ正成ヲ遣シテ義貞ヲ援ケ、尊氏ノ軍ヲ兵庫ニ逆ヘ撃タシメント主張ス。天皇之ニ從ヒ給フ。正成時勢ニ感ズル所アリ、櫻井驛ニ至リ、子正行ニ托スルニ後事ヲ以テシテ曰ハク、今日ノ戰ハ、天下安危ノ決スル所ナリ。吾己ニ戰死セバ、天下ハ盡ク足利氏ニ歸セシ。然レドモ汝宜シク時機ヲ待チテ義兵ヲ興シ、以テ宸襟ヲ安メ奉ルベシト。進ミテ兵庫ニ至リ、義貞ヲ慰勉ス。時ニ尊氏水軍ニ將タリ、直義陸軍ニ將タリ。陸軍五十萬ト稱ス。正成手兵七百人ヲ以テ湊川ニ陣シ之ニ當ル。脇屋義助、經島ニ陣シ、以テ水軍ヲ防グ。義貞兵二萬五千ニ將トシテ和田崎ニ陣ス。既ニシテ尊氏ノ全軍和田崎ニ上リ、正成腹背敵ヲ受ク。乃先前者ヲ破リテ後ニ後者ニ接セント欲シ、弟正季ト嚮テ並ベテ陸軍ニ突入シ、縱橫奮撃殆直義ヲ獲ントシタリ。尊氏ノ兵亦其ノ軍後ヲ包ム。正成兄弟馬ヲ回シテ之ニ當リ、血戰十六合、盡其ノ騎ヲ亡ヒ、身十餘創ヲ被ル。乃主從六十餘人ト寺ニ入り、屠腹シテ卒ス。天皇追悼シテ已マズ、正三位左近衛中將ヲ贈リ給

正成戰死ス

軍駕叡山ニ幸シ尊氏京師ニ入ル

義貞尊氏ト兵庫ニ戦ヒ敗レテ京師ニ還ル軍駕叡山ニ幸シ尊氏遂ニ京師ニ入ル

(六五四)

尊氏光明院ヲ擁立ス

○六南北兩朝ノ分立 天皇ノ叡山ニ入り給フニ當リ花園上皇及光嚴院ハ病ト稱シテ京師ニ留リ給ヘリ是即尊氏ノ力ヲ藉リテ持明院統ノ恢復ヲ謀リ給ハンガ爲ナリ 延元元年八月尊氏遂ニ光嚴院ノ皇弟豐仁親王ヲ建テ帝ト稱シ猶建武ノ號ヲ用ウ之ヲ光明院トス時ニ民俗大義ヲ解セズ暗リテ尊氏密ニ使ヲ叡山ニ遣シ偽リテ降ヲ乞ヒ奏シテ曰ハク臣敢テ逆意アルニ非ズ義貞兄弟天威ヲ藉リテ私怨ヲ報イント謀ルニ因リ已ムコトヲ得ズシテ兵ヲ舉グ以テ奸臣ヲ誅セントスルノミ伏シテ冀ハクハ陛下臣ノ無罪ヲ察シ當與テ京師ニ回シ給ヘ臣敢テ警怨ヲ思ハズ有司ノ官爵食邑悉舊ニ復シ政事ヲ朝廷ニ還シ奉ラント天皇之ヲ許シ給ヒ鳳輦將ニ叡山ヲ發セントス義貞其ノ偽ヲ知り切ニ之ヲ止メ奉リシカドモ遂ニ聽カレザリキ尊氏天皇ヲ花山院ニ幽シ奉リ悉公卿ノ官爵ヲ奪ヒ將士ヲ拘繫シ迫リテ神器ヲ新主ニ傳ヘ給ハン

尊氏天皇ヲ花山院ニ幽ス

義貞皇太子ヲ奉シテ北國ニ赴ク

吉野ノ行宮

コトヲ請フ天皇新ニ劔璽鏡ヲ造ラシメテ之ヲ授ケ給ヘリ 義貞叡山ヨリ皇太子ヲ奉マテ北國ニ赴キ越前ニ到ル 十二月天皇夜ニ乗マテ花山院ヲ出テ吉野ニ幸シ此ニ行宮ヲ建テ給ヒ是ヨリ京都ヲ北朝ト云ヒ吉野ヲ南朝ト稱ス

○七義貞ノ戰死 延元二年義貞皇太子ト尊良親王トヲ奉マテ北越ニ在

リ氣比氏治迎ヘテ金崎城ニ入ル義貞長子義顯ヲ越後ニ遣シ義助ヲ柚山ニ遣シ共ニ兵ヲ集メシム足利高經二萬餘人ヲ以テ金崎ヲ圍ム義助義顯途ヨリ還リ擊チテ之ヲ走ラス義貞乃船ヲ泛ベ大ニ皇太子及尊良親王ヲ護シ自器ヲ取リテ樂ヲ奏ス魚跳リテ船ニ入ル衆以テ吉ト爲シ割キテ天ヲ祭リ歡ヲ極ム 敵又大兵ヲ發シテ水陸來リ攻ム城兵善ク戰ヒシカドモ外援斷絶シ糧食已ニ竭キ城遂ニ陷ル皇太子虜ニ就キ給フ尊良親王及義顯自殺ス後尊氏皇太子ヲ鳩シ奉レリ 此ヨリ先義貞義助出テ柚山ニ赴キ匿ル一半年使ヲ發シテ舊黨ヲ招集シ三千餘人ヲ得タリ加賀ノ人敷地山岸等兵ヲ起シテ義貞ニ應マシ加賀越前ノ界ニ據リ大聖寺城ヲ拔ク 延元三年義貞越前府ヲ陷レ高經ヲ足

皇太子捕ヘテ新田義親ヲ殺ス

天皇親翰ヲ
ハシメ給フ

義貞馬ヲ
攻メテ死ス

天皇ノ遺詔

羽ニ走ラズ北國響震ス。大井田氏經亦越後ノ兵二萬ヲ以テ至ル時ニ源顯家
沒シ、弟近衛少將顯信散兵ヲ收メテ男山ニ據ル。天皇親翰ヲ義貞ニ下シテ顯信
ヲ援クシメ給フ。義貞大ニ喜ビテ曰ハク、古ヨリ源平武臣ノ功ヲ王室ニ立テタ
ル者甚多シ。然レドモ未手詔ヲ賜ハリシ者アラズ。今我此ノ至榮ヲ荷フ。安ソ
天恩ニ報ゼザランヤ。高經ノ後患ヲ爲サンコトヲ慮リ、自三千餘人ヲ以テ越
前ニ留リ、義助ヲシテ兵二萬ヲ率テ男山ヲ救ハシム。未至ラズシテ男山陷ル
乃兵ヲ合セテ專高經ヲ攻ム。高經平泉寺ノ僧兵ヲ誘ヒ、藤島以下ノ七寨ヲ修メ
テ之ヲ守ル。閏七月義貞兵ヲ分チテ藤島ヲ攻メシメ、自五十騎ヲ率テ之ニ赴
キ、賊兵三百ニ田中ニ遇フ。矢下ルコト雨ノ如シ。義貞馬ニ鞭チテ進ム。流矢アリ
其ノ眉間ニ中ル。乃刀ヲ拔キ自刎シテ卒ス。年三十八是ニ於テ兵士逃散シ、北國
復支ヘズ

○節八吉野ノ行宮 天皇吉野ニ坐シマス。楠木正行、和田正朝等行宮ヲ警衛
セリ。延元四年八月、天皇不豫、位ヲ皇太子義良親王ニ讓リ給フ。遺詔シテ宣ハ
ク、逆賊未平ガズ、四海騷擾セリ。朕惟之ヲ恨トス。身ハタトヒ南山ニ瘞ムトモ、魂

後村上天皇

諸國ノ官軍

楠正行驍賊
ヲ破ル

魄常ニ北關ヲ望マン。汝宜シク賢能ヲ用非。忠義ヲ賞シ、一ニ恢復ヲ圖リ、以テ朕
ガ志ニ稱フベシト。左手ニ法華經ヲ把リ、右手ニ劔ヲ按シテ崩御ス。皇太子位ニ
即キ給フ。之ヲ後村上天皇トス。義貞戰死ノ後ハ、南朝ノ勢稍縮マリシカドモ、
北畠氏ノ族ハ陸奥及伊勢ニ在リ、新田氏ノ族ハ武藏、下野、越前等ニ在リ、楠木氏
ノ族ハ河内ニ在リ。又山陽ノ兒島氏、櫻山氏、有井氏、吉川氏、山陰ノ名和氏、三角氏、
西海ノ菊池氏、松浦氏、草野氏、南海ノ土居氏、得能氏、湯淺氏、山本氏、遠江ノ井伊、美
濃ノ根尾、尾張ノ熱田宮司等皆勤王シ、北條時行モ亦降レリ。時ニ宗良親王征
東將軍タリ。懷良親王征西將軍タリ。以テ東國及九州ノ軍事ヲ總督シ給ヘリ。

○節九正行ノ戰死 正成ノ戰死セシトキ、正行年甫メテ十一。父ノ遺誡ヲ奉
テ、常ニ討賊ヲ以テ志ト爲ス。長ズルニ及ビ、帶刀檢非違使左衛門尉ト爲リ、河内、
守ヲ兼ヌ。後村上天皇踐祚ノ初、屢兵ヲ出シテ敵軍ヲ破ル。正平二年和元二年、尊氏
細川顯氏ヲシテ河内ヲ攻メシム。正行奇計ヲ用テ大ニ之ヲ破ル。山名時氏兵
六千ヲ率テ來リテ顯氏ヲ援ク。正行兵二千ヲ以テ瓜生野ニ戰ヒ、大ニ之ニ克ク。
時氏創ヲ被リテ走ル。尊氏憂懼シ、高師直及弟師泰ヲシテ兵六萬ヲ發シ來リ

正行ノ奏請

(六五八)

攻メシム。正行弟正時等百四十餘人ト誓ヒテ死ヲ決シ、行宮ニ至リ奏請シテ曰ハク、臣父ノ遺命ヲ奉リ、黨族ヲ糾合シ、日夜朝敵ヲ平クルヲ以テ事ト爲ス。然レドモ不幸ニシテ多病ナリ。若一旦病ヲ以テ死セバ、上ハ不忠ノ臣トナリ、下ハ不孝ノ子ト爲ラン。方今師直、師泰來リ侵サントス。是實ニ臣ガ報效ノ秋ナリ。若彼ノ首ヲ獲ズバ、則臣等兄弟ノ首ヲ彼ニ授クン。雌雄ノ決此ノ一戦ニ在リ。願ハクハ一タビ龍顏ヲ拜シ奉リテ去ラント。言畢ハリテ涙下ル。天皇親臨シ口宜シ給ハク、前日ノ二戦、毎ニ克捷ヲ得タリ。父子ノ忠勳殊ニ嘉尙スベシ。聞ク賊兵ヲ盡シテ來リ犯スト。事態固ヨリ輕カラズ。然リト雖時ノ失フ可カラザルヲ見テ進ミ、圖ノ全ウスベキヲ思ヒテ退クハ、共ニ將帥ノ術ナリ。汝ハ朕ノ爪牙ナリ。慎ミテ自愛スベシト。正行頓首シテ出テ、後醍醐天皇ノ廟ヲ拜シ、告ケテ曰ハク、戦如利アラズハ生キテ還ラント。同盟ノ姓氏ヲ如意法輪堂ノ壁ニ題シ、和歌ヲ其ノ後ニ書シテ曰ハク、返らじと、かねて思へば、あづさ弓なきかすに、名をぞ留むるト。正平三年正月、師直河内ニ入ル。正行兵三千ヲ以テ四條畷ニ戦ヒ、奮闘時ヲ移ス。既ニシテ馬皆數矢ヲ被ル。衆乃馬ヨリ下リ、壘ニ據リテ坐食ス。食畢

天皇正行ニ口宜シ給フ

正行ノ辭世
四條畷ノ戦

正行戰死ス

高師直行宮ヲ燒ク

職原抄
神皇正統記

リテ進ミ、接戰益勵シ。遂ニ師直ノ本營ニ迫ル。上山高元僞リテ師直ト稱シ防戦シテ死ス。正行大ニ喜ビ首ヲ空中ニ擲チテ、手ニ承クルコト一再、既ニシテ其ノ僞ナルヲ知り、之ヲ地ニ投テ罵リテ曰ハク、汝モ無雙ノ朝敵タリ。然レドモ其ノ勇ハ賞スベシト。此ノ日戰已ヨリ申ニ至ルマテ凡三十餘合、殺傷擧ケテ數フ可カラズ。正行、正時、時敏、數箭ニ中リ、殘兵皆重創ヲ被リ復用ウ可カラズ。兄弟乃交刺シテ死ス。時ニ正行年二十三。

師直吉野ニ迫リテ行宮ヲ燒ク。天皇穴太ニ幸シ給フ。正行ノ弟正儀兵ヲ出シテ師泰ヲ拒ク。東國ノ新田氏、西國ノ菊池氏モ亦兵ヲ募リテ賊ニ抗ス。後醍醐天皇吉野ニ遷リ給ヒシヨリ此ニ至ルマテ十三年ヲ經タリ。

○十北畠親房

南朝ノ紀事ハ親房ニ及バズバ完キコトヲ得ベカラズ。親房ハ具平親王ノ後ナリ。勤王ノ志甚厚シ。後醍醐天皇行在ヲ吉野ニ建テ給ヒシ時ヨリ、常ニ相將ノ任ヲ總ベテ王事ニ奔走セリ。延元三年、出テ、關東ヲ經畧シ、小田城ニ據ル。興國二年和元二年、小田治久叛ス。親房走リテ關城ヲ保ツ。四年城陷リテ吉野ニ還ル。親房嘗テ職原鈔ヲ著シテ政務ノ參考ニ備ヘ、又神皇正統

能ヲ著シテ皇位ノ正閏ヲ辨ズ。即南朝ハ神器傳ハレルヲ以テ之ヲ正トシ、北朝ヲ閏トセルナリ。子顯能ハ伊勢ノ國司トナリ、春日顯信ハ奥羽ヲ鎮シ、中院氏ハ鎮西ニ在リテ、共ニ南朝ノ藩屏タリキ。

(六六〇)

第四 室町時代

第六十五章 足利氏初政

○一節 京都幕府 南朝ノ正平三年高師直吉野ニ入リシ年ハ、北朝ノ貞和四年ニ當レリ。此ノ年十月、北朝ノ光明院位ヲ崇光院ニ讓リ給ヘリ。是ヨリ先足利尊氏將軍ノ宣下ヲ受ケ幕府ヲ室町ノ邸ニ開キ、天下號令ノ權ヲ執リ、威望甚高シ。其ノ家ノ爲ニ攝家ノ格式ヲ依用スルニ至ル。將軍是ヨリ尊大ナリ。尊氏京師ニ幕府ヲ開キシカドモ、自稱シテ鎌倉大納言ト云ヒキ。尊氏ノ弟直義ハ自關東十國ノ管領ト稱ス。然レドモ鎌倉ノ政務ハ之ヲ尊氏ノ子義詮ニ委テ、其ノ身ハ上京シテ錦小路ニ居リ、尊氏ノ政務ヲ助ク。之ヲ錦小路殿ト云フ。是ヨリ北朝ノ政治ハ尊氏直義ノ二人ニ決シ、公卿ハ官職ニ備ハルノミニシテ、禮儀ノ外一事ヲ決行スル權ナカリキ。當時武人動モスレバ朝威ヲ蔑侮シ、土岐頼遠ノ如キハ光嚴院ノ儀衛ヲ射ルニ至レリ。幕府之ヲ死刑ニ處シ、以テ衆ヲ戒メタリ。

○二節 建武式目及式目追加 初メ尊氏幕府ヲ京師ニ開キシトキ、文章博

尊氏幕府ヲ京師ニ開ク

鎌倉大納言

錦小路殿

武人朝威ヲ蔑侮ス

建武式目

建武以來追

直義高師直
ヲ勤クセント

(六六二)

士日野藤範、僧是圓等六人ニ命ヲテ政綱ヲ議定セシム。建武四年ニ至リテ成ル。十七條アリ。之ヲ建武式目ト云フ。然レドモ是唯施政ノ方針ヲ示シタル者ニシテ人民ニ對スル布令ニ非ズ。法制ハ尙北條氏ノ貞永式目ノ大體ヲ用非、隨時其ノ追加ヲ發布シタリ。後ニ之ヲ集メテ建武以來追加ト云フ。建武五年即曆應三リ永正五年ニ至ルマデ百七十年間ニ發布セル所凡二百十條アリ。餘裁一定ナラズ。其ノ御沙汰ト稱スルハ將軍直義ノ命令ニシテ將軍ノ判アリ。御評定ト稱スルハ即將軍ノ判決ナリ。又沙汰及評定ト稱スルハ普通ノ命令決議ナリ。又タマ評ト稱スルモノアリ。或ハ歟ト稱スルモノアリ。共ニ一時ノ掟ナルベシ。又仁政内談ト稱スルモノアリ。以テ足利幕府政務ノ一斑ヲ知ルニ足レリ。

○三 足利氏ノ内患 尊氏政事ヲ直義ニ委テ、其ノ家ニ政所ヲ開ク。直義政ヲ執ルコト數年。威權甚盛ナリ。高師直軍功ヲ以テ重用セラレ、尊氏ノ執事トナリ、弟師泰ハ兵ヲ將非諸國ニ出テ、督戰ス。是ヲ以テ師直ノ一族文武ノ權要ニ當リ、其ノ勢直義ニ抗スルニ至レリ。上杉重能直義ニ説キテ師直ヲ黜ク、改革ヲ行ハシム。師泰之ヲ聞キテ河内ヨリ軍ヲ還シ、師直ヲ助ケテ尊氏直義ヲ圍

尊氏直義政務ヲ奉フ

直義歸順ス

尊氏直義相軌ル

ム。將士多ク重能ニ服セズ、皆師直ニ附ク。尊氏乃直義ノ政ヲ奪ヒ、重能ヲ流シ、少子基氏ヲ鎌倉ニ遣シ、義詮ヲ召還シテ政事ヲ掌ラシム。是ニ於テ直義ハ菴髮閑居セリ。時ニ直義ノ養子直冬備後ニ在リテ山陽ヲ鎮ス。京師ノ變ヲ聞キ、肥後ニ據リテ兵ヲ起ス。小貳頼尙等之ニ屬ス。師直尊氏ニ勸メ往キテ直冬ヲ討タシメ、其ノ不在ニ乘テ直義ヲ殺サントス。直義乃南朝ニ降ル。時ニ正平五年紀元十ナリ。天皇之ヲ許シ、勅シテ京師ヲ復セシメ給フ。畠山國清、石堂頼房、桃井直常等直義ニ應ズ。義詮逃レテ尊氏ノ軍ニ走ル。明年、尊氏直義ト和解シ、師直、師泰等重能ノ子顯能ノ爲ニ要殺セラル。尊氏、義詮京師ニ還リ、政ヲ直義ニ復ス。尊氏幕府ヲ開キ、未十五年ヲ出テザルニ門族内患ヲ生マ、黨與分裂シテ亦收ム可カラザルニ至レリ。

○四 南軍三タビ京師ヲ復ス 足利氏ノ不和ニ因リ南朝稍勢ヲ得タリ。尊氏直義ト和睦シタリシ後モ内情ハ相善カラズ。仁木、細川、土岐、佐々木ノ徒ハ尊氏ニ與シ、石堂、上杉、桃井ノ徒ハ直義ニ黨シ、常ニ相猜忌シ、各兵ヲ備ヘテ相窺フ。直義自安ノゼズシテ越前ニ走り、遂ニ鎌倉ニ據ル。尊氏之ヲ討タント欲ス。

源氏降

(六六四)

天皇男山ニ

幸ス

南北暫一統

源氏義隆復

院ヲ立ツ

南軍再京師ニ入ル

北島親房薨

然レドモ京師南軍ノ爲ニ襲ハレシコトヲ慮リ、僞リテ南朝ニ降り、直義追討ノ勅ヲ請フ。天皇亦僞リテ其ノ降ヲ聽シ給ヘリ。源氏乃東下シ、直義ヲ擊テ遂ニ之ヲ殺ス。是ニ於テ直冬及直義ノ黨南朝ニ降レリ。義詮京師ニ留守シ、崇光院及太弟直仁親王ヲ廢シ、後村上天皇ノ還幸ヲ請ヒ奉ル。正平七年閏二月天皇男山ニ幸シ、北島親房、楠木正儀等ヲシテ京師ニ入り、政權ヲ收メシメ給フ。南北暫一統ス。既ニシテ源氏義詮復叛シ、親房ノ軍義詮ト戦ヒテ敗ラル。天皇北朝ノ三院光嚴、光及新造ノ神器ヲ奉テ南ニ還幸シ給ヘリ。是ニ於テ京師主ナシ。義詮崇光上皇ノ皇弟ヲ立ツ。之ヲ後光嚴院トス、神器ナシ。是ヨリ後北朝ノ踐祚ハ唯神器授受ノ空禮ヲ行フノミ。光嚴、光明ノ兩皇ハ世ノ紛擾ヲ厭ヒ、出家シテ禪僧トナリ、復政事ニ關シ給ハザリキ。

○五 義詮

正平八年八月、南軍再京師ニ入ル。義詮後光嚴院ヲ奉マテ美濃ニ走ル。時ニ源氏尙關東ニ在リ、新田義宗等ノ鎌倉ヲ襲フコトヲ恐レテ西上セザリシガ、遂ニ關東ヲ基氏ニ委テ來ル。南軍乃攝津ニ引キ還セリ。源氏京師ニ入り、政事ヲ義詮ニ委ヌ。正平九年、北島親房薨ズ。是ヨリ南朝ノ勢一頓挫セリ。

足利義隆行宮ヲ犯ス

南軍三タヒ京師ニ入ル

十三年、源氏卒ス。義詮職ヲ襲キ、細川清氏ヲ執事トシ、南朝ヲ犯サント謀ル。十四年、鎌倉ノ執事島山國清東國ノ兵二十萬ヲ率テ至リ、攝河兩路ヨリ進ム。天皇觀心寺ニ幸シ給ヒ、楠木正儀、金剛山ニ據リテ防戦ス。時ニ義詮ノ諸將相和セズ。仁木義長南朝ニ降り、南軍所々ヨリ起ル。衆罪ヲ國清ニ歸ス。國清逃レテ關東ニ歸ル。南軍機ニ乗テ進ミ、天皇住吉ニ幸シ給ヘリ。十六年、細川清氏、京極道譽ト權ヲ争ヒ、南朝ニ降リテ屢、京師ヲ襲ヒ、南軍三タヒ京師ニ入ル。義詮後光嚴院ヲ奉テ近江ニ走リ、月餘ニシテ復入ル。清氏讃岐ニ走リ、細川頼之ノ爲メニ殺サル。義詮足利高經ノ子斯波義將ヲ管領トシ、高經ヲシテ政務ヲ執ラシム。時ニ山名時氏南朝ニ附キ、丹波、因幡、美作等ヲ席卷シテ勢甚盛ナリ。義詮意ヲ屈シテ之ヲ招キ降ス。直義ノ黨吉良、石堂、桃井、仁木等ノ徒亦尙背常ナカリキ。既ニシテ高經モ亦背キテ越前ニ走リヌ。

義詮一代ハ内訌相因リ、南朝勢ヲ得タリ。義詮兵革ヲ厭ヒテ和ヲ請フ。天皇之ヲ許容シ給ヒシカドモ、降參ノ禮ヲ用非シメントシ給ヒシヲ以テ事成ラザリキ。

○六 義滿

正平二十二年、義詮卒ス。翌年後村上天皇住吉ニ崩御シ給ヒ、皇長

帝國史略

第六期

第六十五章

足利氏初政

(六六五)

長慶天皇

後龜山天皇

足利義滿將軍

南朝ノ勢漸衰フ

後圓融院

征西府復振ハズ

子寛成親王立チ給フ之ヲ長慶天皇トス。幾バクモナクシテ天皇位ヲ皇太弟ニ讓リ給ヘリ。之ヲ後龜山天皇トス。是ヨリ先京師ニ於テハ足利義滿將軍トナル。尙幼ナリ。細川頼之義詮ノ遺命ニ依リテ管領トナリ、心ヲ竭シテ輔佐シ、頗治績アリ。楠木正儀一族ト和セズシテ北朝ニ降ル。長慶上皇モ亦重祚ノ御意アリキ。是ヨリ南朝ノ勢漸衰フ。細川頼之之ニ乗ツテ山名、赤松等ト攝津、紀伊ヨリ侵入ス。文中元年紀元三十二年北朝後光嚴院位ヲ皇太子ニ讓リ給フ。之ヲ後圓融院トス。上皇院政ヲ聽キ給フ。ト三年ニシテ崩御ス。今川貞世義詮ノ喪ニ薙髮シテ了俊ト號ス。文武ノ才アリ、將略ニ富ム。頼之之ヲ舉ゲテ九州ノ探題ト爲ス。了俊周防ノ大内弘世ト豐後ヨリ進ミ、菊地武光ヲ擊チテ之ヲ破ル。是ヨリ征西府復振ハズ。弘和元年紀元四十二年正儀歸順ス。義滿長ヰテ政事ヲ自スルニ至リ局勢俄ニ一變シタリ。

(六六六)

第六十六章 足利氏中世

○一南北合一 北朝ニ於テハ永徳二年南朝弘和二年以テ後圓融院位ヲ皇太子ニ讓リ給フ。之ヲ後小松院トス。甫メテ六歳ニ坐ス。安徳天皇ヨリ以後此ノ如キ幼主未坐シマサマリキ。太政大臣二條良基攝政タリ。足利義滿左大臣ヲ以テ院ノ執事トナリ、久我家ノ淳和獎學兩院ノ別當源氏ノ長者ヲ罷メテ義滿之ヲ兼ヌ。是ヨリ長者ハ源氏將軍ノ常例トナル。義滿幕府ヲ室町ニ開キ、軍政ヲ修飾シ、尊氏、義詮ノ寛縦ヲ矯メ、紀律ヲ肅整ス。是ヨリ北朝ノ勢漸張リ、足利氏中世ノ隆興ヲ見ル。其ノ族細川、斯波、畠山等近畿ニ盤據シテ強藩ヲナシ、山名、赤松、佐々木ノ徒亦強大ナリ。或ハ十國ヲ兼ヌルニ至ル。義滿諸將ヲシテ南方ヲ侵削セシム。山名氏清和泉、紀伊ヲ取ル。是ニ於テ南朝勢益盛マリ、僅ニ吉野ヲ保チ、北畠氏南伊勢ヲ以テ東藩トナレルノミ。細川頼之久シク政ヲ執ル。義滿之ヲ忌ミ、罷メテ讃岐ニ遷ラシム。嘉慶二年南朝元中五年義滿富士遊覽ニ托シテ駿河ニ至リ、武ヲ東國ニ觀シ、翌年嚴島參詣ニ托シテ筑紫ヲ巡察セントシ、周防

後小松院

義滿淳和獎學兩院ノ別當氏ノ長者トナル

南朝勢益盛マル

大内義弘謀和ヲ勸ム

ニ至リテ果サズ、歸路設岐ニ至リ、頼之ヲ諭ス。頼之復起チテ政ヲ輔ク。明徳二年南朝元山名氏清叛キテ京師ニ入ル。義滿諸將ヲ率テ之ヲ内野ニ破ル。一色詮範氏清ヲ斬ル。大内義弘進ミテ山名義理ヲ攻メ、紀伊ヲ取リ、島山基國ハ河内ヲ取ル。乃諸將ヲシテ山名ノ管國十國ヲ分管セシメ、其ノ強硬ヲ削除スルコトヲ得タリ。而シテ頼之亦卒ス。是ニ於テ大内義弘南朝ニ勸メテ和ヲ講ズ。楠木正儀之ニ從フ。後龜山天皇天下ノ久シク兵禍ニ苦ムヲ慮リ給ヒ、遂ニ和議ヲ容レ給フ。元中九年閏十月、天皇吉野ヨリ京師ニ還幸シ、御位ヲ後小松天皇ニ讓リ、太上天皇ノ尊號ヲ受ク。嵯峨ノ大覺寺ニ入り給ヘリ。南北分争五十七年。是ニ至リテ始メテ合一ニ歸ス。

後龜山天皇位ヲ後小松天皇ニ讓リ給フ

後小松天皇

足利義持將軍トナル

○節後小松天皇 南北和合シ、神器京師ニ還リ、後小松天皇第一百代ノ天皇トシテ位ニ坐シマス。實ニ第五十二世ノ繼統ナリ。明年後圓融上皇崩ズ。明年應永ト改元ス。一條經嗣典故ニ練達シ、二條師嗣ニ代リテ關白トナリ、政ヲ輔ク。同年南朝ニ屬セシ公卿近衛、二條、阿野等ノ領地ヲ沒收ス。而シテ伊勢ノ國司北畠顯泰ハ官爵封邑故ノ如クナリキ。義滿將軍ノ職ヲ義持ニ讓リ、左大臣ヨリ

義滿大權ヲ掌基ス

太政大臣ニ進ミ、大權ヲ掌握シ、外戚日野家ノ昆弟ヲシテ樞要ニ當ラシム。關白經嗣等其ノ旨ヲ承クテ潤色スルノミ。尋イテ義滿薙髮シテ北山莊ニ居リ、大政ヲ處斷ス。是ノ時王公卿相社寺ノ領地猶廣ク、記録所ノ政モ亦行ハレタリ。天皇内裏ヲ土御門殿ニ營ミ、昌平ノ運ヲ享ク給ヒ、京師ノ觀稍舊ニ復セリ。

○節鎮西及關東ノ形勢

南北和合ノ後モ鎮西關東ハ未綏服セズ。鎮西ノ

鎮西ノ形勢

菊地武政等恢復ヲ圖ル

探題今川了俊移リテ肥前後部ニ鎮シ、少貳千葉諸氏ヲ從ヘテ征西府ニ抗ス。時ニ懷良親王既ニ薨シ、後龜山天皇ノ皇弟良成親王征西大將軍トナリ、五條頼治之ヲ輔佐シ、筑後、矢部山ニ在リ。菊地氏其ノ背ヲ護シ、黒木氏其ノ前ヲ守ル。菊地武政、阿蘇惟政等ト恢復ヲ圖リ、肥筑ヲ争フ。大友、島津二氏謀ヲ通シテ探題ノ命ヲ用井ズ。半濟ノ租ヲ拒ム。了俊一族ヲ派シテ薩摩ノ澁谷氏ヲ助ケシメ、子貞兼ヲ日向ノ守護トナシ、以テ島津氏ヲ窘ム。尋イテ義滿ニ稟シテ其ノ守護職ヲ覈ヒ、往キテ之ヲ伐チ、九州豪強削除ノ策ヲ行フ。大友親世、大内義弘、婚ス。相謀リテ斯波義將ニ依リ了俊ヲ讒毀ス。義滿之ヲ信マ、應永三年了俊ヲ罷メテ、澁川滿頼ヲ探題トシ、義弘ニ命マテ之ヲ助ケシム。是ニ於テ少貳千葉等ハ菊地ト合シ

大友權
ナ争フ

關東ノ管領

兩上杉威權
ヲ争フ

(六七〇)

テ灌頼ヲ擊チ、大友、島津ハ滿頼ニ應ジ、大内盛見之ヲ援ク。是ヨリ少貳、大内互
權ヲ争ヒ、菊地ハ肥前ヲ侵略シ、鎮西ノ争鬪已マザリキ。
直義直冬ノ亂後、尊氏次子基氏ヲ以テ關東ノ管領トシ、將軍義詮ヲ助ケシム。基
氏才武アリ、關東善ク治マル、子氏滿之ニ繼ギ、上杉憲顯父子ヲシテ政事ヲ輔佐
セシム。是ニ於テ人心益服ス。又結城、蘆名ノ兵ヲ以テ新田氏ノ族ヲ伐チ、威名大
ニ振フ。其ノ子滿兼亦將客アリ。當時關東ノ將士ハ、唯管領アルヲ知リテ、將軍ア
ルヲ知ラザルニ至レリ。管領ノ邸ハ京師ノ將軍ニ倣ヒテ之ヲ御所ト稱シ、其
ノ政府ヲ呼ビテ公方ト云フ。又其ノ執事ヲ稱シテ管領ト云ヘリ。管領ハ代々
上杉氏ノ職ニシテ、兄弟兩家アリ。其ノ屬ガ谷録ニ宅スルヲ屬ガ谷家ト云ヒ、其ノ山
内上ニ宅スルヲ山内家ト云フ。之ヲ兩上杉ト稱ス。常ニ威權ヲ争ヘリ。滿兼ノ
二弟滿直、滿貞與羽ヲ分管ス。斯波氏亂レテ伊達政宗、蘆名滿盛起リ、與羽又亂ル。
宇都宮氏等新田ノ族ニ應ジテ武藏、兩野ノ間ニ起ル。鎌倉兵ヲ遣シテ之ヲ破ル。
新田氏遂ニ微ナリ。是ニ於テ伊達氏ハ與地ヲ侵食シテ漸强大ト爲リ、斯波氏ハ
大崎、最上ノ兩家ニ分レ、與羽ノ兩州ニ居ル。京師内野ノ捷ヨリ幕府ノ威名大ニ

幕府ノ規模
略定ル

義滿ノ威權

足利治亂記
ノ記事

震ヒ、京極高詮ヲ遣シテ山陽、山陰ノ動搖ヲ鎮定シ、山名滿幸ヲ誅シ、近畿全ク靜
穩ニ歸ス。是ニ於テ關東、鎮西ノ事ハ管領探題ニ委任シ、幕府ノ規模粗定マリ、義
滿漸驕奢ヲ事トセリ。國史

○四節 義滿太政大臣ト爲ル 足利義滿平、清盛ノ舊例ニ倣ヒテ太政大臣

トナリ、弟滿詮權大納言ニ任セラレ、管領斯波義將ハ右衛門、督ニ任ゼラル。義滿
自公方ト稱シ、上皇ニ等シキ儀衛ヲ張リ、關白ヲシテ其ノ裾ニ候セシメ、親王以
下ヲシテ階躡シテ送迎セシム。公卿皆其ノ門ニ伺候シ、諸將長服シタリ。足利
治亂記ハ正傳ニ非ザレドモ、左ノ一節ハ如キハ、將軍家譜等ノ書ニ符合シ、且記
事詳ナルヲ以テ、姑ク掲載シテ一説ニ備フ。同書ニ曰ハク、二十一日將軍傳奏ヲ
以テ申サレケル、義滿既ニ職ヲ義持ニ讓リ、武家ノ裁斷ヲトラス。此ノ上ハ太政
大臣ニ任ゼラレシコト大望ナリト仰セケレバ、諸卿殘ラズ參内シテ、武家相國
ニ任ズル事終ニ例ナシ。平、清盛ガ任ズル事我意ヲ振フ所、是例トセズ。弓削、道鏡
是ニ任ズ。誠ニ非ズ。源氏、長者ニ武家ノ任ズル例ナシト雖、將軍一方ノ源家ナレ
ハ是非ナシ。此ノ事如何トアル由將軍委ク聞キテヨシヨシ。義滿日本國王ト成

花ノ御所
金閣寺ヲ起
足利治亂記
ノ記事

リテ、斯波、細川、畠山、六角、山名ヲ五攝家トシ、土岐、赤松、仁木、京極、大内、一色、武田ヲ七清花トシ、其ノ外ノ諸大名ヲ其ノ姓ニ任テ、菅家、江家ノ式トシ、橋、清、中ノ姓ヲ以テ、其ノ家ヲ立テ、諸卿ト陪臣ノ名高キヲ武家トシ、鎌倉ノ管領氏滿ヲ將軍トシテ、武道ヲ糺シ、文道ヲ發サバ、聖帝トモ云スベシ。我清和ノ末ナレバ、非理ノ道ニアラズト、以テノ外ノ不豫ニシテ、己ニ公家ノ領地ヲ押ヘテ、誰某ニ賜ハルナド聞エケレバ、關白殿下滿高ヲ密ニ招請シテ、和解ノ義ヲ談シ、同二十五日ニ太政大臣ノ補任ヲ書キ出サル。翌廿六日參内、其ノ行、粧室ニ嚴重ナリ。相國獻上、寶物國光、太刀、白綾百卷、白銀一千兩、虎皮十枚、五色、絲四十斤、仙洞へ白銀一千兩、白綾五十卷、太刀、次ニ攝家、親王家及諸公家中へ白銀一萬兩賜フ。初メ義滿室町ノ邸ニ居リ、花木ヲ殖エテ花ノ御所ト稱シキ。職ヲ辭スルニ及ビ之ヲ義持ニ讓リ、己ハ西園寺家ノ北山莊ヲ取リ、諸國ノ守護ニ課シテ屋宇庭園ノ規模ヲ擴張セシメ、牆壁戶牖皆金ヲ塗リ、三層ノ大塔ヲ築ク。世人稱シテ金閣寺ト云フ。沼池ヲ鑿リ、麋鹿ヲ縱チ、號シテ鹿苑院ト云フ。今尙存在シテ、西京ノ一壯觀ヲ爲セリ。治亂記ニ又曰ハク、正月中旬ヨリ北山ノ麓西園寺ノ領地ヲ前相國義滿ノ隱居

北山殿

三管領

トシテ、西園寺へハ河内、國ニ於テ多クノ領ヲ與ヘラル。普請ノ奉行十六人、下頭二十人、大和、河内、和泉ノ御家人等役タリ。金泥ヲ以テタミタレバ、京堂共是ヲ金閣ト申ス。急ガル、程ニ夏ノ始成就シテ、四月八日ニ室町殿ヲ當將軍ニ讓與有リテ、北山ニ御移徙、ソレヨリ天下ノ奇物ヲ集メラレケレバ、古代ノ畫圖器物ヲ集メ、又ハ新シキヲ用ヰラレ、後代ノ見物ニ殘サレント巧ミ作リケレバ、日本ノ器物ハ此ノ代ヲ以テ後世ノ手本トセリト。義滿薙髮シテ天山道義ト號ス。斯波義將以下公卿諸將ニ至ルマテ爭ヒテ薙髮ス。畠山基國管領タリ、而シテ大小ノ政事ハ悉北山ニ決ス。因リテ義滿ノ政事ヲ呼ビテ北山殿ト稱ス。時ニ尊氏ノ功臣等皆相競ヒテ豪華ヲ極メ、鎌倉武士質素儉約ノ美風ハ既ニ地ヲ掃ヘリ。大内義弘功ヲ恃ミテ叛キ、九州ノ兵ヲ帥ヰテ和泉ノ堺ニ據リシカド、利アラズシテ戰死セリ。是ニ於テ畠山氏ヲシテ紀州ヲ管セシメ、細川氏ヲシテ泉州ヲ管セシム。而シテ斯波氏ハ越前、尾張及遠江ヲ管ス。之ヲ當時ノ三管領ト稱ス。

○五節 義滿朝憲ヲ紊ル 義滿心既ニ驕リ、常ニ遊覽ヲ事トシ、伊勢、大和、兵庫

義滿歸國ヲ行ハズ

若狹等ヲ巡遊ス。天皇ノ生母通陽門院薨ズルニ及ビテ諒闇ヲ行ハズ、己ノ妻日野氏ヲシテ入内セシメ、以テ准母ト爲シ、北山院ノ號ヲ進ム。又天皇ニ北山莊ノ行幸ヲ勸メ、駐蹕セシメ奉ルコト二十日。公卿ト詩歌管絃蹴鞠ノ遊ヲ爲シ、舞童猿舞、白拍子等ヲ延覽シ、盛ニ燕會ヲ爲シタリ。

義滿歸國ヲ行ハズ

是ヨリ先義詮ノ時、我が西南ノ民屢支那ニ寇セリ。元朝高麗ヲ媒トシテ使ヲ我ニ遣シ、其ノ橫暴ヲ制セシムルヲ請ヒキ。而シテ明朝ニ至リテ猶使節ノ往來アリ。時ニ義滿華奢ヲ事トシタルヲ以テ用度窮乏シ、頃ニ段錢ヲ課シタレドモ尙足ラザリシカバ、自臣ト稱シテ明ニ事ヘ、刀劍珍器ヲ送リテ明ノ錢ヲ求メ、以テ用度ヲ給セリ。徳川氏ノ世ニ至ルマデ專通用シタリシ永樂通寶即是ナリ。此ノ後數代ノ將軍相繼ギテ明ヨリ日本國王ノ封冊ヲ受ケ、日本國王臣某ト稱シテ彼ニ通シタリキ。義滿明使ニ接スルトキハ、明服ヲ着シ、明興ニ乘リ、明人ヲシテ昇カシメタリト云フ。

義滿ニ太上皇ノ號ヲ賜ル

應永十五年、義滿薨ス。朝廷之ニ太上天皇ノ號ヲ贈ル。朝憲ノ紊亂實ニ是ヨリ甚シクハナシ。而シテ關白以下公卿ノ卑屈其ノ極ニ達シ、朝權ヲ損害シテ天下ニ

精光天皇

寸功アルコト能ハザリシハ、此ノ時ニ於テ既ニ明白ナリキ。

○六稱光天皇及後花園天皇 後小松天皇日野資國ノ女ヲ納レテ實仁親王ヲ生ミ給ヒ、皇太子ニ立テ給ハズシテ直ニ位ヲ讓リ給ヘリ。之ヲ稱光天皇トス。是ヨリ後ハ立坊ノ儀ヲ行ハズ、稱シテ儲君ト曰ヒキ。上皇院政ヲ聽キ、猶應

義滿小番ヲ置キ給フ

永ノ號ヲ用非給フ。日野氏ノ兄弟父子遞院ノ執權トナリ、將軍義持院ノ執事ヲ襲フ。廣橋兼宣信任セラレ、特ニ大臣ニ准ズ。將軍義持皇家ニ親ミ、禁闕ニ出入スルコト一家ノ如シ。義持兼宣等ト宴飲シ、往々宿醉シテ朝參セズ、威儀頽蕩セリ。上皇嚴格ニシテ舊規ヲ再興シ給ヒシカドモ、天皇ハ長クテ荒浴ニ坐ス。因リテ始メテ禁裏小番ヲ置キ給フ。天皇終ニ狂疾ヲ發シ、崩ヲ給ヒテ嗣子坐サズ。上皇位ヲ南朝ノ系統ニ傳フルコトヲ欲シ給ハズ。因リテ崇光天皇ノ皇子榮仁親王ノ子貞成王ノ長子彦仁王ヲ伏見ヨリ召シテ猶子トシ、位ニ即カシメ給フ。之ヲ後花園天皇トス。二條持基攝政タルコト五年ナリキ。永享五年紀元二千九百一十三年上皇崩御ス。上皇踐祚ノ後、十一年ニシテ南北合一シ、爾後四十一年ノ間專政ヲ行ヒ給ヘリ。初メ南北合一ノ約成ルニ當リ、兩統迭立ヲ以テ條件トス。是ヲ以テ

後花園天皇

南朝ノ遺臣
興復ヲ圖ル

大覺寺ノ統
斷絶ス

後小松天皇ハ位ヲ後龜山上皇ノ皇子ニ傳ヘ給フベカリシニ、之ヲ措キテ己ガ皇子ヲ立テ給ヒシヨリ、南朝ノ遺臣不平ナリ。而シテ稱光天皇崩御シ給ヒテ嗣子坐シマサザリシカバ、南朝ノ遺臣ハ此ノ度コソ後龜山ノ皇子小倉宮立チ給フベクレト思ヒシニ、後花園天皇立チ給ヒシヲ以テ、不平ニ堪ヘズ、兵ヲ十津川、河内、紀伊等ニ起シテ南朝ノ再興ヲ謀リ、其ノ皇胤ヲ奉マテ神器ヲ奪ヒ奉レリ。其ノ後ナホ興復ヲ圖ル者アリシカドモ皆微ニシテ敗ラレ、大覺寺ノ統終ニ斷絶シ、持明院ノ流獨皇位ヲ承繼シ給ヘリ。

(六七〇)

第六十七章 足利氏ノ制度

○一官職 足利氏ノ制度ハ義滿ニ至リテ備ハレリ。南朝紀傳ニ曰ハク、相國

三職七頭

武家ノ三職七頭ヲ定ム。朝廷ノ五攝家七清花ニ准ズ。三職ハ斯波、細川、畠山三管

四職

領タリ。執事別當七頭ハ山名、一色、土岐、赤松、京極、上杉、伊勢ナリ。其ノ中ニ山名、一色、赤

國持衆

松、京極ハ都ノ奉行トス。別當四職ナリ。奏者ハ伊勢、守貞行ナリ。又武田、小笠原二

評定衆

人弓馬ノ禮式ノ奉行ナリ。又兩吉良、今川、澁川武者頭トス。山名、一色、下細川、

能登ノ畠山、越後ノ上杉、赤松、大内、京極、六角、土岐、武田、仁木、富樫ヲ國持衆ト曰フ、

共ニ侍所ノ所司トナリ、又評定衆トナル。其ノ政務ハ鎌倉ノ議法ニ依リ、將軍議

長トナリテ管領、評定衆ト議決ス。評定衆ハ二十四員ナリ。國持ノ外ニ攝津、二

階堂、波多野、町野、太田、齊藤、飯尾、諏訪、松田等鎌倉以來ノ世職家ヲ以テ、其ノ員ニ

充テ引付衆ト稱ス。町野、太田ハ迭、問注所ノ別當タリ。政所ノ執事ハ、義滿ノ

時ヨリ乳夫伊勢貞繼ヲ以テ二階堂氏ニ代ヘ、其ノ世職トナシ、錢穀租稅ヲ掌ラ

シメキ。侍所ハ兩京ノ獄訟警察ヲ掌リ、或ハ其ノ守護ヲ兼ヌ。大名ノ強大ナル

引衆
問注所別當
政所執事
侍所所司

三十六奉行

者ニ非ザルトキハ侍所所司ノ任ニ堪ヘズ。後ニハ所司自事ニ當ラズ、所司代ヲシテ代理セシメキ。因リテ所司代モ亦重任トナレリ。其ノ他證人奉行ハ聽訟ニ陪審ヲナシ、唐船奉行ハ外國貿易ヲ管シ、寺社奉行、恩賞奉行等總ベテ三十六奉行アリキ。一色ハ吉良氏三河ノ故封ヲ襲ギ、昇殿ヲ聽サレ、後ニ西條東條ニ分レ、禮遇最厚シ。澁川、石橋之ニ次ギ、今川ハ稍下ル。並ニ管領ニ匹セリ。義滿、管領國持ノ邸ニ臨ム。是ノ後相沿ヒテ例トナリ、毎年正月日ヲトシ、將軍、三管領及赤松、山名、京極ノ邸ニ臨ミ、椀飯ノ饗ヲ受ク。其ノ費ハ之ヲ諸國ニ課シ、國錢ニ准ズ。武家ノ大饗禮タリ。此ノ六氏及一色、六角、下細川其ノ席ニ陪ス。因リテ相伴衆ト稱ス。其ノ下ニ供衆、詰衆、番頭衆、部屋衆、外機衆等アリ。管領家ノ被官ハ斯波家ニ甲斐、織田、二宮氏アリ。畠山家ニ遊佐、神保、甲斐、莊氏アリ。細川家ニ香川、安富、内藤、藥師寺等アリ。皆大族ニシテ國務ヲ宰制シ、幕政ニ與ル。將軍其ノ邸ニ臨ムトキ、之ヲオトナシキ被官衆ト稱シ、優禮ヲ受ク。國持衆ノ被官モ之ニ准ズル者アリ。諸大名ハ國持ニ因リテ將軍ニ達ス。關東四國ハ細川、信越、加ハ畠山、斐甲、駿ハ山名九州ハ探題ヨリ通達ス。探題衰ヘテ大内氏之ニ代ル。義教ノ時ニ至

(六七八)

椀飯

相伴衆

管領家ノ被官

オトナシキ被官衆

諸國ノ守護

リ諸國ノ守護二十二入アリ。其ノ中三國以上ヲ兼ヌル者七人アリ。南朝置ク所ノ國司ハ大抵皆滅ビ、合一ノ後ハ唯伊勢ノ北畠氏存スルノミナリキ。國史

○二 節 財政 當時諸國ハ皆武人ノ所轄ニ歸シ、供御田、公卿社寺ノ莊田ハ、半濟借用以來沿習シテ例ヲナシ、守護ヨリ其ノ租ヲ徵シ、事定マル後ニ幕府ヨリ改

公卿社寺ノ領

將軍家ノ費用

政所ノ用度

メテ社寺領ノ課役ヲ免シ、或ハ守護不入ノ地ヲ定メタリ。公卿ノ封邑モ大ニ減シ、社寺モ亦衰ヘ、其ノ收入ハ己ニ舊時ノ饒富ナルガ如クナラザリキ。將軍ノ食邑トシテ諸國ニ料所ト稱スルモノアリ。或ハ料國ヲ置ク。猶古ノ朝廷ニ國領國衙アリシガ如シ、然レドモ甚多カラズ。而シテ將軍家ノ費用ハ之ヲ諸國ニ賦課シタリ。朝廷又ハ將軍家ニ大儀興造アル毎ニハ臨時段錢ヲ課シ、又天役、國役等種々ノ名目アリキ。政所ノ用度ハ月ニ六十貫ヲ定額トシ、毎月ニ商定シタリ。京師近江ニ土倉酒戶稅ヲ課シテ此等ノ政費ニ充テ、或ハ臨時ニ地口錢、棟別錢ヲ課賦セリ。津口要衝地ノ關稅權ハ大抵之ヲ社寺ニ頒與シタルニ因リ、社寺其ノ利ニ慣レテ類ニ新關ヲ設ケ行旅ヨリ抽稅シテ祠堂ヲ修造セシカバ、人民ノ慨嘆言フベカラズ。遂ニ令ヲ下シテ之ヲ禁止シタリキ。國史

足利氏ノ氏神

三寶院

北野天神ヲ崇信ス

鐵涌尤禪教ヲ信ス
鹿苑院主幕府參謀ノ僧トナル

(六八〇)

○節社寺 足利氏ハ八幡宮ヲ氏神トシ、崇敬甚厚シ。敷石清水ニ詣拜シ、別當田中融清ヲ以テ其ノ神主トス。融清奢侈ヲ極メ、一棟百坪ノ檜皮屋ヲ造リ、金銀錦繡ヲ飾リ、壯麗人目ヲ眩耀セリ。三寶院ハ六條八幡宮及丹波ノ篠村ノ八幡宮ヲ管スル職ナリ。篠村八幡宮ハ尊氏官軍トナリシ時祈誓セシ所ナルヲ以テ、代々ノ敬信特ニ深シ。義滿ニ至リ今小路師冬ノ子滿濟ヲ猶子トシテ三寶院ニ住セシメ、段錢ヲ課シテ六條ノ祠ヲ修メ、爾後毎歲正月先六條ノ祠ニ詣拜スルヲ例トシシ、鎌倉鶴岡祠ニ比シタリ。又北野天神ヲ崇信シ、東京北二條大路ノ南五百六十餘丁ヲノ廻稅ヲ付シテ、修繕ニ資セリ。義滿亦深ク佛教ニ歸依シ、奈良叡山ニ詣テ戒ヲ受ク、東寺及延曆寺ノ大講堂、興福寺ノ金堂、皆段錢ヲ課シテ改造シ、流ミテ供養ヲ修ム。尤禪教ヲ信シ、疎石ノ門弟明應、中津等ヲ延キテ鹿苑院ニ居ラシメ、常ニ法ヲ問ヒ、且機務ヲ諮詢ス。是ヨリ鹿苑院主ハ幕府參謀ノ僧トナレリ。南禪寺ニ名僧アリ、靈見ト稱ス。後住持職ヲ辭シ、鬚髮剪ラズ、敝衣ヲ穿テ野ニ耕ス。義滿往キテ訪フコト、虛月ナカリキ。靈見北山莊ニ至ル。義滿大ニ喜ビ、金襴ノ袈裟ヲ取リテ之ニ衣セ、其ノ袈裟ヲ取リテ自衣ル。又同舟シテ西芳精舎ノ

願僧ヲ禮遇ス

京師ノ五山

五山ノ僧徒碩學尤能多シ

池ニ浮ビ、其ノ履ヲ執リテ舟ニ納レタリ。義滿威勢至尊ヲ歷ス、而シテ禪僧ニ屈スルコト此ノ如シ。初メ北條氏大ニ禪教ニ歸依シ、鎌倉ニ建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙ノ五寺ヲ建テシヨリ、足利氏ニ至リ京師ノ禪寺ニ建仁、東福、南禪、天龍ノ四寺アリ。南北合一以前義滿又相國寺ヲ建テタリ。之ヲ京師ノ五山トス。合一ノ後ニ相國寺燒クヌ。中津勸メテ再建シ、諸國ニ段錢ヲ課シ、木石ヲ獻セシメ、七層塔ヲ起ス。高サ三百六十尺、天下ノ壯觀ヲ極ム。南北ノ僧千人ヲ會シ、自灌ミテ塔供養ヲ修メ、上皇ノ御幸ニ擬セリ。是ノ時ニ當リ、結紳・文學ハ已ニ衰ヘ、唯五山ノ僧徒ノミ明國ニ往來シ、碩學才能ノ徒多ク輩出シ、其文章書畫皆宋ヲ學ビ、爲ニ本邦ノ美術ニ一大變動ヲ來シタリシコトハ之ヲ下文ニ述ブルガ如シ。國史

第六十八章 室町時代ノ文藝美術

○一文學 足利幕府ハ素ヨリ武人ノ集合ナリシヲ以テ、文事ヲ修メテ以テ政令ノ根據ト爲スコトナク、若政治ニ於テ文學ノ必要アルトキハ、之ヲ公卿及僧侶ニ一任シタリ。然レドモ當時ノ公卿中、其ノ和歌ヲ善クスル者ハ多カリシカドモ、漢學ニ通ズ、者甚少ク、諸家ニ傳ハル隋唐ノ學風ハ、素讀ノミニ止マリテ、義理ノ活用アラザリキ。之ニ反シテ僧侶ハ、大ニ漢學ヲ修メ、就中五山ノ僧徒ノ如キハ、程朱ノ經說ヲ傳ヘテ大ニ宋學ヲ首唱シタリ。地方ニ於テモ學問ハ全ク僧侶ノ手ニ歸シ、平人ニハ能ク自己ノ姓名ヲ記スル者スラ希ナリキ。然レドモ夫ノ金澤文庫ト足利學校トハ此ノ時代ノ遺物ナルコトヲ忘ルベカラス。金澤文庫ハ武州金澤ニ在リ、トモ北條顯時ノ創設ニ係ル。北條九代肥ニ曰ハク、北條相摸、守基時、同修理、大夫貞顯執權ト成リテ、連署セラル。中義時ノ五男ニ五郎實泰ト云ヒシ人アリ。後ニ龜谷殿ト稱シテ、温良慈仁ノ聞ニアリ。其ノ子越後、守實時ハ金澤ニ居住ス。後ニ稱名寺トゾ號シケル。其ノ子越後、守顯

文學僧徒ニ歸ス

金澤文庫

上杉憲實金澤文庫ヲ修治ス
足利學校

時ヨリ金澤ヲ家號トシ、稱名寺ノ内ニ文庫ヲ立テ、和漢ノ群書ヲ集メラレ、内外兩典諸史百家醫陰神歌、世ニアルホドノ書典ニハ殘ル所ナシ。金澤文庫トイフ印ヲコレラヘ、儒書ニハ黑印、佛書ニハ朱印、卷毎ニ押シタリ。讀書講學盛ミアル輩ハ、貴賤道俗立テ籠リテ學文ヲ勤メタリ。金澤ノ學校トテ舊跡今モ殘リタリ。越後、守顯時ハ文武ノ學ヲ嗜ミテ、書典ノ癖トゾナリニケル。其ノ子貞顯本ヨリ學業ノツトテ怠ラズ。作文詩章ニハ當時ニ名ヲ得シ人ナリケレバ、執權ノ職ニ居シテモ耻カシカラズトゾ聞エケル。ト。當時鎌倉幕府ノ末路ナリシカドモ、頗盛大ニ構ヘタリト見ユ。後屢、兵火ニ罹リシニ、足利氏ノ時ニ至リ、上杉憲實學ヲ好ミ、之レヲ修治シタリ。憲實又下野ノ國學ノ殘レルヲ再興シテ多ク書籍ヲ寄附シ、學僧ヲ聘シテ教授セシメキ。所謂足利學校是ナリ。鎌倉大草紙ニ曰ハク、「此ノ足利ノ學校ハ、上代承和六年ニ小野、蘆上野ノ國司タリシ時、建立ノ所。同九年、蘆陸奥、守ニナリテ下向ノ時、此ノ所ニ學校ヲ建テタル由、其ノ舊跡今モ殘リケルヲ、應仁元年、長尾景久ガ沙汰トシテ、政府ヨリ今ノ所ニ移シテ建立シケルト。」

○二遊伎

尊氏建武式目ヲ定メ娑婆羅淫蕩博奕及茶會連歌會ノ賭ヲ禁マ、無盡錢土倉ノ重稅ヲ蠲キテ金錢ヲ融通シタリ。娑婆羅ハ梵語ナリ、錦繡金銀ヲ以テ風流服飾ヲ競フヲ云フ。其ノ後貴紳富民ノ奢ハ減ズルヲナクシテ、貸借息利ノ弊ノミ増長セリ。義滿以來京師恬熙ニ復シ、諸大名邸第ヲ連テ貨財ヲ散シ、豪華年ヲ逐ヒテ長ク、商賈因リテ殷富ヲ復ス。幕府ハ土倉酒戶ニ稅ヲ課シテ用度ヲ贖シ、以テ其ノ驕奢ヲ遂ク。初メ尊氏ノ時ヨリ、猿樂大ニ行ハル。奈良、叡山、伊勢、住吉、醍醐ノ諸大社寺皆之ヲ神事ニ用キ、已ニ式例トナレリ。是ノ時男色亦盛ニ行ハル。童男ノ諸寺喝食トナル者ハ眉ヲ剃リ粉ヲ傅ク、女装ヲナシテ僧ニ給仕ス。義滿以來少年ヲ愛ス。近習多ク容色ヲ以テ嬖セラレキ。義滿奈良ニ往キ、觀世又三郎ノ能藝優ニシテ、妓美ナルヲ愛シ、童坊トナシテ嬖幸ス。是ニ於テ諸將皆其ノ藝ヲ習ヒ、田樂ト共ニ武家ノ式樂トナレリ。其ノ他平家、白拍子等ノ伎藝盛ニ上下ニ行ハレ、仙洞ニ平家、猿樂ヲ延覽シ、清涼殿ニ猿樂舞臺ヲ建ツルニ至レリ。應永二十八年疾疫饑饉シ、京師ノ饑孳ハ車ヲ以テ運ビ、積ミテ丘山ノ如シ。幕府賑救令ヲ發シ、諸大名及ヒ天龍寺、相國寺ヲシテ食ヲ施サシメ、

猿樂 男色

平家白拍子

足別義持遊宴ニ耽ル

如雲宋風ノ流ヲ弘ム 周文

小栗宗丹

諸大名ハ五條河原ニ於テ饑民ニ施行ス、而シテ義持ハ河原ニ勸進猿樂ヲ興行シ、妻日野氏ハ熊野巡拜ヲナシ、鹵簿ヲ飾リ、道路花ノ如シ。明年又饑ニ、關東地震シ、斗米値一貫文、八幡莊ノ民他郷ヨリ米ヲ占買セラレ、新座ノ莊ヨリ雜物ヲ包攬セラレ、石清水ノ神人藥師堂ニ據リテ嗽訴ス。斯波、島山ノ二將兵ヲ勸カシテ、纒ニ鎮定スルヲ得タリ。祇園社ハ別路ヨリ米ヲ買ヒ、北野社ハ酒戶ノ私造麴ヲ禁マ、以テ近州ノ米價ヲ低落ス。大津坂本ノ馬借ハ業ヲ失ヒ、京師ニ亂入ス。而シテ義持ハ諸國ヨリ相撲ヲ徵シテ遊宴ス。京人落首ヲ作リテ之ヲ誇リキ。國史

○三美術

當時宋朝文物ノ影響ハ最著ク、美術ノ上ニ顯レタリ。僧如拙ト云フモノアリ。或ハ西國ノ人ナリト云ヒ、或ハ明人ナリト云フ。應安年間ニ京師相國寺ニ寓シ、宋風ノ畫ヲ弘ム。蓋南宗牧溪ノ風ナリ。其ノ門下ニ周文アリ。宗丹、眞能、雪舟、元信皆其ノ流ヲ汲ムモノナリ。周文ハ春育ト稱ス。何處ノ人ナルヲ知ラズ。相國寺ニ在リテ如拙ヲ師トシ、直ニ宋人ヲ追ヒ、出藍ノ名アリ。海内ノ畫人皆之ヲ宗トス。又足利氏ノ家臣ニ小栗宗丹アリ。後蓬髮シテ相國寺ニ居リ、周文ヲ師トシ、又牧溪ヲ慕ヒ、自溪ト號ス。山水人物皆神妙ヲ極ム。應永中ノ人ナリ。

其ノ子宗栗亦畫ヲ善クス。僧明兆モ亦應永中ノ人ナリ。吉山ト號ス。又破草鞋ノ號アリ。東福寺ノ殿主トナル。故ニ又兆殿主ノ稱アリ。嘗テ釋迦涅槃ノ圖ヲ作ル。猫常ニ其ノ側ニ來レリ。明兆戲レテ曰ハク、古人涅槃ノ圖ニ百獸咸具ル。然レド獨汝ヲ見ズ。今我汝ノ爲ニ一筆ヲ添ヘント。乃之ヲ寫ス。後猫再來ラザリキト云フ。眞能ハ通稱ヲ能阿彌ト云フ。平安ノ人ナリ。將軍義持ニ仕ヘテ茶頭トナリ。古蹟ノ鑑定ヲ善クス。世人其ノ題識ヲ以テ據ト爲ス。眞能周文ヲ師トシ。山水人物花鳥ニ妙ナリ。頗宋人ノ風致アリ。又狂畫ヲ善クス。其ノ子眞藝阿彌ト稱シ。眞藝ノ子眞相、相阿彌ト稱ス。將軍義政ニ事ヘ、父子相繼キテ茶頭トナリ。亦山水人物花鳥ニ名アリ。世ニ妙手ト稱セラル。秀文ハ明人ナリ。歸化シテ越前ノ朝倉家ニ寄寓シ、曾我氏ノ贅婿トナル。因リテ其ノ姓ヲ稱ス。秀文宋人ノ畫法ヲ究メ、別ニ一格ヲ立テタリ。

雪舟諱ハ等揚、又備深齊ト稱ス。備中赤濱ノ人ナリ。天性畫ヲ巧ニス。如拙周文ヲ師トシ、其ノ法ヲ得テ更ニ新意ヲ出ダセリ。十二三歳ノ比其ノ父携ヘテ寶福寺ニ投テ、一僧ノ弟子トス。雪舟常ニ繪畫ヲ事トシ、經卷ヲ手ニセズ。師僧大ニ怒リ

之ヲ堂柱ニ縛ス。日漸暮ニ及ベルトキ、師僧之ヲ哀ミ、自堂上ニ至リ、縛索ヲ解カントス。時ニ雪舟ノ膝下ニ鼠アリ。師僧大ニ驚キ、其ノ雪舟ヲ傷ケンコトヲ恐レテ急ニ之ヲ視ルニ、雪舟終日愁苦セル所ノ淚痕堂ニ滿ツルナリ。雪舟自足ノ大母指ヲ以テ鼠ヲ板敷ニ畫ク。其勢恰モ生キタル鼠ノ奔走セルガ如シ。師僧大ニ其ノ妙ニ服シ。是ヨリ、後畫クコトヲ戒メザリキ。寛正年中海ニ航シテ明ニ入り、當時能畫ノ人ヲ問フ。明人曰ハク、能畫其ノ人ニ乏シカラズ。就中李氏、張氏ハ一雙ノ高手タリト。雪舟其ノ畫ク所ヲ見テ曰ハク、我遠ク明國ニ遊ブハ、畫師ヲ求ムルニアリ。今二氏ノ跡ヲ見ルニ、學ブニ足ラズ。明國ノ中師トスベキ人ナシ。唯此ノ國名勝ノ地山川艸木コレ我ガ師ナリ。然ルトキハ師ハ我ニ在リテ人ニアラズ。豈他ニ求メンヤト。爾來勉勵怠ラズ。遂ニ其ノ妙ヲ得タリ。明ノ君臣共ニ其ノ美ヲ稱ス。世ニ傳フ。雪舟畫カント欲スルトキハ、先酒ヲ汲ミ茶ヲ喫シテ後、洞窟數聲ヲ吹キ、或ハ時ヲ吟テ歌ヲ唱ヘ、笑座盤薄筆ヲ執ルニ及ビテ、意氣揚々トシテ龍ノ水ヲ得ルガ如クナリキト。

狩野正信ハ義政ノ近臣ナリ。如拙ノ門ニ入り、別ニ一家ヲナシ、其ノ門葉甚廣シ

土佐家
彫刻師
陶器師
刀劍鑑定師
時給

正信ノ子ニ元信アリ。周文等ニ學ヒテ狩野家第一ノ名手トナル。後法眼ノ僧官ニ叙セラレシヲ以テ之ヲ古法眼ト云ヒ、其ノ子孫代々法眼トナル例トナレリ。元信ガ妻ノ父ヲ土佐光信ト云フ。巨勢流ノ畫師春日光基ノ後ナリ。義政時代ニ於テ狩野家ノ支那風ニ對シ、別ニ日本風ノ畫法ヲ開キ、土佐家ヲ興セリ。彫刻師後藤祐乘、陶器師祥瑞五郎大夫、刀劍鑑定師大阿彌等并ニ當時ノ名家ナリ。而シテ時給ノ術モ亦大ニ進歩シタリキ。

第六十九章 足利氏ノ末世

義持將軍トナル

義量將軍トナル

義持ノ政

義教將軍トナル
後花園天皇

○一節 義持、義量、義教 應永元年和元二千五百十四年義持九歳ニシテ將軍ト爲リ。左近衛中將ニ任セラル。後參議權中納言權大納言ヲ經テ右大將ヲ兼ヌ。十五年義滿薨セシ後政事ヲ親シ、同年七月内大臣ト爲リ、三條坊門ノ第ニ移ル。十九年右大將ヲ辭シテ院ノ執事トナリ、兵仗ヲ賜ハル。二十六年内大臣ヲ辭シ、三十年將軍ノ職ヲ子義量ニ讓ル。義量參議ニ拜セラレ、在職二年ニシテ薨シ、嗣子ナシ。義持因リテ再任ス。義持ノ政ハ無者ヲ主トシ、唯京師ノ昇平ヲ保ツコトヲ勉メタリ。時ニ公武安逸ヲ貪リ、淫酒ヲ事トセリ。正長元年和元二千五百十八年義持病アリ。近臣ヲシテ繼嗣ヲ議セシム。或ハ連枝ノ僧トナレルヲ選俗セシメント議スル者アリ。或ハ曾テ將軍ト父子ノ約ヲ爲シタル足利持氏滿兼ヲ鎌倉ヨリ迎ヘント論ズル者アリ。衆議決セズ。因リテ島山氏ヲシテ石清水ノ神前ニトセシメ、義持ノ弟僧義圓ヲ還俗セシメテ職ヲ繼ガシム。義圓名ヲ義宣ト改ム。後又義教ト更フ。時ニ後花園天皇ノ永享元年和元二千五百十九年ナリ。義教權大納言ヨリ累遷シテ左大

義教ノ政

臣ニ至リ、三條坊門ノ第ヨリ花御所ニ移ル。花御所ハ又花亭ト云フ。北小路室町ニ在リ。四年、義教東巡シテ富士山ヲ觀、飛鳥井雅世等ト和歌ヲ詠ズ。歸ルニ及ビテ淳和、獎學兩院ノ別當ニ補セラレ。牛車ヲ聽サレ、源氏長者トナル。義教剛毅果斷ニシテ才藝ニ長ク、不順ヲ制シテ大ニ幕府ノ威嚴ヲ展ベタリ。五年、後小松上皇崩御マシマシ、泉涌寺ニ火葬シ奉リヌ。

京師鎌倉ノ不和

○二關東ノ足利氏亡ブ 義持ノ時ヨリ京師鎌倉又不和ヲ生ズ。滿兼ノ子ヲ持氏トス。持氏曾テ將軍義持ト父子ノ約ヲ爲ス。義持ノ子義量薨マテ嗣子ナキヲ以テ、持氏鎌倉ヨリ入りテ將軍トナラシム。望ミシニ、義持ノ弟義教將軍トナリシカバ、持氏不滿ニ堪ヘズ、常ニ京師ノ亂ヲ希フ情アリキ。上杉憲實山内之ヲ諫メテ、持氏ト隙ヲ生ズ。永享十一年、持氏兵ヲ起シテ憲實ヲ攻ム。憲實救ヲ義教ニ求ム。義教憲實ヲ援ケテ、持氏ヲ伐ツ。持氏自殺ス。是ニ於テ復關東ノ足利氏ヲ立テズ、兩上杉氏ヲシテ相並ヒテ關東ノ管領タラシメキ。

兩上杉氏ヲシテ關東ノ管領タラシム

翌年、結城氏朝持氏ノ孤子春王安王ヲ輔ケ、持氏恩顧ノ將士ヲ集メ、下野ノ結城ニ據リテ再興ヲ謀ル。翌年、義教兩上杉氏ニ命マテ之ヲ伐タシム。氏朝敗績ス。

結城合戦

之ヲ結城合戦ト云フ。

○三赤松滿祐將軍義教ヲ弑ス 義教連年兵ヲ用井、伊勢ノ北畠氏ニ勝チテ南朝ノ餘黨ヲ抑ヘ、南都北嶺ヲ擊チテ僧兵ヲ挫キ、關東ヲ滅シ、鎮西ヲ制シ、四方強敵ナキニ至レリ。是ニ於テ更ニ自家ノ強臣ヲ除カントス。初メ尊氏

赤松

赤松則村ノ功最大ナルヲ以テ、攝津、因幡、播磨、美作備前ノ守護職ヲ其ノ三子ニ分チ授ク。長子則祐三州ノ守護ヲ領ス。則祐ノ子義則亦屢功ヲ立テ、封チ子滿祐ニ傳フ。滿祐將軍義持ト相善カラズ。義教將軍トナルニ及ビ、常ニ滿祐ノ人ト爲

赤松滿祐憤ヲ嘗フ

リテ惡ミ、其ノ體軀ノ短小ナルヲ嘲笑ス。滿祐憤ヲ嘗フ。義教滿祐ノ妹ヲ嬖シ、後其ノ旨ニ違フヲ以テ之ヲ殺ス。義教又滿祐ノ族貞村ヲ寵シ、滿祐ノ所領ヲ剝キテ之ニ與ヘントス。滿祐益怒ル。時ニ關東鎮平ニ歸シタルヲ以テ諸將交、義教ヲ讒ス。嘉吉元年紀元二千六月廿四日ハ、即赤松滿祐ガ將軍ヲ襲スベキ日ナリ。時ニ流言アリ。曰ハク、將軍今日御成ノ序ヲ以テ赤松ノ一家ヲ退治アルベシト。滿祐親族ト議シテ曰ハク、將軍ノ意中ニ存セザル所ハ、世人モ亦傳説スベカラズ。如カズ。將軍ノ首級ヲ賜ハリ、以テ安否ヲ定メ、乃僞リテ馬ヲ放チ、

滿將軍ヲ
試シ掃蕩ニ
據ル

義勝將軍ト
ナル

赤松氏亡ア

義政將軍ト
ナル

天下漸ク多
事ナリ

之ヲ捕フルニ托シテ諸門ヲ閉テ、力士ヲ縱チテ義政ヲ刺サシム。事不意ニ起リ、侍臣死傷多シ。滿祐火ヲ邸宅ニ放チ、七百餘騎ヲ以テ白晝、京師ヲ發シ、翌日本領播磨ニ歸着セリ。

(六九二)

○四節 義勝、義政

是ニ於テ細川持之義教ノ長子義勝ヲ奉シテ將軍ト爲ス。時ニ年八歳ナリ。朝廷義教ニ太政大臣ヲ贈ル。八月、山名持豐給旨ヲ請ヒテ滿祐ヲ討シ、其ノ族教之、教清、及細川持常、赤松貞村、武田信賢等ト兵五萬ニ將トシテ白旗城ヲ圍ム。九月、遂ニ之ヲ陷レ、滿祐ヲ斬ル。黨與悉平ク。乃播磨ヲ持豐ニ、美作ヲ教清ニ、備前ヲ教之ニ賜フ。三年、義勝薨マ、弟義成立ツ。生レテ八歳ナリ。享德元年、紀元二千名ヲ義政ト改ム。畠山持國、細川勝元ノ持氏ト遞管領トナル。義教、武鎮ノ計畫ヲ爲シ、中途ニシテ薨セシヲ以テ、義政ノ初年ヨリ天下漸多事ナリ。赤松則繁滿祐ノ弟ハ鎮西ニ在リ、少貳、大友等ト結託シテ、其ノ恢復ヲ計ル。關東ニハ持氏ノ黨アリ。南朝ノ遺臣モ亦起ル。京畿ニハ興福寺ノ衆徒兵ヲ構フ。加之、幕下ニハ畠山、斯波ノ諸家ニ家督ノ爭ヲ生マタリ。而シテ義政之ヲ統理スル力ナク、聲色ニ溺シテ政令度ナカリキ。

德政

○五節 德政及重課

古ニ德政ト稱セシハ、元天災地變戰爭等ノ爲ニ、人民ノ特ニ困窮セルニ當リ、仁恤ノ主義ニ基キ幕府ノ命ヲ以テ其ノ舊債ヲ一洗スル制ナリシカドモ、後終ニ甚シキ濫弊ニ陥リタリ。義政以後諸大名奢侈ノ爲ニ負債ヲ起シ、償却ノ道ナキトキハ則德政ノ令ヲ發セシヨリ、債主ハ不平ヲ極メ、貧民ハ時々幕府ニ迫リテ此ノ令ヲ發セシメンガ爲ニ、諸所ニ一揆ヲ起セリ。初メ幕府ハ京師ノ質商當時之ナ土ニ課稅シテ收入ノ一源トセシニ、德政ノ爲ニ其ノ額減セシニ因リ、更ニ京師ノ酒戶三百二十七戶ニ戶毎二貫八百文ヲ課シタリ。又造大神宮、土御門内裏ノ營繕及將軍邸宅ノ建築ノ爲ニ、諸國ニ段錢ヲ課シ、京師ニ棟別錢戶ヲ課シタリ。地方ノ社寺及大名モ關所ヲ設ケテ旅人ヨリ稅ヲ徵シ、上下競ヒテ人民ヲ苦メシヲ以テ、京師盜賊横行シテ富家ヲ劫シ、德政ヲ請願スル徒益、湧起セリ。

諸稅ヲ課ス

○六節 東山殿敷寄

此ノ時將軍家ノ權勢殆地ニ墜チシカドモ、義政ハ尙風流ノ遊興ニ耽リタリ。義政東山ニ隱退セントシ、山城ノ役夫ヲ起シテ別莊ヲ營ミ、柱壁戸牖ニ銀ヲ塗リ、之ヲ銀閣ト稱シ、北山ノ金閣ニ對ス。是ヨリ義政ヲ東山

銀閣ヲ起ス

東山殿

茶道大ニ弘
マシム

應仁記ノ記
事

(六九四)

殿ト云ヒ其ノ茶器宴具ノ上ニ表レタル當時ノ嗜好ヲ稱シテ東山時代ノ物ト云ヘリ。南都稱名寺ノ僧ニ珠光ト云フモノアリ。喫茶ノ會ヲ以テ貴賤上下ヲ分クザル一種風流ノ交際ヲ始ム。義政珠光ヲ東山ニ召シテ大ニ其ノ道ヲ贊助セリ。是ヨリ茶道大ニ世ニ弘マリ。之ヲ數寄ト云ヒ、茶室ヲ數寄屋ト云フ。至ル。數寄ハ嗜好ノ義ナリ。道耳、宗悟、紹陽、利休ノ輩相繼ギテ起リ、茶道ノ宗匠トナリヌ。香、插花、能、狂言モ亦此ノ時ヨリ盛ナリ。

○七 義政ノ癸政 應仁記ニ、義政ニ至リ政道ノ亂レタル形勢ヲ記シテ曰ハク、將軍天下ノ成敗ヲ管領ニ任セズ、唯御臺所香樹院春日局ナド云フ女房僧比丘尼ト、酒宴淫樂ノ紛レニ申沙汰セラレシカバ、今マテノ所領ヲモ最負ニ募リテ論人ニ由シ與ヘ、又賄賂ニ耽リテ訴人ニ理ヲ付ク、又奉行所ヨリ本主安堵ヲ賜ハレバ、御臺所ヨリ恩賞ニ行ハル。如此錯亂シテ畠山ノ兩家モ、去ル文安元年ヨリ今年マテ僅ニ二十四年ノ中ニ、兩家互ニ勘當赦免ヲ蒙ルコト三箇度ヅ、ナリ。依リテ京童ノ謫ニモ、勘當ニ科ナク、赦免ニ忠ナジト笑フ。又武衛家義隆義敏ヲ改動セラル、コトモ、二十年ノ内ニ二度ナリ。其ノ比近江、國鹽津住人熊

義政諫ヲ拒
ク

義政國書ヲ
極ム

谷ト云フ奉公ノ者、政道ノ正シカラザル事ヲ悲ミテ、密ニ諫言一紙ノ狀ヲ捧ク。將軍御覽マテ太ニ憤リ、諫ムル所ハ道ニ違スト雖、其ノ司ニ非ズシテ法ヲ行ヒ諫言ヲ納ル、條、狼藉是ニ過クベカラズ。史記ニ、其ノ人ニ非ズシテ其ノ官ニ居ル、是ヲ天事ヲ亂ルト云フ。彼其ノ最タリ、早ク所領ヲ沒收シテ其ノ身ヲ追ヒ出スベシト仰ヒ出サル云云。又曰ハク、亂前公武都鄙ノ憂苦ノ故ハ、將軍嘗テ人ノ費ニ乘ズル事ヲ知ラズ、飽クマデ心忒ニシテ仁政ヲ下サレズ。若五六年ノ間ニ一度有リシ御晴ヲサヘ、諸家由々敷大儀ゾカシ。然ルヲ五年ノ内ニ九箇度マテ執リ行ハル。先一番ニ將軍ノ大將拜賀、二番ニ寛正五年三月河原、猿樂、三番ニ同年七月ニ後土御門院御即位、四番ニ同六年三月花頂若王子大原野花見、會五番ニ同八月八幡上卿、六番ニ同年九月春日御社參、七番ニ同年十二月大嘗會、八番ニ文正元年ノ春伊勢御參宮、九番ニ花、御幸。サレバ花、御覽ノ綺羅ハ、百味ヲ以テ百菓ヲ作り、御相伴衆ノ筋ヲバ金ヲ以テ展ベ、御供衆ノ筋ハ沈ヲ以テ削リ、金ヲ以テ逆鱗口ヲカクル類ナリ。公家モ武家モ皆所領ヲ質ニ置キ、財寶ヲ沽却シテ是ヲ勤ム。是ヲ以テ諸國土民百姓等ニ課役ヲカク、段錢棟別ヲ色々ニ様ヲカ

謀殺ヲ案ク
ム人民ヲ苦

ヘテ譴責ノ意スレバ、國々ノ名主百姓ハ耕作ヲシ得ズ、田島ヲ捨テ、乞食ス。鹿苑院殿義ノ時ハ倉役ノ時ハ倉役實屋ニ課ス、四季ニカ、リケル。普廣院殿ノ時ハ倉役一年ニ十二ケ度ナリ。當將軍ノ御代トナリ、倉役ノ臨時繁ク掛リシカバ、大嘗會ノ有リシ霜月ニハ臨時九ケ度、臘月ニハ八ケ度ナリ。彼ノ借錢ヲ破ラントテ、前代未聞ノ德政ト云フ事ヲ、此ノ代ニ十三度マテ行ハレケルト。

成氏ヲ關東ノ主トス

○八關東ノ亂離 結城落城ノ後モ關東常ニ穩ナラズ。義政ノ時ニ至リ持氏ノ遺孤成氏トイフ者アリ。京師ニ走リ、義政ニ依レリ。時ニ越後ノ守護ニ上杉房定アリ。關東ノ諸將ト謀リ、義政ニ請ヒテ成氏ヲ奉マ關東ノ主トナシ、自之ヲ輔翼ス。時ニ寶徳元年紀元二千九百九年ナリ。是ヨリ先上杉憲實自家ノ滅亡ヲ招キタルヲ憂ヒテ、僧トナリ、諸國ニ行脚セシカバ、義政其ノ子憲忠山内ヲシテ父ノ職ヲ繼ガシメ、上杉顯房顯房ト共ニ成氏ノ執事トシタリ。此ノ如ク憲忠ヲシテ成氏ノ執事タラシメシハ、持氏憲實ノ仇怨ヲ醫セシノ意ナルベカリシカドモ、曾テ結城氏ニ與セシ輩ハ、上杉氏ノ下ニ屈スルヲ好マズ。成氏ヲ敬峻シ、父ノ讎トシテ憲忠ヲ殺サシメタリ。是ニ於テ憲忠ノ臣長尾昌賢等景仲憲忠ノ

成氏上杉憲忠ヲ殺ス

義政成氏ヲ討テシム

弟房顯ヲ立テ、上野、上總、越後ノ兵ヲ集メテ、成氏ト武藏ノ府中ニ戰フ。而シテ義政モ亦成氏ノ擅殺ヲ怒リ、上杉氏ノ請ニ依リテ成氏征討ノ命ヲ下シ、今川範忠ヲシテ上杉氏ヲ助ケシム。範忠ノ兵鎌倉ニ入り、其ノ邸第府庫社寺等ヲ焚キ盡ス。成氏敗レテ下總ニ奔リ、古河ニ居ル。之ヲ古河公方ト稱ス。千葉、小山、里見、佐竹、小田、結城、宇都、宮那須ノ八族古河ニ與シテ上杉氏ニ抗敵ス。之ヲ關東八將ト稱ス。

古河公方
關東八將

堀越御所

鎌倉ニテハ長尾景仲死シ、山内ノ上杉氏稍衰ヘテ、扇谷ノ上杉氏益盛ナリ。然レドモ孤獨ニシテ古河ノ軍ニ當ルニ足ラズ。長祿元年紀元二千九百十七年義政族ノ城主澁川義鏡ニ命ヲテ成氏ヲ伐タシム。然ルニ關東ノ人心多ク古河ニ向ヒ、容易ニ手ヲ下ス可カラズ。義鏡乃義政ノ弟政知ヲ迎ヘテ關東ノ主ト爲ス。山内扇谷ノ兩上杉氏管領トナリ、政知ヲ奉マテ伊豆ノ堀越ニ置ク。之ヲ堀越御所ト云フ。上杉持朝河越ニ城キ、扇谷上杉ノ臣太田資長入道江戶ニ城キ、資長ノ父資清巖付ニ城キ、三面古河ニ備フ。是ヨリ關東大ニ亂レ、諸將城郭ヲ搆ヘテ互ニ征戰ヲ事トセリ。此ノ如ク京都將軍ノ權勢ハ、已ニ關東ニ行ハレザリシヲ

關東大ニ亂

以テ、八州ハ諸國ニ先ダチテ群雄割據ノ地トナレリ

第七十章 應仁ノ亂

○一節 應仁ノ亂原 應仁ノ亂ハ足利氏一家ノ家督爭論ヨリ起レリ。而シテ遂ニ天下ノ大變トナリ。幕府一統ノ權破レテ。大名割據ノ近因トナリシモノナリ。故ニ其ノ顛末ヲ詳ニスルコト頗緊要ナリ。

細川勝元
山名宗全
此ノ時細川、畠山、斯波ノ三管領中、畠山氏ニハ政長、義就ノ家督爭論アリ。斯波氏ニハ義敏、義廉ノ家督爭論アリテ、兩氏共ニ權勢ヲ失ヒ、獨細川勝元ノミ尙權勢ヲ保チタリ。四職ノ中ニハ山名持豐入道シテ宗全ト號ス。幕府ノ樞要ニ居リ、其ノ勢細川氏ニ匹敵ス。勝元、義政ヲ相ク、畠山政長、斯波義敏ヲ立テ、義就、義廉ヲ斥ク。是ニ於テ義就、義廉等ハ宗全ニ依ラントスル勢アリキ。細川ト山名トハ元親戚ノ間ナラシカドモ、事ヲ以テ互ニ相怨恨シタリ。

細川山名相
怨恨ス
時ニ將軍家ニモ亦家督ノ爭起レリ。初メ義政子ナカリシヲ以テ、弟僧義尋ヲシテ職ヲ嗣ガシメントス。義尋輒ク應ゼズ。蓋其ノ後ニ至リテ變更アラシムコトヲ恐ルレバナリ。義政乃實子出生ストモ直ニ出家セシメ、決シテ家督ヲ變更セ

今出川御所

ザランコトヲ誓ヒ以テ其ノ同意ヲ得タリ。義尋還俗シテ名ヲ義親ト改ム之ヲ今出川御所ト稱ス。細川勝元執事トナレリ。後義政ノ妻富子義尙ヲ生ム。富子之ヲ出家セシムルニ忍ビズ。義政ノ心モ亦爲ニ動ク。乃富子ノ謀ヲ用キ山名宗全ニ依頼シテ義尋ヲ退ケンコトヲ謀レリ。宗全嘗テ勝元ト相恨ムヲ以テ直ニ此ノ依頼ニ應ジ。義尙ヲ擁立シテ權ヲ專ニセントス。乃義政ニ請ヒテ島山義就ヲ召還シ己ヲ助クシム。

勝元宗全兵ヲ集ム

洛中戰場トナルコト十一年

應仁元年紀元二千七百二十年正月宗全管領島山政長ヲ斥クテ義就ヲ立テ盡ク勝元ノ黨ヲ逐ハンコトヲ謀ル。是ニ於テ政長義就兵ヲ京師ニ構フ。義政令ヲ下シテ曰ハク。義就政長ハ各其ノ私兵ヲ以テ雌雄ヲ決スベシ。諸將相助クルコト勿レト。然レドモ宗全此ノ命ニ違ヒ。義就ヲ助ケテ政長ヲ走ラセタリ。勝元之ヲ怒リ。諸國ニ檄シテ兵ヲ集ムルコト十六萬人。而シテ宗全モ亦兵十一萬ヲ集ム。勝元將軍義政ヲ擁シテ幕府ノ東ニ陣シ。宗全幕府ノ西ニ陣ス。故ニ之ヲ東西ノ軍ト云フ。兩軍各、火ヲ洛中ニ放チ戰場ヲ作ル。是ニ於テ禁裡ヲ始メ、社寺邸宅悉灰燼トナリ、累代ノ圖書寶物皆烏有ニ歸セリ。此ノ後戰爭絶エザルコト十一

(700)

地方ノ瓦解

山賊記ノ記

治亂記ノ記

家譜ノ記

年。京師ノ大半ハ荒廢ニ屬シ、終ニ田畑トナレリ。故ニ今僅ニ古ノ左京ヲ殘セルノミ。

文明五年紀元二千七百三年宗全先死シ、勝元次ギテ死ス。然レドモ兩黨尙確執シテ兵ヲ解カズ。九年義親美濃ニ走リ、京師ノ兵始メテ散ズ。應仁ノ亂ヨリ後ハ幕府ノ權勢頓ニ地ニ墜チ、諸國ノ守護地領皆其ノ黨與ノ力ヲ恃ミテ將軍ノ令ヲ奉ゼズ。貢租ヲ輸サズ。互ニ機ヲ見テ他ノ境土ヲ併合セントスルニ至レリ。

○二應仁ノ亂ノ結果 應仁ノ亂ノ記事ハ多ク書冊ニ見エタリ。今左ニ

一二ヲ抄録セシ。山賊記ニ天皇再室町邸ニ幸シ亂ヲ避クサセ給ヒシコトヲ叙シテ曰ハク、八月また彼の亭へ御幸を申されしより、九重の内は、よその雲井となりはて、つはものゝ火のため、洛中はなかばばかり烏有の地とぞなりける。其の外東山西山まで、焼野の原のはるばると、殘る草木のかげも見えず。又治亂記ニ曰ハク、山名細川ノ合戰年々月々ナル故ニ、公家モ京都ノ住居ヲ得ズ、國々ニ落チ下リテ所縁ニツキヌ。大方此ノ時禁中方ハ滅シタル様ナリ。史微ニ引ク所ノ家譜ニ曰ハク、近年兵革止マズ、百官分散シ、一條關白兼、長南都ニ

餘居其ノ子教房兵庫ニ下向、其ノ孫房家土佐ニ下向、其ノ餘居ヲ索メ離群スル者猶多ク、本朝ノ舊記諸家ノ文書、此ノ兵亂ニ逢ヒテ燒亡紛失スル者勝ケテ數フ可カラザルナリ原書ト。

義尙將軍トナル

攝關治要

義植將軍トナル

○三義尙 文明五年、義政職ヲ義尙ニ讓リテ退隱ス。時ニ義尙年僅ニ九歳ナリ。長ズルニ及ビ、聰敏ニシテ學ヲ好ミ、父ノ驕逸ヲ矯メ、文武ノ業ヲ修メ、一條兼良ニ政治ノ要ヲ問フ。兼良樞密治要ト稱スル一書ヲ著シ、敬神尊佛以下凡八條ノ要旨ヲ説キ、政事ヲ親シ、威嚴ヲ以テ下ニ臨マンコトヲ勸ム。母細川勝元ノ子政元、義尙ノ執事タリ。時ニ一向宗ノ一揆諸國ニ蔓延シ、加能、越ノ擾亂最甚シク、近畿中ニハ、德政ノ徒類ニ蜂起セリ。又關東ニハ、兩上杉、北條、里見等ノ内亂アリ。中國、九州モ亦亂レヌ。義尙一統ノ權ヲ復センノ志アリ。親軍ヲ將井テ先近江ノ六角氏ヲ伐チ、延徳元年紀元二千四百十九年軍中ニ薨ス。時ニ年廿五、人皆之ヲ惜ム。遺命シテ義視ノ子義植ヲ立ツ。

○四節 義植、義澄

明年義政モ亦薨ズ。是ニ於テ義植政ヲ聽キ、權大納言葉室光忠ヲ信任ス。光忠貪婪ニシテ諸將ニ憎マル。時ニ管領畠山政長、同族義就ノ

義植周防ニ奔ル

政元義澄ヲ立テ、將軍トナス

義植職ニ復シ、大内義興管領トナル

子義豐ト兵ヲ構フ。義植臣下ノ家督爭論ニ干涉シ、親兵ヲ將井テ義豐ヲ伐ツ。細川政元、政長ト權ヲ爭ヒ相善カラザリシヲ以テ、暗ニ義豐ヲ助ク。京極、山名、一色等亦政元ニ黨シタリ。是ニ於テ義植ノ軍大ニ敗レ、政長自殺ス。義植越前ニ奔リ、近江ニ入り、終ニ周防ノ大内義興ニ依リテ再興ヲ謀レリ。政元、義政ノ姪義澄始メ義通ト云フ。ヲ立テ、將軍トシ、政治ノ實權ヲ握ル。而シテ細川氏モ亦家督爭論ノ爲ニ亡滅ヲ招カントシタリ。初メ政元子ナシ。關白政基ノ子澄之ヲ嗣子トシ、又同族ノ澄元、高國ヲ養子トス。時ニ政元ノ臣ニ藥師寺長忠、香西元良等アリ。澄元ノ傳三好之長ヲ忌ム。澄之モ亦政元ヲ怨ミ、乃共ニ謀リテ政元ヲ弑ス。而シテ澄之モ亦澄元等ノ爲ニ殺サレ、澄元終ニ政元ノ後ヲ受ク。然ルニ澄之ノ餘黨高國ヲ奉ツテ、義植ヲ周防ヨリ迎ヘ立テ、ソコトヲ謀レリ。是ニ於テ大内義興、義植ヲ奉ツ、畠山政長ノ子尙順等ノ軍ヲ卒ホテ京師ニ入り、義澄ヲ追ヒ、義植ヲシテ職ニ復セシメ、自管領トナル。時ニ永正五年紀元二千四百十八年ナリ。義興執政十一年ノ間ハ、政公平ニシテ幕府ノ威權振張ノ望アリシカド、資財欠乏シ、且出雲ノ守護尼子經久、周防ヲ侵シ、義興歸國シタルヲ以テ、其ノ事ヲ

義晴將軍ト
ナル

果サズ。細川高國代リテ管領トナリ、政ヲ擅ニス。義植高國ト隙アリ、而シテ高國
ヲ制スルカナシ。乃淡路ニ奔リ、後阿波ニ薨ズ。初メ義澄廢セラレテ後近江ニ
赴キ、六角氏ノ爲ニ破ラル。乃播磨ニ逃レ、其ノ子義晴ヲ赤松義村ニ托シ、義維ヲ
阿波ノ細川澄元ニ托ス。大永元年紀元二千八百一十一年高國義晴ヲ迎ヘテ將軍トス。

義晴阪本ニ
奔ル

○五幕府主無シ 時ニ阿波ノ三好氏、義晴ノ弟義維ヲ奉テ、細川澄元ノ子
晴元ヲ擁シテ、隙ヲ窺フ。高國柔仁ナリ、其ノ族尹賢及香西某ヲ重用ス。既ニシテ
尹賢、香西ヲ讒殺ス。香西ノ弟柳本賢治、三好氏ト結ビ、京師ニ入ル。義晴高國阪本
ニ奔リ、兵ヲ徵シテ京師ヲ争ヘドモ克タズ。是ノ時數年ノ間幕府ニ主ナク、土
寇囂起シ、盜賊横行ス。賢治ハ素管領ニ非サリシカドモ、幕府ノ名ヲ以テ號令セ
シカバ、京師ノ土民ハ猶其催促ニ應マタリ。賢治心漸驕リ、遂ニ暗殺セラレ、其ノ
黨解散セリ。是ニ於テ高國再細川晴元ト京師ヲ争フ。享祿四年紀元二千九百一十一年高
國敗死シ、晴元入りテ政ヲ執ル。老臣三好元長、從弟政長ト權ヲ争ヒ、畠山義高ト
結ビ、國ニ歸リテ義維ヲ擁ス。晴元本願寺ノ兵力ヲ借リテ、義高元長ヲ殺シ、又
日蓮宗ヲ誘ヒテ本願寺ヲ焚キ、義晴ト和ス。晴元仍政長ヲ信任ス。高國ノ黨復

管領ノ權三
好氏ニ移ル

丹波攝津ニ起ル。天文八年紀元二千九百一十九年元長ノ子三好長慶、高國ノ黨ト結ビ兵ヲ
舉グ。晴元、義晴ヲ奉テ再近江ニ奔ル。六角定頼兩黨ヲ和ス。此ノ後管領ノ實職
ハ全ク三好氏ニ移レリ。

義輝將軍ト
ナル

天文十五年、義晴職ヲ子義輝ニ傳フ。三好長慶復政長ト相攻ム。晴元政長ヲ援ケ
テ克タズ。復義輝ヲ奉テ近江ニ奔ル。是ニ於テ長慶入りテ幕政ヲ行ヒ、其ノ將
松永久秀執權ス。

管領細川氏
亡ブ
松永久秀義
輝ヲ弑シ義
榮ヲ立ツ

○六松永久秀ノ惡逆 永祿元年紀元二千九百一十八年將軍義輝、三好長慶ト隙ヲ
生マ、枋木谷ニ逃レ、管領細川晴元ト共ニ兵ヲ徵シテ京師ヲ争ヒ、後和ヲ講マテ
歸京ス。晴元長慶ノ爲ニ芥川城ニ幽セラレ、尋イテ卒ス。子幼弱ニシテ庇護ナシ
管領細川氏此ニ至リテ亡ブ。長慶細川氏ニ代リテ幕府ノ政ヲ執リ、七年ニシ
テ卒ス。松永久秀逆心ヲ起シ、主家ヲ襲ヒテ義輝ヲ弑シ、義維ノ子義榮ヲ阿波ヨ
リ迎ヘテ將軍ト爲シ、三好氏ニ代リテ幕政ヲ行ヘリ。

第五 戰國時代

(七〇六)

第七十一章 各地紛亂ノ形勢

後土御門天皇、後柏原天皇、後奈良天皇、後深草天皇、正親町天皇

下近上

戰國ノ中大ノ事ヲ知ルモ

○一節總説 應仁ノ兵亂ハ嘗ニ足利幕府ノ衰亡ヲ來シタルノミナラズ、全天下ヲシテ復理ス可カラザル紊亂ニ陥ラシメタリ。即應仁年中ヨリ、文明、長祿、建徳、明應、文龜、永正、大永、享祿、天文、弘治、永祿ニ涉リ、天皇ハ後土御門、後柏原、後奈良、正親町ノ四代ヲ經給ヒ、其ノ間凡百年ハ、主權歸着スル所ナク、社會秩序ノ變轉甚神速ニシテ、徳義亦大ニ亂レ、子トシテ親ヲ弑スル者、臣トシテ君ヲ害スル者、東西輩出シタリ。夫ノ松永久秀ノ故ナク、將軍ヲ襲ヒテ之ヲ弑セシガ如キハ、其ノ大逆天人ノ共ニ惡ム所ナリ。當時世人社會ノ或部分ニ現レタル逆勢ヲ呼ビテ下剋上ト云フ下ニ在ル者勢ニ乘マテ上ニ在ル者ヲ凌グ意ナリ。然レドモ二三ノ人士ハ此ノ紊亂ノ中ニ於テ、尙朝廷ノ尊ヲ知り、幕府ヲ助クルヲ以テ義トシ、百難ヲ排シテ上洛シ、天皇ヲ奉マシ、將軍ヲ挾ミテ四海ニ號令スルヲ以テ畢生ノ事業ト爲シタリ。是ゾ我が國史ノ最注意スベキ所ナル 今先朝廷ノ衰

運ヨリ始メテ各地ノ形勢ニ序述シ及バントス。

○二節朝廷ノ式微 應仁以後ノ歴史ヲ見テ最慨嘆ニ堪ヘザルハ、朝廷ノ式

微是ナリ。幕府ノ盛ナリシニ當リテハ、朝廷公事大禮ノ費用ハ、幕府ヨリ悉クテ獻ゼシカド、義政以後ニ至リ、將軍ヌラ救助ヲ明國ノ主ニ求ムル勢ナリシヲ以テ、朝廷ノ資ヲ供スルコト能ハズ。兵亂ノ後ハ公事大禮悉停止シ、文明七年正月ニ至リ、始メテ四方拜ノ式ヲ舉グ給フコトヲ得タリ。然レドモ元日ノ節會ハ尙行ハセラレザリキ。記長

天皇ノ葬禮ヲ行フベキ

明應九年紀元二千六百二十年後土御門天皇崩御マシマシトキ、葬禮ヲ行フベキ資ナシ佐々木高頼料ヲ獻マシ、始メテ泉涌寺ニ送り奉ルコトヲ得タリ。此ノ資トシテ高頼ニ桐菊御紋ト後光嚴院宸筆ノ三路秘抄トヲ賜ハリ、昇殿ヲ聽サシ旨、此ノ三畧ノ與書ニ見エタリ。史記足利治亂記ニ曰ハク、先帝在位ノ中ニ御位ヲ讓リ給ハシコトヲ思シ召シケレド、萬事御不如意ニテ、近臣ニ御衣ヲ下シ賜ハル程ノ御事モ成ラテバ、且夕思シ召シ悲ミ給フ。玉體ハ寶瓶ニ入レ奉ルマデニテ、御殿ノ黒戸ニ置キテ、近臣女官宿直ス。東宮時ニ黒戸ヘミユキ成リテ、十善ノ御身ニ

ハ貧禍ハ無キト白居易ガ作りシハ偽ナリト悲ミ給フ。又紹運録ト云ヘル書ニモ、用脚ナキニ依リ、四十餘日内裡黒戸ニ置キ奉ル。希代ノ事ナリトアリ。以テ當時ノ状態ヲ想ヒ奉ルベシ。

本願寺金ヲ
獻シ即位ノ
大禮行ハル
朝廷ノ衰微
極ル

後柏原天皇位ヲ嗣ギ給ヒシカドモ、用度ナカリシヲ以テ即位ノ禮ヲ行ヒ給フコト能ハズ、二十年ノ後ニ至リ、本願寺ノ僧光兼黄金一萬兩ヲ獻ゼシニ因リ、大永元年始メテ大禮ヲ行ハセ給ヒヌ。此ノ功ニ因リテ光兼ハ門跡ニ准セラレキト云フ。後奈良天皇ニ至リ、内大臣三條西實隆百方苦心シテ輔佐シ奉リシカドモ、將軍家ノ困弊ト共ニ朝廷ノ衰微ハ其ノ極度ニ達シ、諸方ノ豪族ニ使シテ數石ノ米、數兩ノ金ヲ得、纒ニ御膳ニ供スルコトヲ得タリ。享祿以後細川兩家ノ争亂ニ至リ、京師ハ再戰場トナリ、邸宅寺院多ク兵火ニ罹リ、公卿ハ妻子ヲ携ヘテ亂ヲ禁中ニ避ケ、内裏ノ垣垣破壊シ、三條橋上ヨリ内侍所ノ御燈光ヲ見ルコトヲ得ルニ至レリ。又紫宸殿前右近ノ橋ノ下ニ、市人茶店ヲ設ケテ煎茶ヲ賣リシモ此ノ頃ナリキ。公卿諸國ニ往キ豪族ニ説キテ即位ノ費ヲ獻ゼシメ大内、今川、北條、朝倉ヨリ數十萬匹ヲ得、天文五年ニ至リ、始メテ即位ノ禮ヲ行ヒ

和歌
ヲ人民ニ賜
フ

給ヘリ。先帝ノ時ヨリ宸筆ノ和歌ヲ人民ニ賜ヒ、其ノ謝禮ヲ以テ用度ヲ補ヒタリシカド、後奈良天皇ニ至リテハ殆一ノ商事トナリ、貴賤トナク謝料ノ格ニ照シ、錢ヲ包ミテ御簾ニ繫ケ、所望ノ歌ヲ配シオケバ則宸筆ヲ賜ヒタリキ。長シトモ畏キ極ミナラズヤ。

○節三 一向宗一揆

此ノ亂世ニ乘テ宗徒ノ争論モ亦盛ニ起リ、遂ニ干戈

ヲ動カスニ至レリ。彼ノ親鸞ノ開キタル念佛專修ノ宗門ハ、祖師ヲ葬リシ大谷ノ本願寺ヲ中心トシテ、常ニ天台宗ノ本據タル叡山ノ延曆寺ト抗敵シ、親鸞七世ノ孫兼壽ニ至リ軋轢益、劇シカリキ。兼壽ハ蓮如上人ト稱ス、頗辯才アリ、説法ヲ能クシ御文ヲ著ス、男女歸依シ、多ク金錢ヲ寄附セシヲ以テ、本願寺ノ富ハ大名ニ讓ラサルニ至レリ。叡山ノ宗徒蓮如ヲ惡ミ、後土御門天皇ノ初年ニ本願寺ヲ襲ヒテ之ヲ毀テ、蓮如ヲ逐フ。蓮如近江ヨリ越前ニ赴ク、越前ノ守護朝倉氏、加賀ノ守護富樫氏深ク信依シ、爲ニ道場ヲ作ル。蓮如亂世ニ處スルニ兵力ノ缺ク可カラザルヲ思ヒ、兵ヲ蓄ヘ、衆ヲ脅シテ其ノ宗ニ歸セシム。伊勢ノ專修寺ハ親鸞ノ下野柳島ニ拠メタル寺ナリ、其ノ徒弟眞佛之ヲ承ケ伊勢ニ移ル、是

蓮如兵力ヲ
以テ宗徒ヲ
集ル

加賀能登越前擾亂ス

幕府ノ命令一國ニ過ギ大關東ノ形勢

山内家亂ル

(410)

ニ至リテ、運如ト相競ヒテ其ノ徒ヲ集ム。民間ノ亂ヲ好ム者多ク來リ應マ、一向宗一揆ト稱ス。忽諸國ニ蔓衍セリ。文明以後兩派往々爭鬪シ、朝倉、甲斐、富樫ノ諸大族分裂シテ相戰ヒ、加賀、能登、越前ノ三國大ニ擾亂シタリ。

○四節 關東及兩上杉氏、北條氏、里見氏 應仁ノ亂起リシトキ、諸國ノ守護地頭ハ兩黨ノ破裂スルヲ視、其ノ在京セル者ハ領國ニ歸リ、其ノ在國セル者モ皆機ニ乘ツテ、封疆ヲ爭ヒ、貢租ヲ閉ヂテ納レズ、分崩離拆シテ割據ノ勢トナリ、幕府命令ノ及ブ所ハ山城一國ニ過ギザルニ至レリ。

是ノ時ニ當リ、關東ハ足利成氏古河ニ在リテ堀越ニ抗セリ、而シテ堀越ノ威勢益、縮マリヌ。長尾景仲ノ子景信、上杉顯定ヲ助ケテ武藏、五十子ニ城シ、古河ヲ抑フ。太田道灌モ亦上杉教朝ヲ佐ケテカヲ顯定ニ併セタリ。既ニシテ關東八將モ自家ニ内亂起リ、古河ノ勢復振ハザルニ至レリ。上杉兩管領ノ威望ハ公方ニ越エ、長尾氏其ノ宰タリ、景信ノ子景春ニ至リテ遂ニ背キ、下總ノ成田ニ據レリ。成氏古河ヨリ來奔シ、山内家亂レヌ。扇谷家ハ道灌ノ力ニ因リテ益強大ナリシカバ、山内家之ヲ嫉ミ、離間ヲ行ヒテ道灌ヲ殺サシメタリ。是ニ

扇谷家亂ル

堀越御所亡

幕府關東ノ始メ

北條早雲小田原ニ據ル

由リテ扇谷家モ亦亂レタリ。

堀越政知後妻ノ子義通ヲ愛シ、先妻ノ子茶々丸ヲ疎ミシヲ以テ、茶々丸終ニ父ヲ弑セリ。義通駿河ノ今川氏ニ依ル。今川氏之ヲ京師ニ送ル、後ニ將軍トナリ

義澄ト稱セシハ即義通ナリ。時ニ今川氏ノ客將ニ伊勢ノ人伊勢新九郎長氏

アリ。茶々丸ヲ襲ヒテ之ヲ殺ス。堀越御所此ニ亡ブ。長氏北條ニ城キテ之ニ據リ

伊豆ヲ取ル。時ニ延徳三年紀元二千五百一十一年ナリ。蓋朝命アリシニ非ズ、又宿仇アリシ

ニ非ズ、唯強カヲ以テ人ノ領土ヲ奪ヒ以テ自其ノ主トナリシハ長氏ヲ以テ始

トス。是ヨリ先細川、山名ノ天下ヲ亂スニ當リ、長氏大志ヲ抱キ、竊ニ豪傑ノ士

ヲ集メ、永享以來關東八州ノ主無キニ乗マ、之ニ據ラシメテ計畫アリ。文明八年六

士ト劍ヲ杖キテ東シ、今川氏ノ客將トシテ一城ノ主トナリ、頻ニ士民ヲ撫育セ

リ、而シテ堀越御所ヲ亡ボシテ伊豆ヲ取リシ後ハ、頻ニ仁政ヲ施シ、租稅ヲ減マ

雜課ヲ除キシヲ以テ、衆皆悅服シタリ。長氏伊勢平氏ノ流ヲ承ク、多少北條氏

ニ縁故アリ、而シテ其ノ居ル所ハ舊北條氏ノ領國ナリシヲ以テ、終ニ姓ヲ北條

氏ト改メ、入道シテ早雲ト號セリ。後早雲相摸ヲ略シ、小田原ニ城キテ居リ、兵

關東ニテ鐵砲ヲ用キシハ氏綱ヲ以テ始メトス。
是ノ時古河入將ノ一ナリシ里見家基ノ子ニ義實アリ。安房ノ領地ニ據リ、土豪安西等ヲ屬服シ、房總ノ主トナリヌ。子孫ニ至リテ漸強大トナリ、北條氏ト海ヲ隔テ、抗敵シ、關東ノ兩強族タリキ。

里見氏起ル
御弓御所
北條氏綱里見氏ヲ敗リ御弓ヲ併取ス

勢大ニ振フ。兩上杉氏ノ衰運ニ際シ、其ノ將士北條氏ニ屬スル者多カリキ。早雲死ニ隨ミ子氏綱等ニ遺訓スルニ、兩上杉氏ノ自微弱ニ赴クヲ待チテ、關八州ヲ總統スベキヲ以テス。其ノ法訓ニ十一條アリ。氏綱モ亦善ク兵ヲ用キ、屢上杉氏ト武藏ニ戰フ。關東ニ於テ鐵砲ヲ用キシハ氏綱ヲ以テ始メトス。是ノ時古河入將ノ一ナリシ里見家基ノ子ニ義實アリ。安房ノ領地ニ據リ、土豪安西等ヲ屬服シ、房總ノ主トナリヌ。子孫ニ至リテ漸強大トナリ、北條氏ト海ヲ隔テ、抗敵シ、關東ノ兩強族タリキ。
古河ニテハ成氏遂ニ兩上杉ト和睦シ、明應ノ末ニ卒シ、子政氏立ツ。政氏ニ三子アリ。高基、義明、基頼ト云フ。政氏、高基ヲ廢嫡セントシ、父子相戰フ。高基遂ニ勝チ、政氏隱居シ、二弟出奔セリ。然ルニ天文年中ニ至リ、義明上總ノ御弓ニ居リ、稍勢アリ。里見氏之ヲ助ク之ヲ御弓御所ト云フ。古河ノ高基ノ子晴氏之ヲ憂ヒ、北條氏綱ニ依頼シテ之ヲ滅ボサシム。氏綱乃義明ト里見義堯トヲ鴻臺ニ敗リ、御弓ヲ併取セリ。
太田道灌ノ死後、兩上杉氏稍衰運ニ赴キヌ。北條氏其ノ不和ニ乘シテ兩家ヲ滅

兩上杉氏北條氏ト河越ヲニ戰ヒテ敗ラシム

古河御所亡

武田氏

上杉氏

サントス。是ニ於テ兩家和睦シテ北條氏ヲ伐タントシタリシカドモ、上杉朝定(扇ヶ谷)及憲政(山ノ内)ハ共ニ將帥ノ量ナシ。而シテ北條氏ハ氏綱ノ子氏康立チ、亦善ク兵ヲ用キテ四隣ヲ侵シ、且小田原、大塙等ノ大城ヲ有セシヲ以テ、容易ニ手ヲ下スベカラズ。小田原征伐ノ評議永ク決セザリシヨリ、終ニ世ノ讎トナレリ。今川氏氏康ヲ忌ミ、朝定、憲政及古河ノ足利晴氏等ト連合シテ先河越ヲ攻メ、北條ニ向ハントス。其ノ勢凡ソ八萬騎ナリ。天文十五年、氏康僅ニ其ノ十分一ノ兵ヲ以テ大ニ上杉氏ノ軍ヲ破リ、一戰ニシテ朝定ヲ捕ヘ、憲政ノ平井城ヲ攻メテ之ヲ陷ル。憲政越後ニ走レリ。後數年北條氏遂ニ古河ヲ陷ル。古河御所此ニ至リテ亡ビ、北條氏獨關八州ニ強大ナリ。

○五節 加濃、越、武田氏、上杉氏 源義光ノ裔ニ武田氏アリ、世々甲斐ヲ領セリ。天文ノ頃、其ノ主ヲ晴信ト云フ。沈毅ニシテ深慮アリ。天文七年、晴信父信虎ヲ追ヒテ自立ス。其ノ巨山本勘助等善ク兵ヲ用ク。後終ニ信濃ヲ併ス。晴信入道シテ信玄ト號シキ。

時ニ越後ニ長尾爲景アリ、本山、内上杉家ノ家臣タリ。後自立シテ漸勢ヲ得、天文

中ニ至リ加賀越中ノ一揆ト戦ヒテ死セリ。爲景ノ子景虎幼ニシテ兵ヲ用ウ
ルコト神ノ如ク向フ所敵ナシ。先家中ノ内亂ヲ定メ天文二十年終ニ越後ヲ平
定ス。景虎嘗テ兄ト戦ヒ之ヲ斃シタルヲ以テ出家シテ謙信ト號シ國ヲ去リ
テ其ノ潔白ヲ示サントス。部下ノ諸將強ヒテ之ヲ止メ立テ、主トセリ。時ニ上
杉憲政北條氏康ノ爲ニ敗ラレ平井城陷ルニ及ビテ越後ニ入り、仇怨ヲ捨テハ
身ヲ謙信ニ寄セ父子ノ約ヲ爲シ上杉ノ姓ヲ與ヘ管領ノ職ヲ讓ラントシタリ。
是謙信ノ後ニ北條氏ヲ伐チシ所以ナリ。

武田上杉ノ
軋探

信濃ノ武田越後ノ上杉其ノ境土接續セルヲ以テ早晚軋探ヲ生ゼザルヲ得ズ。
謙信ノ意ハ關東ニ出テ上杉氏再興ヲ名トシテ八州ノ實權ヲ握リ自管領トナ
ルニ在リ。然レドモ武田氏北條氏ト力ヲ合セテ其ノ東行ノ路ヲ遮レリ。又武田
氏ノ意ハ甲斐信濃ノ源氏ノ宗家トシテ此ノ兩國ヲ併セ今川氏ト駿河ヲ争フ
ニ在リ。故ニ先信濃ノ諏訪松尾深志小笠原ヲ滅シ村上義清ヲ逐フ而シテ謙信
ハ義清ヲ庇護セリ。是ニ於テ武田上杉ノ戰端開ク終ニ有名ナル川中島數度ノ
合戦トナリス。

川中島合戦

上杉謙信上
洛シ關東管
領ニ補セラ
ル

謙信北條氏
ヲ伐ツ

川中島ノ戰四回ニ及ビ雌雄尙決セズ。士民兵革ニ苦ムヲ以テ信玄謙信和ヲ講
マ永祿三年紀元二千二百二十年謙信終ニ京師ニ上リ禁闕ニ伺候ス。正親町天皇之ニ酒
及劔ヲ賜フ。又將軍義輝ニ謁シ其ノ諱ノ一字ヲ賜ハリテ名ヲ輝虎ト改ム。義
輝輝虎ニ命ヲテ關東ノ管領タラシム。明年輝虎兵十一萬ヲ率カテ北條氏康
ヲ小田原ニ伐ツ。氏康輝虎ノ勢力ヲ關東ニ振フコト能ハザルヲ察シ迎ヘ戦ハ
ズ。信玄ニ通シテ越後ヲ侵サシメ坐シテ其ノ自退クヲ俟ツ。輝虎果シテ退ク
是ニ因リ輝虎信玄ヲ恨ミ復川中島ニ戦ヘリ。後世軍學ヲ講ズル者往々川中島
ノ戦ヲ以テ摸範トス。此ノ後輝虎關東ノ管領トシテ屢兵ヲ出ダシ北條氏ト戦
フ。而シテ北條氏ノ力ハ輝虎ノ銳ニ當ルニ足ラザルヲ以テ上杉氏ノ軍入レバ
則關東靡然トシテ之ニ從ヘドモ其ノ去ルニ及ビテハ氏康ノ威勢再振起セリ。
而シテ信玄ハ常ニ輝虎ヲ苦メ其ノ全力ヲ舉ゲテ關東ニ注クコト能ハザラシ
メタリ。時ニ關東諸國ハ英雄驅逐ノ地トナリテ常ニ定主ナク人民ノ苦難全
國ニ比ナカリキ

○六駿、遠、參及今川氏、北畠氏、齋藤氏、織田氏、駿河ノ今川氏ハ本足

今川氏

北畠氏

齊藤氏

利氏ヨリ出ヅ。範國ニ至リテ軍功アリ。尊氏之ヲ駿河守ニ封ズ。是ヨリ子孫常ニ足利氏ノ藩屏トナレリ。永祿ノ頃其ノ主ヲ義元ト云フ。駿遠參ヲ領シ頗強盛ナリ。而シテ義元威名ヲ特ニ甚驕慢ナリキ。伊勢ハ平氏ノ舊封ニシテ。南朝遺臣ノ居ル所ナリ。北畠氏其ノ國司トナリ。南北合一ノ後モ猶舊封ヲ保チシニ。是ニ至リテ其ノ強臣分爭セリ。美濃ニハ齊藤秀龍アリ。其ノ子龍興ト和セズ。龍興遂ニ父ヲ弑ス。而シテ織田信長ハ尾張ニ起レリ。

織田氏

織田氏ノ先ハ尾張ノ守護斯波氏ノ家臣ナリ。信秀ノ時ニ至リ。主家ノ衰ヘタルニ乘テ自立シテ尾張半國ヲ領シ。今川齊藤ノ二氏ト闘ヒキ。信秀ノ子ハ即信長ナリ。英邁剛毅ニシテ兵戰ニ長シ。尾張ノ清洲城ヲ取リテ之ニ居ル。又齊藤氏ト戰ヒテ美濃ノ數城ヲ零セリ。永祿三年。今川義元駿遠參ノ兵ヲ以テ來リ攻ム。信長時ニ年廿七。義元ノ備ヘザルニ乘テ。風雨ヲ冒シテ桶狹間ノ營ヲ襲撃シ。義元ヲ斬ル。其ノ臣木下藤吉最軍功アリキ。後四年兵ヲ美濃ニ移シ。齊藤龍興ヲ稻葉ニ襲ヒテ之ヲ滅ボシ。其ノ地ヲ岐阜ト改稱シ。自此ニ居ル。又北轉シテ伊

信長ノ威天下ニ振フ

陶晴賢大内義隆ヲ弑ス

毛利元就給旨ヲ請ヒテ陶氏ヲ討ツ

勢ヲ侵略ス。是ニ於テ信長ノ威名天下ニ振ヘリ。

○七節 關西及毛利氏、尼子氏 初メ周防ノ大内義興上京シテ管領トナリ

シニ。資力繼カズ。且尼子氏ノ侵襲ヲ患ヒテ歸國スルニ當リ。京師ヨリ從ヒ移ル者甚多ク。山口ノ地大ニ繁榮セリ。然レトモ其ノ子義隆ニ至リテ。漸文弱華奢ノ風ニ流レタリ。大内氏ノ臣ニ陶晴賢ト云フ者アリ。入道シテ全書ト云フ。天文二十年主家ニ背キテ山口ヲ攻ム。義隆力盡キテ自殺スルニ臨ミ。幕下ノ臣安藝吉田ノ城主毛利元就ニ遺書シテ復讐ヲ圖ラシム。元就遺書ヲ得テ落涙シ。其ノ子吉川元春。小早川隆景等ト陶氏ヲ伐タンコトヲ計レリ。元就隆景ノ言ヲ納レ。先陶氏討伐ノ給旨ヲ請ヒ。天文二十三年義兵ヲ舉ゲヌ。元就ハ大江廣元ノ後ニシテ器略アリ。遠近ノ將士應ズル者甚多シ。然レドモ平地ノ戰ニ於テハ晴賢ノ兵ニ敵ス可カラザルヲ以テ。嚴島ニ城キテ陶氏ヲ誘出シ。僅ニ三千人ヲ以テ二萬ノ敵ト戰ヒ。一舉ニシテ晴賢ヲ獲タリ。元就周防ニ入り。陶氏ノ殘黨ヲ平ク。長防ノ人民山口ニ雲集シ。西國ノ將士多ク款ヲ通ズ。是ニ於テ元就盡大内氏ノ地ヲ領シ。毛利氏ノ名始メテ高カリキ。

元就尼子氏
ヲ滅ス
元就即位ノ
費ヲ獻ス

西國ニ於テ大内氏ニ次ク者ヲ出雲ノ尼子氏ト爲ス。尼子經久、山名氏ノ衰フルニ乘テ、其ノ領地タリシ備後、伯耆、出雲、隱岐等ノ數國ヲ併セ、出雲ノ富田城ニ居リ、屢、大内氏ト戰ヘリ。義久ノ時ニ至リ、元就既ニ數國ヲ領シ、勢頗強大ナリ。遂ニ富田城ヲ陷レ、義久ヲ逐ヒ、悉尼子氏ノ地ヲ併吞セリ。是ニ於テ元就ノ領地、山陽、山陰十三州ニ跨リヌ。元就勤王ノ志甚深シ、嘗テ正親町天皇即位ノ費用ヲ獻テ、從四位下ニ叙セラレ、大膳大夫ニ任セラレ、後陸奥守ニ遷レリ。孫輝元ニ至リ、亦從四位下ニ叙セラル。元春、隆景カヲ盡シテ之ヲ輔佐シ、毛利氏ノ勢舊日ニ異ナルコトナカリキ。

○節 八國及河野氏、長曾我部氏 四國ハ應仁年中、細川氏ノ一族阿波、淡路、讃岐ヲ併領シテ三好氏國權ヲ執リ、河野氏伊豫ノ一國ヲ領シタリキ。土佐

長曾我部氏
起リ河野氏
衰フ

ニハ攝家一條教房來リ住セシテ奉マテ國司トシ、本山、安藝、太平、津野、山田、吉良、長曾我部ノ七族相爭ヘリ。天文ノ頃ニ至リ、長曾我部元親他ノ諸族ヲ滅シテ其ノ地ヲ併有シ、將ニ四國一圓ヲ併セントスル勢アリ。時ニ河野氏ハ宇都、宮豊綱ト兵ヲ構ヘ、頗危運ニ際セシカド、毛利氏、吉川氏、小早川氏ノ勢援ヲ以テ纒ニ

大友氏

滅亡ヲ免レタリ。而シテ宇都、宮豊綱ハ終ニ毛利氏ニ降レリ。

○節 九州及大友氏、龍造寺氏、島津氏 九州ニ於テハ豊後ニ大友氏アリ、義鎮ニ至リ、菊地氏、秋月氏等ヲ伐チテ其ノ地ヲ併セ、終ニ肥後、筑前、筑後、豊前

龍造寺氏

島津氏

豊後ノ五州ヲ略シ、將ニ全九州ヲ制セントスル志アリキ。肥前ニハ少貳氏ノ部下ニ龍造寺氏アリ。隆信トイフ者、其ノ主少貳冬尙ヲ破リ、自立シテ肥前ヲ領シ、勢甚盛ナリ。薩摩ノ島津氏ハ忠國ノ曾孫勝久ニ至リテ柔弱ナリシカバ、國人歸服セズ、同族忠貞ノ子貴久ヲ奉マテ勝久ヲ逐ヘリ。貴久國亂ヲ平グテ薩摩、大隅ノ諸族ヲ服シ、將士ヲ訓養ス。義久ニ至リ、頗兵略アリ、屢、大友氏ト戰ヒテ之ニ勝チ、威九州ニ振ヒタリ。

第六 織田時代

第七十二章 織田信長

信長兵士ノ
侵掠ヲ禁ズ

○一節 信長入京 將軍義輝ノ弑セラレシトキ、弟義昭出走シ、流寓スルコト三年。織田信長ノ威名ヲ聞キ、美濃ニ入りテ之ニ頼ル。永祿十一年、信長義昭ヲ奉テ京師ニ入ル。乃先洛中ノ法禁ヲ嚴ニシテ大ニ人心ヲ得タリ。信長記ニ曰ハク、角ヲ信長卿ハ清水寺ニ在シケルガ、於洛中洛外ミダリガハシキ輩アラハ一錢キリト御定メ有リテ、則柴田修理亮、坂井右近、將監、森三左衛門、尉、蜂屋兵庫頭、彼等四人ニ被仰付ケレバ、則制札ヲ出シケル。禁制、一當手之軍勢亂妨、藉等之事、一獵ニ山林竹木伐採之事、一押賣押買并退立夫等之事、右條々於違背之輩者、速可被處嚴科者也。仍如件。永祿十一年十月十二日、シカノミナラズ觀察使、檢見等ヲ出サレ、賊ニ制法正シカリケレバ、近里遠境穩ニナツテ、罪ヲ犯ス者一人モナシト。

義昭將軍ト
ナル

時ニ將軍義榮病ミテ薨シ、義昭征夷大將軍ニ拜セラル。義昭信長ノ功ヲ喜ビ、左

兵衛、佐ニ任シ、封ズルニ山城、和泉、河内、攝津、近江ノ五國ヲ以テス。信長固辭シテ請クザリキ。

信長ノ規諫

○二節 信長義昭ヲ諫ム 義昭信長ノ爲ニ將軍ノ地位ヲ得タリト雖、自戒心セズ、行非曲多シ。信長乃十七箇條ノ事ヲ以テ之ヲ諫ム。其ノ中左ノ言アリ、以テ信長ノ意中ヲ知ルニ足レリ。曰ハク、一、國家ノ治道何トシテカ永ク、人道ハ何トシテカ古ニ立チカヘリ。林ニハ成リ候フベシト、晝夜歎キ可思召候フ。他慮オハシマサバ果シテ不可有御冥加事。一事アリタル申事ニ候ヘドモ、天下ハ天下ノ天下ト思シ食シ、萬其ノ御沙汰肝要ニ御坐候フ。善キモ惡シキモ影ノ形ニ添フ如ク、響ノ音ニ應ズル如クニ御坐事。一、上下共ニ一分ノ勤ムベキ權要御坐シマスト見エ申シ候フ。公ハ人ヲ知り玉ヒテ、舉措其ノ所ヲ得ルヲ以テ要トシ玉ハ、治道モ必永ク、福後裔ニ傳ハリ、兆民モ其ノ餘澤ヲ蒙リ候フベシ。未惟フニ、思ヒ内ニ有レバ品外ニ見ル。去レバ國家ノ政道ヲ專トスル者ハ其ノ身ヲ有セズ。學道ニ工夫ヲ費ス者ハ、諫言美ニシテ理當ラズト云フコトナシ、官祿ヲ欲スル者ハ其ノ言飾ル。忠義ヲ思フ者ハ其ノ言直也。食色貨利ヲ好ム者ハ氣必吝

也。功名事業ヲ好ム者ハ氣必驕ル。或詩ニ曰ハク國正天心順官清民自安妻賢夫
 禍少子孝父心寬ト。是皆好メテ爲ス所ノ中ヨリ出ヅル品々ト見ユ申シ候フ。能
 ク々々御工夫肝要ニ存シ候フ。又六藝俊才俱足シテ威名ノタクマシカラシ
 ヲ欲シ、利樂ヲ好ム者博覽博識ニシテ度量伸ビザル者、客慮多ク常心少ク、卓異
 ノ才筆舌共ニ放ナル者ナドヲバ、今世是ヲ賢キ人ノヤウニ申シ成シ候フ。彼等
 コソ多ク世ヲ惑ハス小人ナレト承リ及ビ候フ。カク有レバトテ又一向ニ捨テ
 サセ玉フベクシテ事ノ外ノ御比與タルベク候フ事。一、儒道ノ真學少御沙汰
 可然候フ。國家ヲ知ロシメス御身トシテハ、漢和古今ノ興衰ヲカマミ玉ハズシ
 テハ叶ハザルノ由ニ候フ。某幼少ノ時ハ兵亂耳ニヨリ、左様ノ才覺未練ニ候フ。
 毎事舊例ニ背ク事モ有ルベク候フ。其ノ耻難遁存シ候フ事アリ。一、所詮ハ御
 當家再興ノ爲天下無爲ノ爲、私意ヲ含マセ玉ハズ、便佞ノ輩ヲ召シ放サセラレ、
 遠近トナク賢才ノ者ヲ撰ビ舉ゲサセ玉ヒテ、諸事諫ヲ納レラレ候ハ、政道洩
 ル、所御座有ル間敷候フ事。

義昭信長ヲ
 除カントス

義昭信長ノ諫ヲ聞キテ快トセズ、且其ノ威名ノ日ニ熾ナルヲ忌ミ、終ニ兵ヲ擧

足利氏亡

信長以後戰
 國ノ形勢一
 變ス

信長ノ主義

神川ノ戰

グテ信長ヲ除カントトテ計リシカド、軍敗レテ和ヲ乞ヘリ。信長之ヲ許シ、將軍
 ヲ尊重スルコト故ノ如クナリキ。既ニシテ義昭再兵ヲ起ス。信長擊テ之ヲ
 破リ、義昭ヲ河内ニ追フ。義昭河内ヨリ備後ノ鞆ニ遷リ、毛利輝元ニ依ル。是ニ於
 テ足利氏亡ビ、信長天下號令ノ權ヲ握リタリ。時ニ天正元年紀元二千三百三十二年ナリ。
 ○三 信長近畿ヲ定ム 信長以後ニ至リテハ戰國ノ形勢一變シ、群雄ハ
 單ニ侵略ヲ事トスルニ止マラズ、亦大ニ政略ヲ難ヘ、武力ヲ用ウルニ主義ヲ以
 テシテ、天下ヲ一統センコトヲ圖ルニ至レリ。而シテ信長ノ取リタリシ主義ハ、
 全ク門閥血縁ヲ離レ、純然タル才能主義ニ因リテ人物ヲ登用スルニ在リシモ
 ノ、如シ。宿將丹羽長秀、柴田勝家驍勇ニシテ善ク戰フ。信長之ヲ用キテ先攝
 津河内ヲ定メ、池田勝政、三好義次、松永久秀等ヲ降服セリ。久秀後遂ニ信長ノ
 爲ニ滅ボサレキ。又浪士瀧川一益ノ勇智ヲ擧ゲ、北畠氏ヲ誘ヒテ伊勢ヲ取リ、
 明智光秀ヲ用キテ山名氏ヲ討チ、丹波、但馬ヲ畧セリ。元龜元年紀元二千三百三十二年、信
 長越前ノ朝倉義景ヲ討タントシ、援ヲ徳川家康ニ乞ヒ、先京師ニ入ル。家康乃チ
 兵ヲ將キテ之ニ繼グ。信長遂ニ往キテ義景ヲ攻ム。淺井長政兵ヲ近江ニ稱ゲテ

信長取山ヲ屠ル

義景ニ應ズ。信長引キ還リ長政ヲ討ツ。義景兵ヲ遣シテ長政ヲ援ハシム。信長大ニ之ヲ姊川ニ破ル。是ヨリ先一向宗ノ門主光佐亦攝津ノ石山ニ城キテ甲兵ヲ備ヘ、淺井朝倉ニ應援セリ。京都叡山ノ僧徒モ亦淺井朝倉ニ黨シ、又武田信玄ニ通ツテ信長ヲ圖ル。信長遂ニ兵ヲ起シ、叡山ヲ討チテ之ヲ焚キ、僧侶婦女老少ヲ殺屠シタリ。後又一向宗ノ徒ヲ屠リ、攝津悉ク平ク。

近畿悉平ケ

○四 德川家康ヲ援フ 天正元年信長遂ニ義景ヲ越前ニ斬リテ淺倉氏ヲ滅シ、淺井長政ヲ近江ノ小谷城ニ圍ミテ之ヲ殺ス。又六角氏ヲ降シ三好氏ヲ滅セリ。是ニ於テ近畿悉平ク。然レドモ尙東ニ武田、上杉アリ。西ニ毛利アリ、共ニ義昭ノ説諭ヲ容レテ信長ヲ夾撃セントス。信長東西ニ敵ヲ受ク、乃計策ヲ立

德川家康三河ニ起ル

テ、先參河ノ德川家康トカヲ併セ、以テ徐々ニ東方ヲ定メント欲シタリ。家康ハ今川氏ノ臣松平廣忠ノ子ナリ。義元戰死ノ時十九歳ニシテ先鋒タリ。軍敗レテ岡崎城ニ歸リ、三河ヲ侵略シテ自立セリ。家康沈毅ニシテ大度アリ。武勇智謀共ニ人ニ過ク。進ミテ今川氏ノ舊地ヲ取り、駿遠ノ一向宗徒ヲ平ク、甲斐ノ武田氏ト戰ヒ、二十年ニシテ武名東海ニ振フ。始メテ德川氏ヲ稱ス。武田氏ハ信

長篠ノ戰

信長武田氏ヲ滅ス 瀧川一益ヲ關東管領トス

玄ノ子勝頼ニ至リテ榮耀ニシテ自用非、嬖臣長坂調閑、跡部勝資ノ言ヲ用非、屢兵ヲ參河ニ出シテ家康ト戰ヒ、遂ニ大舉シテ長篠ヲ攻メントス。時ニ天正三年五月ナリ。是ニ於テ家康援ヲ信長ニ請ヘリ。信長家康ノ人ト爲リ、相結托シテ俱ニ天下ノ事ヲ謀ルニ足ルヲ知りテ之ニ應ジ、子信忠ト歩騎五萬ヲ以テ之ニ赴キ、大ニ武田氏ノ軍ヲ破リ、殆ド勝頼ヲ獲ントシタリ。此役武田氏ノ宿將多ク死セリ。後天正十年、信長美濃ヨリ木曾ニ進ミ、家康駿河ヨリ進ミ、共ニ武田氏ヲ伐ツ。木曾伊那ノ兩路風ヲ望ミテ降ル。信長、信忠疾驅シテ甲斐ニ入ル。家康駿府ヲ陷レテ之ニ會ス。勝頼韮崎城ニ敗レ、遂ニ天目山ニ入リテ自殺ス。是ニ於テ武田氏亡ブ。信長駿河ヲ家康ニ與ヘ、信濃、上野、駿河ヲ割キテ有功ノ將士ヲ賞シ、瀧川一益ヲ關東ノ管領ト爲ス。是ヨリ先信長自兵ヲ將非テ淺倉ノ殘黨ト一向宗ノ賊トヲ教賀ニ討チ、越前ノ三郡ヲ前田利家、佐々成政等ニ與ヘ、八郡ヲ柴田勝家ニ賜ヒ、以テ上杉氏ニ當ラシメキ。

○五 羽柴秀吉ヲ用フ 信長木下藤吉ノ才ヲ奇トシ、拔擢シテ宿將ノ列ニ加ヘ、羽柴秀吉ト改稱セシメ、淺井氏ヲ滅スニ及ビテ、長濱城二十二萬石ヲ食

信長羽柴秀吉
利氏ニ當リ

信長毛利氏
ヲ討タント

戰國ノ二大
反逆ノ

武家閑談ノ
記事

(七二〇)

マシム。信長又秀吉ヲシテ毛利氏ニ當ラシメント欲シ、之ヲ播磨ニ封ズ、秀吉姫路ニ城キテ居リ、備前ノ國守浮田氏ト結ビ、備中ニ入リテ山陰道ノ數國ヲ平定シタリ。秀吉備中ノ高松城ヲ圍ムニ當リ、吉川、小早川ノ兩將、毛利輝元ヲ擁シ、大舉シテ來リ救フ。秀吉信長ノ親征ヲ請フ。信長毛利氏ヲ討ツベキ時機ノ至レルヲ喜ビ、諸國ノ兵ヲ徵シ、池田、信輝、明智光秀等ヲシテ先發セシメ、自信忠ト之ニ繼ガント欲シテ安土城ヲ發シ、京師ニ入リテ本能寺ニ館シ、信忠ハ妙覺寺ニ館ス。

○六節 光秀信長ヲ弒ス 天正十年六月二日、信長本能寺ニ宿ス。明智光秀丹波ノ龜山城ニ在リ、信長ノ命ヲ受ケテ西發セントシ、急ニ軍ヲ轉シテ京師ニ入リ、本能寺ヲ襲フ。信長近臣ト出テ戰ヒテ鎗傷ヲ被リ、火ヲ放チテ自盡ス。信忠馳セテ之ニ赴ク。途ニシテ信長已ニ弒セラルト聞キ、退キテ二城ノ第ヲ保ツ。賊兵來リ圍ム。信忠力戰シテ自殺セリ。前ニ長慶將軍義輝ヲ弒シ、後ニ光秀其ノ君信長ヲ弒セリ。是ヲ戰國ノ二大反逆トス。然レドモ光秀ノ信長ニ於ケル寧私憤ニ出テシモノニシテ、敢テ權力ヲ奪ハシノ心アリシニ非ズ。武家閑談ニ曰ハク、

信長光秀ヲ
虐殺ス

「明智日向、守逆心ハ心カラ起ラズ、皆信長公ノ被成タル事也、或時御酒盛アリ、七盃ノ大盃ヲ柴田勝家扣ヘ居リ候フヲ、信長公御意ニ、明智ハサセト被仰、日向、守中々御免被下候ヘト云フ、無理ニサセト被仰候フ處、勝家盃ヲサス、日向、守存シモ不寄難被下ト倦ミ申ス時、信長公御氣色ヲ損シ、御立チカ、リ、日向、守ヲウツフセニ擲シ伏セ、御脇差ヲ抜キ、酒ヲ可呑カ、此ノ脇差ヲ可呑カ、若酒ヲ不呑ハ脇差ヲ呑マサント御折檻、日向、守是非ナク彼ノ大盃ニテ酒ヲ呑ム、其ノ後稻葉伊豫、守家人那波和泉、守齋藤内藏助ヲ、日向、守高知ニテ召シ抱ヘ候フ、伊豫、守方ヨリ斷リ申セドモ不返候フ、是ノ段、信長公御聞キ被成、明智ヲ召シ、早々伊豫、守方ヘ返シ候ヘト御怒リ候ヘドモ、御請不申上候フニ付、信長公御セキ被成、日向、守ヲ御捕ヘ、兩ノ髮ヲ掴ミ、關ノ上ヘ當テ御折檻、御爪明智ガサカヤキニ入り血流レ候フ、日向、守申シ上ケ候フハ、三十萬石ノ大祿ヲ被下候ヘ共、身ノ欲ニ不仕、能キ兵ヲ抱ヘ候ハ、偏ニ御奉公ノ爲ニテ候フト申シ上ケル、其ノ時、信長公、己脇差ヲサシタラバ成敗スル奴ナレドモ、丸腰ナレバ命ヲ助クルト被仰、日向、守モ漸退出セシト也、權現様、穴山梅雪御同道ニテ安土ヘ御登リ有ル時、大寶坊ヲ御

宿所ニ定メ、御馳走ハ明智日向、守護仰付。光秀山海ノ珍物ヲ集メテ用意スル、信長公御鷹狩ニ御出、大寶坊へ御寄被成御覽候へ。五月温氣故、魚鳥サガリ臭氣甚シク、レバ、信長公御機嫌損シ、草鞋召シナガラ拵へ置キ候。膳部已下皆御踏ミワリ、中々御叱リ甚シキコト也。日向、守迷惑シ、又新敷膳部魚鳥ヲ調へ集メ候。フ處へ、毛利輝元備中口へ出張候。間、明智事彼ノ地へ被遣候。間、早々可被下旨也。日向、守大ニ恨ミ、大分ノ支配用意サセ費ヲ盡サセ、又候ヤ西國行ト被仰付、被成度儘ノ被成様ニ、最早是非ニ、不及ト謀反彌極メ候。由ト。

信長ノ政略

○七 信長ノ事業 織田氏ノ政略ハ、旗下ノ功臣ヲ諸國ニ封シ、己將軍トナリテ之ヲ統御シ、天皇ヲ奉シテ以テ天下ニ號令スルニ在リシ者ノ如シ。而シテ人才登用ハ、信長ガ此ノ政略ヲ行ハシガ爲ニ用非シ一手段タルコト上述ノ如シ。サレバ信長ノ權勢ハ、一時畿内五國ヨリ、東海道ハ伊賀、伊勢、志摩、尾張、甲斐、東山道ハ近江、美濃、飛騨、信濃、上野、北陸道ハ若狹、越前、加賀、能登、越中山陰道ハ、丹波、丹後、但馬、因幡、山陽道ハ、播磨、美作、南海道ハ、紀伊、淡路、阿波ニ及ベリ。其ノ他徳川氏ハ、三河、駿河、遠江ヲ以テ、信長ニ附庸シ、浮田氏亦備前ヲ以テ秀吉ト聯合シ

日本中國信長ノ權下ニ屬ス

信長伊勢神宮ヲ改造ス

信長宮闕ヲ修理シ供御田ヲ上ル

信長公卿ノ采地ヲ還附ス

信長右大臣ヲ辭ス

タルヲ以テ、總ベテ三十三國。即日本全國ノ半ハ織田氏ノ權下ニ屬シタリ。而シテ光秀ノ叛逆ニ會ヒ、大業未成ラズシテ斃ル。賊ニ惜ムベキナリ。

○八 信長ノ勤王 信長天下ノ統一ヲ期セントシテ、常ニ天皇ヲ奉戴スル志深カリシハ、史家ノ好ミテ特書スベキ所ナリ。信長伊勢神宮ノ改造久シク

中絶シタルヲ歎キ、三千貫ヲ供シテ之ヲ改造シ、毎二十年改造ノ舊制ニ復シテ、正遷宮ノ儀ヲ行ヒタリ。又應仁ノ亂後兵革相續キ、宮闕ノ大ニ頽廢セルヲ歎キテ之ヲ修治シ、丹波ノ國ニ於テ供御田若干ヲ奉リキ。信長祀天正三年ノ段ニ曰ハク、四月朔日ニ宗徒ノ人々ヲ召シテ宣ヒクルハ、禁中御修理已ニ成就ス。是満足ノ至也。然ルニ公家領大方治却ノミニシテ、其ノ權乏シク見エシカバ、如何様ニモ公家領舊記ニ任セ返シ附クシメズバ、禁中修理シ奉ル甲斐更ニ有ルマ。然レバ治却分當地主失墜ナキ様ニ計ラヒ、如前々本主ニ返シ附クベシト、村井、民部、丞、丹波五郎左衛門尉長秀ニ被仰付、買主ニハ其ノ價ヲ還サレ、悉本主ニ返シ付クラン給フ。又曰ハク、信長公戎夷ヲ討チ隨へ、窮民ヲ救ハントノミ盡夜御心ヲ盡サセ玉ヒシカバ、敷威殊ニ不淺シテ、十二月三日ニ右大臣ニ任セラ

ルベキト勅定有リトイヘドモ、強ヒテ辭シ被申、可然ハ忠功ヲ積ミシ者ニ微官ヲ叙シ被下候フ様ニト申シ上ケラレケレバ、自辭シ臣ニ讓リ被申、處神妙也トテ、木下藤吉郎ハ任羽柴筑前守河尻與兵衛ハ肥前守塙九郎左衛門ハ改メテ原田備中守、築田左衛門太郎ハ改メテ戸次右近、友閑ハ宮内卿法印、武井肥後守夕庵ハ二位法印ニソ任セラル、右ノ御禮被仰上、同十五日ニ岐阜ニ御下向有リケルガ、山岡美作守森次郎左衛門ヲ召シテ、勢田ノ橋朽チタレバ懸ク直シ申スベシト被仰付ト。

是ヲ以テ朝廷ニ於テモ、殊ニ信長ヲ重ンゼラレ、正二位ニ叙シ、右大臣ニマテ任ゼラレキ。

第七豐臣時代

第七十三章 豐臣秀吉

秀吉信長ニ任フ

○一節 秀吉ノ素生 秀吉幼稱ヲ木下藤吉ト云フ。尾張中村ノ足輕木下彌右衛門ノ子ナリ。幼ニシテ父ヲ喪フ。母他家ニ再嫁スルニ及ビテ、父ノ遺錢ヲ以テ清須ニ出テ木綿針ヲ買ヒ、行商シテ濱松ニ到リ、彷徨シテ立身ノ路ヲ求ム。久能城主松下嘉兵衛收メ歸リテ奴トス。機敏ヲ以テ主ノ爲ニ親信セラル。然レドモ同列ノ嫉ミヲ受ケ、去リテ尾張ニ歸リ、自木下藤吉ト稱シ、織田信長ノ英傑ナルヲ聞キ、其ノ出ヅルヲ計リ、途上ニ見參シテ足輕ニ登用セラル。信長其ノ才ヲ愛シ、拔擢シテ兵ヲ率井シムルニ、百戰百勝ヲ期スベシ、就中桶狹間ノ戰ニハ功名拔群ナリキ。信長乃之ヲ織田氏宿將ノ列ニ加ヘ、丹羽、柴田二將ノ姓ヲ取リテ羽柴秀吉ト改稱セシメ、淺井氏ノ長濱城二十二萬石ヲ食マシメタリ。

○二節 秀吉入京 光秀ノ信長父子ヲ弑セントキ、秀吉西國ニ在リ、方ニ毛利輝元ヲ伐チ、備中高松城ヲ陷レントス。輝元五國ヲ納レテ和ヲ求ム。未成ラズシ

秀吉光秀ヲ
討ツ

秀吉入京シ
テ嗣ヲ讓ス

秀吉三法師
ヲ立ツ

賊ヶ嶽ノ戰

(七三二)

テ變報ニ接ス。秀吉深ク之ヲ秘シテ和約ヲ訂シ、即軍ヲ返シ、信長ノ三子神戸信孝ト大坂ニ會シ、軍ヲ合セテ京師ニ向ヘリ。光秀牒ヲ諸將ニ通ズレドモ敢テ應ズルモノナシ。秀吉ノ軍ヲ山崎天王山ニ要シ、一戰シテ敗ラレ、小栗栖ニ至リテ土民ノ爲ニ殺サレタリ。

秀吉入京ス。北島雄信、丹羽、柴田、瀧川等ノ諸將モ亦來リ會シ、嗣ヲ讓ス。秀吉ハ信忠ノ子三法師丸嫡孫ナルヲ以テ之ヲ立テントス。丹羽、柴田ハ信孝ヲ推シ、瀧川ハ信雄ヲ推ス。秀吉固ク正義ヲ取り、信長父子ヲ葬リ、法會ヲ大徳寺ニ修メ、毛利、上杉等ノ使及諸將ヲ會シ、三法師ヲ喪主トシ、自束帶シテ之ヲ抱キ、首メニ香ヲ拈シテ群議ヲ定ム。堀史 三法師幼ナルヲ以テ信雄、信孝其ノ後見トナリ、秀吉、勝家等交代シテ事ヲ執ル。信雄、信孝固ヨリ相善カラズ、信孝暗愚ナリ。岐阜ニ居リ、柴田、瀧川ト黨シ、信雄及秀吉ヲ除カント計ル。柴田ハ越前ヨリ、瀧川ハ伊勢ヨリ同時ニ兵ヲ起シタリ。是ニ於テ秀吉兵ヲ越前及伊勢ニ分遣シ、自岐阜ニ向ヘリ。越前ニ向ヘル兵賊ヶ嶽ニ於テ柴田勝家ノ姪佐久間盛政ノ爲ニ敗ラル。秀吉乃急行シテ至リ、一戰シテ盛政ヲ破リ、遂ニ柴田ヲ越前ニ滅シタリ。加藤清

正等賤ヶ嶽七本鎗ノ功名ヲ博セシハ即是ノ時ナリ。信孝ハ信雄ノ爲ニ誘殺セラレ、瀧川一益ハ降リ、秀吉ノ權勢獨盛ナリ。

○三 小牧ノ陣 天正十二年、信雄秀吉ヲ忌ミテ之ヲ除カント欲シ、徳川家

徳川家康秀
吉ノ軍ヲ長
久手ニ破ル

秀吉四國九
州ヲ經略ス

當時ノ二大
人傑

康ニ依頼セリ。家康義侠ヲ以テ、信雄ヲ助ク、秀吉ト尾張ノ小牧ニ對陣ス。秀吉家康ノ不在ニ乗リテ參河ヲ抜カント欲シ、密ニ將士ヲ分遣ス。家康之ヲ知り、輕兵ヲ率テ追ヒ討チ、長久手ニ於テ大ニ敵軍ヲ敗リ、其ノ三將池田勝入父子、森長可ヲ殺ス。秀吉敗ヲ聞キテ、自長久手ニ赴クハ、則家康既ニ兵ヲ引キテ小牧ニ歸レリ。秀吉家康ノ神速ヲ嘆稱シ、容易ニ勝ツ可カラザルヲ知り、乃信雄ト和ス。此ノ役大ニ徳川氏ノ名聲ヲ高クシタリ。家康モ亦秀吉ノ降シ難キヲ知り、容易ニ事ヲ舉グズ。秀吉此ノ間ニ乘リテ四國九州ヲ經略ス。天正十三年、長曾我部氏ヲ伐チテ四國ヲ取リ、十五年、島津氏ヲ伐チテ九州ヲ略セリ。

○四 秀吉家康ノ關係 秀吉家康ハ當時天下ノ二大人傑ニシテ、智謀武

勇二人ニ并フ者ナカリキ。家康ハ慎重ニシテ事跡ニ通ジ、計慮深遠ニシテ大政事家ノ器量アリ。秀吉ハ英敏明達ニシテ善ク情勢ヲ知り、機ニ臨ミテ奇計百出

ス。又質朴ニシテ文飾ナク胸中一點ノ屈曲スルモノナカリキ。サレバ日本向
 後ノ機運ハ實ニ此ノ二人ノ關係如何ニ因リテ定マリタリ。而シテ二人トモニ
 單純ナル侵略主義ハ到底長久ノ結果ニ至リ難キヲ知り、早ク戰國ノ積弊ヲ除
 キテ一統ノ治ヲ致シ、上一人ノ宸襟ヲ安ソ、下萬民ノ塗炭ヲ救フヲ以テ功績
 ナ立ツル所ト思惟シタリシハ、實ニ國家ノ幸福ト謂ヒツベシ。秀吉以爲ヘラ
 ク、我家康ト戰ハ、戰亂底止スル所ヲ知ラズ。若戀和セバ天下ハ二人ノ掌中ニ
 歸セン。而シテ家康ハ義ニ於テ織田氏ノ遺業ヲ繼グ者ニ一步ヲ讓ラザルヲ得
 ザルベシト。乃其ノ妹ヲ家康ニ嫁シ、又母ヲ質トシテ參河ニ遣シ、胸襟ヲ開キテ
 家康ノ入朝ヲ促ス。家康始メハ秀吉ヲ疑ヒシカド、後其ノ心意ヲ察シ、天下ハ一
 タヒ秀吉ニ歸スベキ機運ナルヲ知り、甘ソワテ入朝シタリ。此ノ時東北ニ上杉
 景勝アリシカドモ、既ニ款ヲ秀吉ニ納レヌ。關東ノ北條氏、奥羽ノ伊達氏、秋田氏
 未秀吉ノ命ヲ奉ゼザリシノミ。サレバ家康ノ入朝ハ、即秀吉天下統一ノ始メナ
 リシナリ。

○五 關白ニ任ジ姓ヲ賜フ 秀吉布衣ヨリ起リテ天下ニ號令スル權ヲ

家康秀吉ト
和シテ入朝
ス

秀吉始メテ
姓ヲ豐臣ト
稱ス

秀吉大坂城
ヲ築ク
大神宮ノ遷
宮ヲ行ヒ仙
洞ヲ造營ス

得シハ、門閥主義ノ最十分ニ破レタル時ナリキ。然レドモサスガニ形名ヤ幕ハ
 シカリケン。當時京師ニ在リシ前ノ將軍足利義昭ニ就キテ其ノ猶子トナラン
 コトヲ乞ヒヌ。義昭零落シタレドモ、尙秀吉ヲ賤ミテ其ノ求ニ應ゼザリキ。王代
 一覽ニ曰ハク、七月秀吉征夷將軍ニ任セラレノコトヲ欲シテ、室町ノ義昭入道
 昌山ニ請ヒテ養子トナラシメ、義昭族譜ヲ賤ンテ同心セズ。秀吉スナ
 ハチ菊亭晴季ト議シテ、二條關白昭實ヲシテ辭退セシメテ、秀吉關白ニ任マレ
 一位ニ叙ス。參内ノ時信雄、秀長、秀次、前田利家、浮田秀家、尾從ス。其ノ外諸大名俱
 奉ス。昭宣公以來藤原ノ嫡流ニアラスシテ、他姓ノ人ノ關白トナルコト是ヲ始
 トス。秀吉新ニ姓ヲ改メテ豐臣ト稱ス。其ノ一族皆豐臣姓ヲ用シ、他族ト云フト
 モ恩顧深クレバ豐臣姓ヲ賜フト。

○六 形樣ヲ修ム 秀吉關白トナリテ稍、文飾ヲ重ンマ、先攝津ノ大坂城ヲ
 築キテ市區ヲ計畫シ、大ニ商工ヲ聚メテ大都會トナス。又京都ニ聚樂ノ第及
 方廣寺ヲ作り壯大ヲ極メタリ。秀吉又兩大神宮ノ遷宮ヲ行ヒ、仙洞ヲ造營ス
 大間記ニ曰ハク、秀吉公御藏入領貳百萬石餘有リシカバ、金銀米錢集マリヌル

秀吉金銀ヲ
諸侯大夫ニ
頒ツ

コト夥シキ事ナリ。斯様ニ逐年財寶集マリ來ルヲ施サシメバ、慳食クツレトヤ
ランニ違フ由ナリ。左モ有ルコトモヤト由己法眼ニ問ヒ給フニ、仰イト宜シク
侍ル旨申シ上ケシカバ、サラバ施シテソトテ、天正十三年初秋ノ比金子五千
枚、銀三萬枚諸侯大夫等ニ施シ給ヘリ。聚樂門南ノ方ニシテ臺ニスエナラベ御
賦リ有リシガ、朝ヨリ晚ニ至リテ事盡キニクリ。此ノ後又其ノ沙汰ニ及ビ給ヘ
リ。京童見物シテ興サメツ、云ウヤウハ、活潑々地ナル事カナ、古今ニ傑出シ給
ヘル君ナリトテ感マアヘリキト。

(七三〇)

後陽成天皇

秀吉家
第ナリ
トス

第七十四章 豐臣秀吉ト朝廷

○節一 後陽成天皇 カクテ戰國ノ天皇トモ申シ奉ルベキ正親町天皇ハ、在
位二十九年ニシテ位ヲ皇孫ニ讓ラセ給ヒヌ、之ヲ後陽成天皇トス。尙天正ノ號
ヲ用弗ラレキ。織田信長朝廷ノ尊ヲ知リテ、勤王ノ志甚篤カリシコトハ前述
ノ如シ。而シテ此ノ點ハ秀吉モ亦信長ニ優ルトモ劣ラザリシハ、足利氏ノ時代
ニ比較シテ著キ進歩ト謂フ可シ。太閤記ニ曰ハク、今上皇帝十六歳ニシテ御即
位有リ。百官傾於巾子、萬人無不合于掌寔ニイミマカリケル幸ナリト人皆云ヒ
アヘリケリ。古今富ミ榮エヌル人ヲ見ルニモ氣自緩カニ、心自正シキニヨレリ。
サレバ秀吉公ノヤウナル大臣出テ給フモ天氣淳ニ尊赫ナルガ故ナリ。此ノ
帝德ヲ秀吉イト難有思ハレシカバ、イカデ行幸ヲ催シ見ザランヤトテ、天正十
三年ノ春、内野ニ城郭ノ營ミヲオボシ立チ給フニ成就ニ及ビナハ必可奉進
行幸トナリ。其ノ御心根深クシテ鞏固カリシカバ、漸調ヒテ聚樂ト號シ、里第ヲ構
ヘ、四方三千歩ノ石ノツイガキ山ノ如シ。樓門ノ堅メハ鐵ノ柱、銅ノ扉、瑤閣星ヲ

飾リ、瓦ノ縫ハ玉虎風ニ囀キ、金龍雲ニ吟ズ。如此造リ畢リシカバ、天正十五年九月十八日、從大阪聚樂へ御移徙有リシナリ。萬ノ調度金銀積ミタル船數百艘、淀ニ至リテ着キニケリ。淀ヨリハ車五百輛、人足五千人ニテ京着有リシナリ。御迎トシテ公家衆、諸侯大夫、淀鳥羽邊ニ滿ケト並ミ居マシシカバ、イカメシヤカニ由々シカリケリ。翌日ヨリ九月下旬ニ至リテ御祝儀ヲ奉ル事、恰モ門前ニ市ヲナスガ如シ。儲ノ御所ハ檜皮葺ナリ。御ハシノ間ニ御コシヨセ有リ。庭上ニ舞臺有リ。左右ノ樂屋有リ。後宮ノ局ニ至ルマデ、百工心ヲ碎キ、丹青手ヲ盡シ侍リシカバ、美麗尤甚シ。人皆目ナレヌ事ヲノミ云ヒ合ヘリケリト。

○二聚樂ノ御幸

天正十六年、天皇及上皇聚樂ニ幸シタヘリ。足利氏以來絶エテ無カリシ盛事ニシテ昌平ノ象自現レタリ。秀吉此ノ時ヲ以テ家康以下ノ大名ヲ集メテ勤王ヲ誓ハシメキ。太閤記ニ曰ハク、抑、過キコシ方ノ行幸アマタ、ヒニシテ其ノ數ヲ知ラス。今秀吉オボシ立チ給フハ、北山殿應永十五年、

室町殿永享九年ノ行幸ノ例トゾ聞エ侍ル。鳳輦牛車等ノ品々、久シク廢レシ事共ナレバ、知レル老人モ定カニモ侍ラズ。攝家華族ノ説モマテマテニ、其ノ争ヒ

秀吉行幸ノ故實ヲ調査セシム

聚樂行幸ノ圖式

イト多シ。雖然、德善院玄以承リテ、或ハ諸家ノ記録ヲ伺ヒ見、或ハ故實ノ職者ニ尋テ搜リ、其ノ牒大カタ成リニケリ。寔ニ不尙ノ身トシテ、カ、ル大功ヲ思ヒ立チシ事、冥加ノ至リナリトテ、莫大ノ費ヲモ厭ヒ給ハズ、其ノ用意多クノ數々ニテ侍リシカ共、二歳餘リニシテ全備セシナリ。大器ハ晚ク成ルトイヘル事モ故アルニ似タリ。去ル臘月ヨリ吉日、辰ヲ陰陽博士ニ仰セテ撰ヒ給フニ、三月十五日トナシ。然ハアレド今年ノ閏ハ夏五月ニ在リシ故ニヤ侍リケン。餘寒尙甚シク、風雪イタシアレケレバ、爰ニ至リテ殿下、イヤイヤ吉日ハ餘寒ニ勝ラサ。唯天ノ穩ナラン時コソ、辰ナルベケレトテ、三月十日比ヨリ、件ノ日限ヲ差シ延ベ給ヘリ。カクテ寒去リ暑來リシカバ、卯月十四日行幸有ルベシトナリ。既ニ其ノ日ニモ成リヌレバ、殿下夙ニ起キ出テ、禁中ニ至リテ、夫々ノ奉行職事ヲ集メ給フテ、未ユルヤカナル様ニ見エシヲ、殊ノ外急ガセ給ヒケリ。衆ヲテヨリ皆儲ノ御所ノ御氣色ヲ窺ヒ奉ルニ依リテ、衛府ノ輩弓箭ヲ帶シ、上達部以下參リツドフ。御殿ノ守リノ事ヲ諸々ト被仰定畢ヌ。奉行職事悉具シタルヨシ、奏レケレバ、即南殿ニ出御アリ。御束帶ノ御衣ハ山鳩色トカヤ。御殿ヨリ長橋ノ御後

マテ庭道フタンマキル。殿下御裾ヲ取り給フ。陰陽師反問ヲ務ム。國司奏鈴ノ奏モ例ノ如シ。殿下笏ヲナラシ給フテ勅答ノ由ヲ告ケ給フ。御劍頭中將慶親朝臣、御草鞋頭、辨充房朝臣、風輦ヲ御階ノ間ニ寄セ侍リテ、左右ノ大將御綱以下例ノ如ク勤メラル。四ツアシノ御門ヲ北へ、正親町ヲ西へ、聚樂亭マデ十五町ノ間辻面メ六千餘人ナリ。先エボシキノ侍ヲ渡シ侍リテ、國母ノ准后ト女御ノ御輿ヲ始メ、大典侍御局、勾當其ノ外女中衆ノ御輿五十餘丁。皆下簾アリ。御輿添百餘人。御供ノ人々童姿ナドマデモ流石ニ見エテ花ヤカナリ。中略設ノ御所ニハ三日ノスサビオハシマシテヨリ還御ナシ奉ラント、兼テテノ御定ナリシカ共、御氣色宜シク見エ侍リシニ依リテ、猶色々ノスサビテ催シ、五日ノ御滯座ニテ還御ナシ奉リ給フト。

○三 帝室御領ヲ定ム

秀吉聚樂御幸ノ御禮トシテ、帝室ノ御料ヲ定ム奉レリ。太閤記ニ曰ハク、今度ノ行幸規式、後代ニ吾ガ心ヲ次ク者アリテ、朝廷彌榮エサセ侍ル様ニト祝シ給ヒクリ。依之禁中正税ノ爲、落中ノ地子悉末代ニ至リ、無相違ニ務トシテ納メ奉リ候フ様ニトテ被仰出御一行之事。

太閤記ノ記

- 一 京中銀地子五千五百三十兩餘、可爲禁中御料所之事
- 一 米地子八百石之内三百石院御所、五百石六宮關白領
- 一 於江州高島郡八千石諸門跡諸公家衆へ進之、右如件

若御奉公懈怠之輩於有之者爲敵慮御計被成候様ニ可被仰上者也、

天正十六年卯月十五日、秀吉、菊亭殿、勸修寺殿、中山殿殿下、

○四 諸將ヲシテ勤王ヲ誓ハシム

同書ニ又曰ハク、ツラミミ禁裡仙洞ノ事、過ギニシ方行ク末ヲカヨハシオボシ煩ノサセ給フニ、只今堂上ニ在ス人々ハ、皆蒙殿下之厚恩者也。掛タマクモ悉クモ殿上ノ交ヲ聽サレ、今奉遇斯行幸物カナト、徹骨隨可令感悅事也。然者至子々孫々、可奉守護於上事、其ノ身ノ冥加ナルベシ。雖然蔽私欲無道ノ心モヤ出テ來ント誓約被仰付次第、尾張内大臣信雄公、駿河大納言家康卿ヲ始メ對禁中不可存無禮之旨、誓紙ヲ上ラレ宜シク侍ラントナリ。各承リテ謹ミテ諾之。略中

敬白起請文前書之事、

一 就今度聚樂亭行幸之儀、各致昇殿供奉之事、誠以難有奉存候事、

諸侯伯ノ起請文

太閤記ノ記

一禁裏御料所地子以下并公家衆御知行等存疎意間敷候若被蔽私欲無道之輩於有之者爲各違而可致諫諭候當分之義ハ不及申至于子々孫々無異體ニ可申置之事

一關白殿被仰出趣於何等之義聊不可存違背之事

右條々若雖爲一事於令違背者梵天帝釋四大天王總日本六十餘州大小神祇殊王城鎮守神八幡大菩薩春日大明神天滿大自在天神別氏神部類眷族神罰冥罰各可罷蒙者也仍起請文如件

天正十六年四月吉日内大臣平信雄大納言源家康權中納言豐臣秀次參議左近衛中將豐臣秀家右近衛權少將豐臣利家金吾殿同時別紙督紙有之面々土佐侍從秦元親龍野侍從豐臣勝俊京極侍從豐臣高次井伊侍從藤原直政金山侍從豐臣忠政伊藤侍從豐臣定次豐後侍從豐臣義統曾根侍從豐臣貞通岐阜侍從豐臣照政源五侍從豐臣長益松任侍從豐臣長重越中侍從豐臣利長敦賀侍從豐臣頼隆河内侍從豐臣秀頼三吉侍從平信秀松賀島侍從豐臣氏郷北庄侍從秀政東郷侍從豐臣秀一三河侍從秀康丹波少將豐臣秀勝穴津侍從平信

兼金吾殿

○五財寶ヲ分ツ

寛文板太問記ニ曰ハク五月秀吉公思ヒ給ハク天下ヲ

掌ニ納メ金玉ニ乏シカラズ空シク貯ヘ積ミテ用非ザレバ金玉ト石瓦ト何ソ別ナラン是ヲ分チ與ヘテ賑サントテ聚樂ノ門内二町ノ間ニ金銀ヲ臺ニ積ミテ並ベシム見ル者目ヲクルメカシ魂ヲ驚カス夥シキ事云フ計リナレ公家武家參リツドフ奉行承リ金銀ヲ積ム事臺毎ニ百枚四人シテ是ヲ昇キ出シ一人ゾ、召シ出テ拜領ス總高金銀三十六萬五千兩ナリト云ヘリト

○六北條氏ヲ滅シ德川氏ヲ封ズ

天正十六年秀吉使ヲ相模ニ遣シ

北條氏政ニ入觀センコトヲ諭ス氏政竟ニ諷リテ來ラズ秀吉大ニ怒リ勅ヲ奉マテ討伐ス弟大和納言秀長大阪ノ留守タリ安藝參議毛利輝元京師ノ留守タリ尾張内大臣織田信雄參河大納言德川家康越後參議上杉景勝加賀參議前田利家等軍ニ從フ總軍大凡二十萬ナリ氏政ハ氏康ノ子ナリ才畧ナク徒ニ富資ト地理トヲミシヲ以テ戰利ナク遂ニ自殺セリ北條氏亡アルニ及ヒテ東國復秀吉ニ抗スルモノナク伊達南部津輕秋田ノ諸族相繼ギテ降レリ秀

寛文板太問記

北條氏

秀吉海内ヲ一統ス

(七四四)

吉家康ヲ北條氏ノ舊地ニ封マ、之ニ教ヘテ武藏ノ江戸ヲ居城ト爲サシム。是ニ於テ一統ノ業全ク成リヌ。
天正十九年秀吉關白ノ職ヲ養子秀次秀吉ニ譲リ爾後太閤ト稱シタリキ

第七十五章 朝鮮征伐

朝鮮征伐記ノ記事

朝鮮王ノ使名來ル

秀吉ノ朝鮮國王ニ與ヘタル返牒

○一節 朝鮮國王トノ往復 朝鮮征伐記ニ曰ハク、關白秀吉公數年ノ間ニ天下ヲ席卷シ、四海ノ外モ其ノ威ニ服シ、天正十六年戊子ニ聚樂ノ城ヲ築キ、城闕震ニ聳ヘ、樓臺玉ヲ琢キ、秦宮ノ壯麗ヲ摸シ、良岳ノ景趣ニ過ギタリ。又天子ヲ挾ミテ天下ニ令シ、不臣ノ者ヲ誅セシ爲ニ、内裏ヲ改メ、造リ、御領ヲ還附シ、自身關白職ニ備ハリ、百官ヲ從ヘ、公家ノ政道モ彼ノ下知ニアラズト云フコトナシ。同年ノ春、聚樂ノ第ヘ行幸ナシ奉リ、尊崇ヲ極メ、華美ヲ盡ス。關白恩顧ノ武將、其ノ品ニ隨ヒテ任官昇進ス。其ノ上ニ關白諸大名ニ誓紙ヲカ、セ、後期末代マテモ天子ヲ崇メ奉リ、時々拜勤怠ルマコト、堅ク約束ヲ定メ、内裏ヘ納メ奉ル。朝鮮國王是ヲ聞キテ三使ヲ遣シ、賀表ヲ上リ和ヲ乞フ。中方物ヲ受ケ、使者ニ對面シ、返牒ヲ被遣。朝鮮ヨリ大明ヘ使者ヲ遣シ、前代ノ如ク日本勘合ノ船ヲ遣ス。儀ヲ調フベシ。大明異議ニ及バ、朝鮮王先驅スベシ。大明國ヘ打テ入り、四百餘州ヲ切リ隨ヘ、大明皇帝トナルベシト仰セ遣サル。其ノ狀ニ曰ハク、日本國關白秀吉